

死を視る王

水天宮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

常勝の王、偉大なる騎士王。

その瞳には、常に「死」を映していた。

目次

第四次聖杯戦争

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
238	207	186	155	121	87	69	52	33	1

幕間 i f

第六特異点

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
517	499	480	461	440	411	382	339	299	272

伝承にいわく。

アーサー王には三つの顔があつた。

一つは、公平無私に物事を進め、定める清廉とした名君として。

一つは、冷酷無慈悲に敵対者を排し、徹底した合理を推す暴君として。

そして一つは、王の責務も器も関係なく、一人の小さき人間として。

荒れた海峡を見つめる。

今立っている大陸側は日差しが差し、麗らかな春の日和だ。

対する離島側は漆黒の暗雲が立ち込め、今にも稲光が奔りそうだ。

「王。民の避難が終えました。ローマ側も、契約を破棄する考えはないそうです」

「そうか。それもそうだろうな。如何な腹黒とて、「アレ」には、誰も関わりたくなからう」

「ルキウス帝は、王に追従する腹積もりと思われませんが」

「よい。……これまで色々あったが、それはそれでありがたい」

アグラヴエインの報告に応答する。

日々の激務による疲労で草臥れた顔が常であったが、現在は一層疲労の目立つ面持ちだ。

「父上！」

「——モードレット」

娘息子の声で、初めて振り返った。

自分と同じ顔……跳ねた毛先や、つりあがった目尻姉に母の面影を見る。

……そういえば、姉上はどうしているだろう。

「俺も、俺も連れて行ってください！ あんなのに俺たちの国が滅ぼされるなんて——」

——

「すまぬ。それだけは、出来ない。分かってくれ」

「つ……………」

それ以上、モードレットは何故とも、ひどいとも言わなかった。

^{彼女}彼は少し粗暴な振る舞いをするが、決して暗愚ではない。

王とも父とも仰ぐ人物が、何故自分を置いて戦いに挑むのか、理解できない子ではないのだ。

「だが……そうですね。どうか、民を頼みます。いつか、新たな国が生まれるまで、生まれてからも、民を護り、民を導いてほしい。優しい貴方のことだ。きっと、できるでしょう」

「俺に、新しい国の王になれってことですか？」

「それは……さて、どうでしょうね。未来はまだ、誰の手にもわたっていませんから」
貴方ももしれないし、貴方じゃないかもしれない、と付け加えた。

「滅ぶのは確かに哀しいかもしれませんが、それでも、何もかも終わったわけではありません。ブリテンの民だった彼らならば、この先も強く歩み、強かに生きることが出来るでしょう。……ただ、その手助けを頼みたい。貴方にも、他の騎士たちにも」

「俺に……俺たちに、出来るでしょうか？」

「出来ますよ。だって、これまで私に従ってくれた、誇り高き円卓の騎士なのですから」

モードレットも、いつの間にか集まっていた他の騎士たちも沈黙している。

この言葉から、彼らが何を考え、何を感じ、何を思ったのかは分からない。

最も、「人の心が分からない」怪物なのだから、当然といえば当然かもしれない。

「まったく、相も変わらず頑固なことだ」

「マーリン」

声に返答する。

「これがキミの旅の果て……いささか興ざめの様な、そうでもない様な気もする。何とも不思議なことだ。いずれ崩れ去ったであろう円卓は、突如降ってきた超級の災厄の前に団結し、王独りが戦に身を投じる」

「そうですね。ですが。あまり悲観していません。ブリテンという国は終わりますが、ここに暮らした民はまだ未来がある」

沈黙する最初の師に最後の挨拶を。

「ありがとう、マーリン。貴方が私の師で、本当によかった」

些か、彼の笑みが悲しく見えたのは、錯覚だろうか。

「もう、行きますね」

「父上……王、アーサー王。我が忠義劇を奉ずるただ一人のお方。俺……私は、私たちは、貴方と共に在れたこと、本当に喜ばしく思います。これまでの日々、誓って忘却いたしません。本当に、ありがとうございます」

そう言つて、モードレットは膝をついた。それに従うように、他の騎士たちも膝をつく。

しばし、静寂が海岸を訪れる。

もう思い残すことはない。出来の悪い王だったかもしれないが、それでも私が歩んだ道だ。

後悔なんて、どこにもない。

振り返り、脚に力を入れ、魔力を溜める。最期の仕事を、やりに

「待ちなさいよ」

肉体が硬直する。

精神が融解する。

魔力が霧散する。

……どうしてか、彼女に会いたくなかった。

「……やめろ、テメエ」

「絶対に嫌。アタシは認めないわよ。あんた一人が、あのバケモノの犠牲になるなんて」
「レディ、ここは下がっていただきたい。もうすでに、王は敵の排除を決められた」

「あんたらはそれでいいかもしれないけど、アタシは嫌よ。絶対に嫌」
強靱な足音がする。

しばらく見ないうちに、とても強い女性に育っていた。

「……ねえ。アタシとの約束、破る気？」

喉の空気が停止する音がした。

「あんた言ったわよね？ アタシが作ったアップルパイが食べたいって。その時、アタシはあんたのクッキーがいいって言った。それに、チビたちとも遊ぶって言ったでしょ

う。アタシの妹が出産したら、顔を見たいって言ったのも忘れた？」

「——それでも、私は行かなくてはならない。貴方たちの、未来のために」

「どうもありがとう。でも、それじゃ駄目。絶対にダメ。王様らしくアタシたちの幸せを考えてるのはわかるわよ」

でも、と言葉を切る彼女に、やめろとも聞きたくなくとも言えなかつた。

「あんたの幸せは、どこにあるっていうのよ」

「——、っ——」

「……何とか言いなさいよ、あんたにとって、アタシは声すらかけない存在だっていう訳？」

「レディ——！——」

「言いたいことがあるならばつきり全部言ったらどうなの!!!」

こみあげる感情を抑えられない。

彼女たちの前では、人間でいられた。育んだ人間の心が、暴れ出して、收拾がつかない。

「っ……そんな、は、ありません。私の友。貴方の前では、人間でいられた。本当に、

ただの小娘だった」

「だったら——！」

「でも！……でも、行くしか、ないので。私は、女である前に、王……なのですから」
「王様なら、ちゃんと約束守りなさいよ!!!」

思わず振り返った矢先、鋭い平手が頬を穿った。

目元が朱い、亜麻色の髪が艶やかな妙齡の女性が視界に大きく映る。

……いつの間にか、随分美人になったなあ。

そんな、場違いな感想が浮かんだ。

「イヤよ、行かないで、死んじやいや……あんたがいないなら、幸せなんてこれっぽっちもないわよ……!!!」

「——ごめんなさい……ごめん、ごめんね、ごめんね……!!!」

ああ、決壊してしまった。

彼女に正面から抱きしめられて、目頭が熱くなり、視界が歪んでいく。

「バカ！ アホ！ 最低！ あんたなんて、あんたなんて——うう、あああああ

………!!!
 「ごめんね、ごめんね……ごめんさい、ごめんさい………!」

ボロボロと涙をこぼし、わんわんと泣き叫ぶ。

……騎士たちの前でこんな醜態を晒すときが来るとは思わなかった。

「——わたくしも、彼女と同じ気持ちですわ」

「っ、ギネヴィア……?」

同じように、進み出る王妃。目元は赤く、頬に涙が伝っている。

「本当に、楽しかったのですよ? 貴方様について、宮廷を抜け出し、身分を隠して、皆様と過ごす日々が。ささやかなものでしたが、心温まるようでした。あの時は、王と王妃ではなく、ただ友として在れたのですから」

「そっか……なら、よかった……の、かな?」

「当然ですわ。サラさんと、ご家族と、何より貴方様と何の気負いなく語らうことが出来

ましたもの」

ぐすぐすと鼻を鳴らし、目元を拭うギネヴィア。

そんな顔をしないでくれ。これじゃあ、何だかランスロットにも申し訳ない。

「ん……………ありがとう、ギネヴィア、サラ。でも、ごめん。わたしは行くよ。こればかりは、どうしようもない」

「はぁ……………ほんつつつとうに頑固よね。知ってたけど。昔つから変わらないわ」

「む、ひどい」

「ど」がよ。……………けど、一つだけ約束しなさい」

腰に手を当て、勝気そうにニツコリと微笑むサラ。

見慣れた彼女の姿に、またこみ上げるものがあつた。

「いい？ 絶対に帰ってくるのよ？ さもなくば、「アーサー王は女との約束も守れない大馬鹿だ」って後世に伝えてやるわ」

「それは勘弁してほしいなあ……………」

「なら帰って来てくださいませ。わたくし達は、ちゃんと待っていますわ」

「……………うん」

初めて、心から笑えたと思う。

「じゃあ、行つてきます」

ただ、そう言い残して、大陸から飛び立った。

ブリテン終幕の戦いは、ひと月に及んだ。

海の彼方から時折空を貫く光が、騎士王が挑む死闘の過酷さを物語っている。

帝国との間に交わされた契約の元、一時避難したブリテンの民。

彼らは朝日が昇るとともに、海岸に集い、遠い小さな島国を見つめていた。時に、騎士たちも民に加わった。

ローマの民でさえ、その集まりに紛れ込んでいた。

彼らもまた、自らが奉じる皇帝の戦いを見つめているのだ。

そうして、天を奔る光の数が増え始めたころ。

突如、月が落ちてきた。

誰もが恐れ慄き、この世の終わりかと絶望に浸りかけたその瞬間。

七色の極光が押し返し、黄金の極光が打ち砕くのを、確かに見ていた。

地を駆ける。

剣を振るい、襲い掛かる敵を機械的に排除する。

「つたく、多いな！ いつの間に蛮族どもは、ここまで増えたのか、知らないか騎士王！」
「知りません。大方、貴殿の国へ避難させている間に増殖したのでしょうか」

「中々の繁殖ぶりだ。外敵ながらあつぱれだ」

同じように剣を振るうルキウス。

楽しそうに軽口をたたくが、その顔には明らかに疲労している。

羅刹とも剣帝とも畏れられる彼とて、此度の様な人智を超越した怪物とは分が悪い。

……もつとも、それは同じくこの戦線に参加している私の師とて同じだが。

「——おいアルトリア。先程奴らの巢をとりこぼしていた。もつと周囲をよく見ろ」

「本当ですか？ 申し訳ありません、以後気を付けます」

「別に、私が欲しいのは謝罪ではない」

「は……ありがとうございます、オーデイス」

エレンで構わん、と緑衣をまとった長髪の男性が不機嫌そうに口を歪ませる。

ほう、と傍らのルキウスが興味深げに顎を撫でた。

「なるほど、貴殿があの名高き「深緑漆黒の叡智館」の主か。こんなときでなければ、ぜ

ひ古今東西の知識を俺に教授して頂きたいところだが」

「貴様のような侵略中など誰が相手をするものか。生まれる前からやり直せ」

ガツン、と所持していた分厚い書物の角でルキウスの頭頂を殴る師。

——何処かの森林の奥深く、洞窟を超えた果て。眠るように、静かに佇む、神代より続く知識の宝庫がある。

正式な名称は知らない。ただ、人はそこを「叡智館」と呼ぶ。

そこを管理する男が、かつて私が数年間教わった師匠の一人、エレン・オーデイス。気難しい彼だが、その知識量に神代級の魔術の腕は本物だ。

「———そこ。口を動かすならば手を動かせ。ピクト人は未だ無限に湧き出ている。このままではいずれこの島は奴らに埋め尽くされるぞ。それでよいのか、ブリテン最後の王」

「いえ、よくありません。忠告痛み入ります、スカサハ」

「よう」

此方に向かってくるピクト人を大量の朱槍で一掃する、黒い戦装束で豊満な肉体を覆う女性。

名はスカサハ。影の国と呼ばれる魔境の女王にして門番。

かつて、ケルトの神話において、クー・フーリンやフェルグスをはじめとした勇士たちを鍛えた神殺し。

彼女もまた、私を教え導き、あの朱槍と原初のルーンを授けた師の一人だ。

「ほう、お前が大陸の剣帝か。なるほど、巨人の腕に魔剣……中々悪くない。おまけに王の器も十分と来た。これが遠き帝国の人間であることが残念でならん。全く、巡り合わせが悪いな」

「確かに、俺も貴殿のような優美かつ勇壮な戦士に教えを受けたかったがな。まだ死にたくはない」

「空気の読めぬ奴よ」

ピクト人を斬り殺し捨てる。

私も同様に、無言で敵を駆逐する。

「全く……これだから脳筋は。汗臭くてかなわん。アルトリアが居なければ早々に帰るところであつた」

「本当に何から何までありがとうございます。ここまで私が生きてこれたのも、師匠達のおかげです」

「構わん。どつちにしろ、ここで外敵を徹底的に排除せねば我々の居所も失せる」
炎が敵を焼き払う。

「それにしても、騎士王。どうしてこうも師に恵まれているんだ？ 何度も俺を人外扱ロイヤいしていたが、貴様も大して人のことをいえんぞ。叡智館の主に影の国の女王。あちらで暴れている第二第三の秩序。そして花の魔術師」

「貴殿にも師はいたでしょう。むしろ完全な独学でその境地に至ったほうが恐ろしいです」

ルキウスが指差した先では、人知を超越した地上戦と空中戦が繰り広げられていた。空中では、キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが朱い月のブリュンスタッドと愉快な仲間配下たちと。

地上では、エルーシャ・ユリセシカ・フォン・アインツベルンがORTと。
それぞれに死闘を繰り広げていた。

「楽しそうですね。エルーシャは単なる耐久戦になっておりますが」

「……むしろ、第二のほうが頭おかしいな。黒翼公も白翼公もついていけてないではないか」

「ほぼ一騎打ちか。ふむ……月の王であれば、私を殺せるかもしれぬが……」
 「どうでしょうね。ゼルレツチは純粹に、彼の王を嫌っているようでしたが」

—— アイツ、あの、朱い月？ ちょーむかつくわー。まじ死ねって感じ。

—— あ、分かるー。あたしもね、あの、まあきゅりー？ つていうの？ 邪魔だなあつて

—— だよなー。……え？ 何？ 襲来？ 攻めてくんの？ おまえんちまで？

—— ……ま、混ぜろおおおおおおおおおおおおお
 お
 !!!!!!!

そんな勢いのままにブリテンまで飛んできて、そのまま戦線に参加したのが記憶に新しい。

何にせよ、強力な援軍であることは確かなので、思う存分に力を振るってほしい。

「その結果が蛮族に加えて死徒の襲撃、という訳か。悲しむべきか、笑うべきか」

「どちらにせよ、ブリテンを蹂躪する外敵は徹底的に潰します。ええ、掃除です」

「はははは、言うではないかアルトリア。ではしばらくあの軍団を潰してこい」

「承知」

女王の無茶ぶりとも思える指示に従い、死徒の軍勢に斬りこむ。

さすがは朱い月に従う者といったところだろうか。私の不意打ちにも的確に対処し、効率的に動いている。

……もつとも、この眼の前では、あまり意味がないのかもしれないが。

「直死」

脳が過熱しているような感覚。

視界に映る死徒たちの肉体に、青の線と点が浮かぶ。

正確に、されど素早く、なぞり、そして穿つ。

——月が、落ちてきていた。

「余りのことに理解が追い付かない。

ただ、「あれも排除しなければ」と機械的に、脊髓反射のように思考した。

「アルトリア！ あとエルーシャも！ ちよつといいか！」

「え——ゼルレッツチ……？」

降りてきた師にパチパチと目を瞬かせる。

「何？ あの月をどうにかする手段でも思いついたの？」

「一応な。俺なら「アレ」を押し戻せるから、アルトリアには木端微塵に砕いてもらう」

「な——む、無茶苦茶です！ そもそも星を砕くとか、聞いたこともありません！」

「え、お前のビーム聖剣、一応そういう用途のためのものだけど？」

キョトン、と聖剣を指差す師匠。

「あんま気張るなよ。俺らがフォロウするからよ」

「そうだね。それに、ほら。師匠としては、弟子にいいところみせたいじゃん？」

にこり、と二人そろって笑顔を浮かべる。

……剣帝の言うことも事実だ。私は、本当に人間に恵まれている。

「分かりました。やりましょう」

「おう！」

「ついでだし、あの水晶蜘蛛も一緒にフツ飛ばしちやえ！」

降下を続ける月球にぶつかる七色の光。

発生源は、第二の魔法使い周辺に展開された魔法陣。

そこから放出される大量のエネルギーが月の虚像を押しとどめる。

「チツ……まだ足りんか。なら——！」

キーン、とゼルレッチの肉体が光を纏う。

「筋系、神経系、血管系、リンパ系、疑似魔術回路変換——全細胞、平行境界疑似転換、開門！」

ブシイツ……と、肉体から鮮血が吹き出す。

何のためにここまで戦うのか？

決まっている。月世界の王が気に食わないからだ。

己が目的を果たすためならば、自らの命さえ削るのが、魔術師——魔法使いの在り方だ！

「クウインテット・フオイア・フルコーラス
全・多元重奏飽和砲撃
!!!!!!!」

果たして、虹色の極光は巨星を押し返した。

そして――

「――束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。これこそは人が抱く希望、栄光という名の祈り」

宙より来たる魔星を打ち砕くは、星より生まれし神造兵装。

「エックス・カブリ
約束された勝利の剣

!!!!!!!」

黄金の輝きは、堕ちる星を打ち砕いた。

「はっはっはっはっはっは！ どうだ、みたか！ 人類をなめるなよ、よそ者！」
「——なるほど。確かに、これは我々の敗北か」

ボロボロの肉体だが毅然と立ち、高らかに笑うゼルレツチに朱い月は静かに敗北を認め
めた。

私もか細い息をкаろうじて続けている。

……それでも、この王は、何としても消し去らなければならない。

「覚えておけ、朱い月」

ふらり、と起き上がる。

「貴様が本当に、この星を支配できると思っているのなら」

瞳を閉ざし、右頬に右手をあてがう。

「そんなくだらん幻想を打ち砕かれ——」

手を滑らせて、瞼を閉ざして覆う。

「——惨たらしく絶命しろ……!!」

眼を見開いた瞬間、全身が悲鳴を上げ、軋みだすのが感じ取れた。

「ビキビキベキバキボキボキ！」と、筋肉も内臓も嫌な音を響かせている。それでも、私は眼前の王を視続けた。

この男を排除しなければ、この国に明日はない。ただ、直感的にそう思った。

「つ…………ぐ、貴様——その、眼は…………！」

「はあああ……………あああああああああああ……………！！！！」
 バロールの魔眼。

ケルトの神話における、視線で対象を死に至らしめる。

オリジナル程とはいかなくても、動きを止めて生命力を削る程度のことではできる。

動きを止められるなら、それだけで十分だ。

「つ、せええええええええええええええええい！！！！」

「な——」

ゼルレッチが振り絞るように光線を放出する。

無防備な朱い月に直撃し、虹色の光が暴発する。

「ほぼ無尽蔵の第二魔法を侮ったな！ とどめだ……爆、散!!!」

耳をつんざくほどの轟音を上げて、光が爆ぜ散る。

後には、何も残らなかった。

「いえー……い!!!

祝！ タイプ・ムーン 月世界の王、とうば……………つ!!!

!!!!!!」

「元気に飛び跳ねる師匠が羨ましい。」

「……あれ、この男、死徒になってしまっくんじゃ……？」

「……………ちよつと！ そつち終わったんならこつち手伝つてよ！ 水晶蜘蛛吹つ飛ば

すよー！」

「おおそうだった。よし行くぞアルトリア！」

最後の関門は、この戦線に参加した全員で取り掛かることになった。まず私こと、ブリテンを治めた騎士王、アルトリア・ペンドラゴン。

そして当代のローマ帝国皇帝、ルキウス・ヒベリウス。

我が師。深緑漆黒の叡智館管理人、エレン・オーデイス。

影の国の女王、スカサハ。

第二の魔法使い、キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグ。

第三の魔法使い、エルーシャ・ユリセシカ・フォン・アインツベルン。

このそうそうたる面々が全力で取り掛かっても勝てるかどうか分からない……むしろ分が悪い存在がある。

それこそがORT。タイプ・マアキュリー。水晶溪谷の大蜘蛛。

「それで、エルーシャ。どうやってアレを吹っ飛ばすっていうんだ？」

「読解力ある？ 吹っ飛ばすって言ってるんだけど？ 外宇宙にだよ？」

「ほう。では、その前に奴を抑え込む役回りが必要だな」

「ルキウス帝……？」

そう私が問いかけた瞬間、ズガアアアン！ と、轟音と衝撃が大蜘蛛にぶつけられた。

「な——おい侵略中！ 貴様何をしている、貴様の人柱など、趣味は悪いにも程がある

！」

「そういうな叡智館の主よ。だが第三の策略を達成するには、こうするしかあるまい？」

「ですが、それでは貴方が……!」

「相変わらず優しいな。だが、ここまで俺が命を繋げたのも、ひとえにお前のおかげかもしれない」

その恩義に報いる時だ、と剣帝は朗らかに言い放つ。

「何、心配することはない。俺は……愛は、帝国は、人類は、ローマは不滅だ! これしきのことで死するものか! さあ、やれ騎士王、アルトリア! お前が希望を託す民のために、未来を拓くがいい!」

「っ——感謝いたします、ルキウス!」

ルキウスの声に背を押されるように槍を高く掲げる。

「聖槍、抜錨……最果てより光を放て——其は空を裂き、地を繋ぐ、嵐の錨!」

さようなら、ルキウス帝。

胸中で、静かに呟いた。

「
最^ロ果^ン
て^ニに^ゴ
て^ミ輝^ニ
ける^ア
槍^ド
!!!!!!!
」

第四次聖杯戦争

2

時間が止まったような心地だった。

「ソレ」以外に何も認識することが出来なかった。

一点の曇りなき、突き抜けるような蒼天に、魅了された。

否、魅了なんて言葉では全く足りない。

四方八方から雷で撃たれ、全身の血液が濃厚な酒で満たされたような心地。

視界がくらくらと歪む。思考がまとまらない。

心が騒がしく喚きたてている。

強烈な激情を訴える。悲哀の静謐で満ちる。

□としてあるまじき醜態。

だが。

余りにも……居心地がよかった。

——なんて、美しい。

この瞬間、己にとって最も重要な「何か」を叩き壊されたのかもしれない。あつてはならないことかもしれない。植え付けられた偽の情かもしれない。

それでも、この心を締め付ける疼きは、紛れもない真実であつた。

「問おう、貴様が私のマスターか」

真冬かと思わせるほどに冷酷な声色に思わず内心で苦笑した。

従者としては落第、下手すれば自害もやむなしのクソ態度である。

もう王として振舞う理由など、私には無いのだが、それでも騎士王を求められた。

それも、効率と合理の権化ともいえる暴君の貌として。

世界を認識し、認識されるとともに明瞭になる視界に大きく息を吐いた。

空を走る青い線。その交差する箇所は大きな点在る。

胸の裡から安堵と落胆の入り混じった何とも形容しがたい複雑な感情が沸き起こる。

死してサーヴァントになってまで、私はこの魔眼と付き合わねばならないらしい。

この魔眼が操作できるようになったのは、はて何時のことだったか、と余所事を思う。

「……聞こえなかったか。問いに応答することもできないのか、此度の主は」

「あ——えっと、ごめんなさい。驚いてしまったの。それで……」

意識を集中させて、青い線と点を消し、改めて声をかける。

白髪赤目の女が申し訳なさそうに答えた後、視線を傍らの男に移す。

無精ひげ、光のない濁った瞳。くたびれた黒い外套。

男の手の甲には剣を模したと思われる真紅の令呪が刻まれていた。

……沈黙したまま一言も発しない。念のため、改めて問いを投げることにした。

「貴様がマスターで相違ないな？」

「……………ああ。僕がアンタのマスターだ、セイバー」

「了承した。これより私は貴様と共にあり、貴様の運命を私が剣で守護することを誓う。

ここに契約は成立した」

地獄の底まで付き合ってやる、と締め付け加えると目に見えて嫌そうな顔をした。

男——衛宮切嗣は性根はともかくやり口が全くもって気に食わないがこれも縁というものだろう。

せめて、大災害などという結末に終わらないように動けばいいのだが。

「わたしは、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。今後、夫とあなたのサポート

をするわ」

「アインツベルン……了承した。今後とも、よろしく頼む、アイリスフィール」

「ええ、もちろん。それと、あともう一人、久宇舞弥って女性が切嗣の助手にいるわ」

了承した、と頷いた。

傍らでマスターが慥然とした顔をしている。

「それで、その、セイバーって……」

「何だ？」

「女の子、なの？」

「……ああ。生前は性別を偽っていたがな。大して問題は生じないと思うが、どうかしたのか？」

「いえ……ちよつと、びつくりしちやつたから。ね、切嗣？」

夫に話を振るも、当の本人は何も応答しない。

……そういえば、衛宮切嗣は当初、少女に王を押し付ける周囲に怒りを抱いていたとか。

アイリスフィールはパチパチと目を瞬かせ、困ったように眉尻をさげながら場をつな

ぐために再び口を開こうとし、

「あの——」

「一応言っておくが、憐憫も義憤も不要だ。私は私自身の意志で男の王として立ち、ブリテンを治めてきた。望まれはしたが、押し付けられた覚えはない。私は私の選択を後悔していない。正しくはなかつたかもしれないがな」

「つ——そうよね、あなたが選んだ道だものね。わたしたちには想像もつかない、厳しい道だつたとしても」

「だが、何らかの感情を抱いたことは、素直に嬉しい。私が進んだ道が、現在いまに残つている証だからな」

ありがとう、と礼を述べた。

……自分では、微笑んだつもりだが、上手く笑えていただろうか。

「——とはいえ、それはそれ、これはこれ。どうあれ、今の私は貴様の駒だ。上手く使えよ、マスター」

「……アンタに言われるまでもない。精々上手く暴れてくれ。こつちはこつちで聖杯を

手に入れる」

「その言葉、忘れるなよ。——聖杯で思い出したが、貴様の聖杯にかける願望は何だ？」

沈黙するマスター。訝しげに私に視線を向ける。

「何故それを聞く？」

「ただの興味と確認だ。言いたくないなら言わなくて構わない」

「そういうアンタはどうなんだ」

「私か？ 願望など、あるわけがない」

私がそう言い放つと、マスターもアイリスフィールも奇妙な物を視る目つきで私を見つめた。

「なんだ、その眼は」

「……じゃあ、アンタは何のために召喚に応じたんだ」

「単に此度は抑止力によって駆り出されただけにすぎない。この聖杯戦争、余程危険な代物になるらしい」

「そんな……」

「貴様の願望に興味はないが、くれぐれも注意しろよ。」地獄への路は善意で舗装されている”なんて、よく言うだろう」

どの道、聖杯が「この世全ての悪」に汚染されている以上、どんな善き願いであつても、人類を呪う災厄と化するのだが。

「触媒に『鞘』を利用したか……姉上がどこにやったかと思つたが、まさか1500年も土の中とは」

「感想はそれだけか？　これでは奸計を巡らした妖妃も報われないな」
「王位篡奪のことなら当の昔に察知していた。今更大して感慨もない」

一日たって。

作戦会議、と称してアインツベルン城の一室にてテーブルを囲んでいる。

召喚当初は顔をあわせなかつた久宇舞弥も揃っている。

「私の宝具はまず約束された勝利の剣、風王結界、破魔の宝剣、夜天の羽衣の四つ。
全て遠き理想郷はそちらが使うのだろうか？」

「ああ、アイリに埋め込む。セイバーはアイリと共に行動し、囮として攪乱して欲しい」
「なるほど。他マスターとサーヴァントが彼女をマスターと誤認している隙にマスター
と久宇が行動する、と」

「理解が早くて助かる。宝具の効果はどのようなものだ？」
「聖剣は対城宝具だ。隠すために、風の鞘で隠している」

実際に剣を現出させる。聖剣は風を解き、隠していた黄金の刀身を露わにした。

三人が息を飲む。確かに、この黄金色の輝きは、誰もを魅了する美しさを持っている。

「本来、空気の屈折を利用して剣を隠し、真名の露呈を防ぐためのものだ。開放すれば、一時的な風の攻撃……風王鉄槌ストライク・エアとして利用することが出来る。それ以外にも応用は可能だ。最も、再び剣を隠すため風を集めるのに時間がかかるがな」

「扱いはアンタに任せる。あと二つは？」

「破魔モルデュールの宝剣は魔術の効果を打ち消す。主に魔術師の工房攻略に有用だ。戦闘ではこちらをメインで用いる予定だ。聖剣も、使う時は使うがな。夜天グエの羽衣ンはいわゆる隠蔽宝具だ。ステータスも隠匿できる」

そう説明して、剣をしまった。

「……この書物は、参戦マスターの情報か？」

「ああ。現在までに分かっているだけで三人だ」

マスターが三枚の写真つき書物を並べる。

「まず御三家の遠坂時臣。触媒は、最古の蛇の抜け殻。恐らくは、メソポタミアの英雄王ギルガメッシュだろう」

「とんだ大御所だな。扱いを誤って自滅しそうだ」

「その隙を突ければ敵じゃない。それと、遠坂の元弟子という立場の男に教会の言峰綺礼、という人物がいる」

「裏で密かに同盟を結んでいるわけか。監督者も多忙だな」

「時計塔から、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。征服王の衣服の切れ端を盗まれ、代わりの触媒を用意したようだ」

運がないな、とその魔術師にわずかながら同情する。

「それと、間桐雁夜という男がいるが、そこまで大した脅威ではないだろう」

「なるほど……しかし、よくここまで情報を集められたな。相当な労力がかかっただろうに」

「知り合いの情報屋に依頼しただけだ」

「そうか。そのやり手の情報屋に感謝するでしょう。マスターはどれを脅威と見る？」

「……サーヴァントとしては遠坂、マスター単体なら……」

逡巡するマスターの視線を追う。

目線はカソックを身に着けた男の写真周辺を彷徨っていた。

「言峰綺礼……かつては代行者、か。なるほど、戦闘力は全マスターの中でも随一だろうな」

「——アンタは勝手に暴れてくれればいい。聖杯戦争は、僕の手で勝ち上がる」
「了承した。易々と死んでくれるなよ、マスター」

静かに応答する。

相変わらず、衛宮切嗣は不機嫌そうに俯いていた。

Side：衛宮切嗣

外見に見合わぬ凍りついた瞳と動かない表情、冷え切った声色が恐ろしいと感じた。同時に、年端もいかぬ少女がこのような態度しか表せないことに怒りを抱いた。

四人で作戦を立てているうちに、セイバーの異様さが身に沁みるように実感した。余りにも容赦がない。冷酷に過ぎる。

あれでは怪物も同然だ。あんな人智を超えた怪物が王の座についていたなんて、正気の沙汰ではない。

……しかし、彼女は「望まれて王となった」と言っていた。

それはつまり、あのような怪物であることを民と騎士に望まれた……ということではないか？

「吐き気がする」

思わずつぶやいた。

いや、いい。怪物であることはまだわかる。ブリテンが彼女を怪物に仕立て上げたことも、まだいい。

何より気に食わないのが、彼女は正論を言っていたことだ。

——このホテルとやらの最上階、か。まるで狙ってくれと言っているようなものだ。

作戦会議の際、セイバーが言っていたことを思い返す。

「外から攻撃するより内部から忍び込んだ方がいいだろう」

「……一応言っておくが、これは戦争だ。神秘の秘匿とか、周囲の影響とか、考えるのは無駄だ。ホテルそのものを爆破する。魔術師マジックの工房など、意味をなさない」

「——愚か者。自分が何を言っているのか理解しているのか？」

「何だつて？」

奇妙な物体を観察する眼差しに、背筋が凍った。

「建物ごと破壊など、無駄の極み、愚の骨頂。標的のみを確実に潰すのが、真なる暗殺。一々余計な手間をかける前に、もつと効率的かつ確実性の高い手段を選びなせ。まさかとは思うが………貴様、これまでずっとそのような徒勞をしていたのか？」

そう問うセイバーに沈黙しか返せなかった。

黙り込む僕を見て肯定と受け取ったのか、彼女は呆れと失望のため息をついた。先が思いやられる、と感情が読めない顔にそう浮かんでいた。

「ああ、くそ」

苛立ち混じりに言葉を吐き出す。

セイバーは正しい。だが、それを僕に当てはめないでくれ。

彼女のような類まれな資質もない。王としての器なんて、最初ハナからない。

僕が出来る精一杯をこなし、必死に駆け抜けて、今日という日を迎えたんだ。それを何も知らない小娘怪物に否定されるなんて、おかしい悲だろう。

すでにこの戦争にネガティブな展望が染みてきた。

煙草を吸いながらその染みを思考から振り払う。

それでも、僕は……この戦争を、人類史最期の闘争にしてみせる。

邪魔をするなら、騎士王であろうと打ち破る。

通信を起動する。

『ほいほい！ 何をお求めかな衛宮！ あれ以上はちよつと日付を置いてほしいな！』

「いや、あれはあれでいい。他の……ライダーとキャスターの詳細を教えて欲しい。それと、触媒の詳細が不明だったアーチボルトと間桐が召喚したサーヴァントは分かるか？」

『なるへそー！ あ、ライダーは征服王だよ！ どうもマスターは触媒盗んだ生徒さ
んっほいね！ って、よく調べたらロードの生徒が一人休学して何か冬木入りしてた！
メンゴメンゴ！ キャスターはまだ未召喚だね！ 間桐はバーサーカーでケイネス
氏がランサーだよ！ 真名はバーサーカーの方は分かんないね！ ランサーはむっ
ちやイケメンだし黒子あるからフィオナ騎士団の輝くデイルムツド貌じゃないかな！』

「……もうそこまで分かっているのか。それと、アサシン……山の翁は、どのような能力だ？」

『んー……なんか、分身？ 増殖？ 分裂？ とりあえずむつちや増えるよ〜』
「遠坂と教会の様子は分かるか？」

『さすがのボクも自分の命は可愛いんだなこれが！ 千里眼もちに情報収集とか命がいくつあっても足りないね！』

「それもそうだな」

ほう、と息を吐き、白い煙が寒々しい夜空に溶けるのを見送った。

「どうでもいいが、どうやって情報を仕入れているんだ？」
『え？ 監視カメラとか盗聴器とかだけ？』

――

オリジナル宝具

破魔モルデュールの宝剣：随所に宝石が埋め込まれている。

夜天^{グエ}の羽衣^ン：フード付き。紫というか紺というか黒というか……。

切嗣とシキトリアは原作ほど険悪ではない……が、そもその相性が悪いため仲はお察し。

仕事の時はしつかり連携とるけどね！ お互いがお互いを子供だと思つてたりする。

シキ「経歴と性根はともかくやり口がクソ。一人の魔術師潰すために全部爆破とか馬鹿なの？」

ケリイ「人間じゃないくせに一々正論言うとかムカつく。こんなんが王とか周囲の連中正気か」

シキトリアさんはメタ知識でケリイのやり口は何となく知ってるが詳細は知らない。

それでも互いが互いを笑えない状況にはある。

人間の愛情と温かみを知って心が弱くなってしまうあたりとか特に。

オリキヤラ

情報屋：マシガンtook。テンション高い。切嗣と腐れ縁。

私には、複数の師がいる。

王としての在り方や剣術を教えた夢魔の男に加えて、原初のルーンに槍術、そして呪いの死槍を授けた女王。

万華鏡の如し魔法使い。天の杯捧げ持つ魔法使い。

地上のありとあらゆる叡智を記した、古き大図書館の管理者。

私と縁を結んだ魔術の家系は、我が師エルーシャ・ユリセシカ・フォン・アインツベルンの系譜であつた。

もしかすれば、私がこうして召喚されたのも、ある意味必然であつたのかもしれない。この肉体を原型に、冬木の大聖杯は鑄造された……と、現当主の老爺が話していた。彼らは此度の儀式を成功させることに強烈に過ぎるほどの意欲を示している。

関係者でもある私を剣士^{最優}で召喚したのも、そんな執念の表れなのかもしれない。

……外見こそ我が師と酷似しているが、内面は系譜を受け継いでいることを疑うほどに異なる。

アイリスフィールも、ユーブスタクハイトも、もしかすれば、ユステイーツアも。

真面目に天の杯へ至ろうとしている彼らと、気ままに不真面目なエルーシャとは大違いだ。

本気で追い求める者には何も齎されることなく、ただ偶然に進んだ者にこそ与えられる結実。

何故だか、ひどく悲しいと感じた。

「ついたわ……すごいわね、ここが冬木……聖杯戦争の、舞台……」

「

雑然としたコンクリートの街並み。行き交う人々。

懐かしいような、物珍しいような、なんとも奇妙な感慨を抱く。

同時に、この靈基（肉体）もまた、変に力がみなぎっている。

「どうかしら？　もしかしたら、貴方の体にも、何か影響がある？」

「……そうだな。すこし、変調が見られる。ごく小規模かもしれないが、聖杯としての機能が扱えるかもしれない」

「それは——いいこと、よね？」

「さて。ひとまず、戦術の幅が増える……と、いうことにしておくがな」

せいぜい猫だまし程度のもだろうが、と吐き捨てた。

……魔術師であり、アインツベルンのホムンクルスであり、此度の小聖杯の器である彼女にとっては、「過程を省略して結果を得る」聖杯の機能を小手先程度に扱う私が奇妙に映るだろう。

彼女、そしてアインツベルンには申し訳ないが、私のチカラは「それだけのモノ」でしかない。

世界を変革し、支配することすら可能な冬木の聖杯よりも、大幅に劣る。

あくまで私は「原型」である。私の在り方を定める枷に過ぎない。

「それで、これからどうする?」

「切嗣は好きにしている、つて言っていたわ。ねえ、折角なんだし、少し見て回らない?」
「私は構わないが……あまり目立つ行動はするなよ」

分かってるわ、とアイリスフィールは返答するが、その瞳は初めて見る世界に興味津々で輝いている。

私は思わずため息をついたが、悪い気分はしない。

今はごくわずかな猶予期間^{モラトリアム}、存分に楽しませた方がいいだろう。

日が暮れる。

「綺麗……夕焼けは何度も見たけれど、場所が違うだけでこんなにも変わって見えるなんて」

「そうだな」

徐々に降りてくる深いブルーのキャンバスを彩るように、ゴールドとオレンジの雲が横方向に伸びている。

その最奥には、いまだに優しく品のあるピンクが名残惜しげに残っている。

似たような光景は生前から何度も見てきたが、遠い異世界のように感じてしまうのはどうしてだろうか。

「日が暮れるまではあと数分ある。それまではまだ自由に行動できると思うが、どうする？」

「いえ、ここで待ちましょう。まだこの景色を見ていたいし、セイバーとも話したいわ」
「私と？」

「そうよ」

くすり、と微笑むアイリスフィール。一瞬、師の面影を感じた。

「アインツベルンの始まりって、どんな人なの？」

「始まり——エルーシヤか？ ……正直、現当主の翁や貴様、貴様の娘を見て、本当に系譜なのか信じがたかった」

「どうして？」

「外見こそ酷似しているが、内面がまるで違う。真面目に取り組んでいる貴様たちとは違い、あの女はとんだ不真面目だった」

—— やっほーアル。ねえ見て、賢者の石ー！　　すぐくね？　　うつかりこぼした薬
剤がこんなの生み出したんだよ？

—— そうですね、真面目に錬金術を修めている方々に誠心誠意謝罪したらどうで

すか。

——唐突に何!? だってしょうがないじゃん、できちゃったんだから。というか、あたしが出した課題やった?

——すでにそちらにまとめてあります。というか、参考書物を書くならもつと分かりやすくしてください。

——え? どっか分かりにくい箇所あつた?

——擬音語、擬態語が多すぎます。なんですか、ぐるぐるるって。

——ぐるぐるるはぐるぐるるだよ? できたならアルも分かってるんでしょ?

——いいえ、まったく。

「へ、へえ……そうなの……」

「幻滅したか? だが、実際あの女は神域の天才だ。聖杯なんて代物を作り出している時点で、分かり切っていると思うが」

「貴方の肉体に聖杯の機能を付けたのも、始祖ユリセシカ……なのよね?」

「ああ。後で話を聞いたら、マーリンの目を盗んで細工を施すのに苦労した……らしい」

「花の魔術師の目を?! 現在の^{いま}全てを見渡す千里眼でしょう? 凄まじいわ。どうして、そこまでしたのかしら?」

アイリスフィールの質問に言葉を詰まらせる。

沈黙する私を見て、どう受け取ったのか、困ったように笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、余り喋らないほうがよかったわよね」

「いや……そうではない。ただ、何と説明したのものか、少し困っただけだ」

「そうなの?」

なら、いつか話してくれるとうれしいわ、とアイリスフィールはくすりと小さく笑って言葉をつづけた。

不意に、魔力の気配を感じた。

隠そうともしない強力な存在感に思わず振り返り、目を細めた。

私の態度に何かを感じたのか、アイリスフィールも緊迫した表情になった。

「……サーヴアンの気配がするな。どうも挑発しているらしい」

「乗るの?」

「ふむ——そんなものは無視して遠方狙撃なり何なりでからとつと潰すに限るだろう」

この聖杯戦争をただの殺し合いとみるか、名誉ある決闘とみるか、娯楽の一つとしてみるか。

後者二つならば、正面から乗り込むのも手の一つ。しかし前者ならば、のこのこと姿を見せるのは下策だ。

「もつとも、マスターを誤認させられるならどちらでも構わないらしいが。どうする?

今は、貴様に従うぞ?」

「そうね、だったら——」

「貴方は、ランサーかしら？」

太陽はすっかり沈み、夜の闇がコンテナを包む。

舗装された地面を照らす数本の電灯。

魔槍を携えた姿勢の良い美丈夫が、まるで舞台俳優の様に現代の照明に照らされ立っていた。

「わざわざサーヴァントも連れずに乗り込んでくるとは、中々勇氣ある貴婦人であらせられる」

「まさか。私も列記とした参加者ですもの、そのような蛮勇にして愚行は犯さないわ」
返答を待たずに背後から斬りかかる。

姿隠しの効果を保持したまま、宝剣を力強く振り下ろすも、瞬時に赤槍で防がれた。
続けて姿勢を低くし、槍と地面の間を潜り抜けるように剣を切り上げる——これも防がれた。

向こうも穂先をこちらにつきだしてくるが、剣で右に流して再び斬る。

「っ、卑怯な……!」

「卑怯? これは戦争よ? 遠方から魔術で攻撃せずに、こうして姿を見せただけありがたいと思いませんか」

強気な発言をするアイリスフィールに呼応するように地を踏み鳴らす。

「ansuz」

瞬間、ランサーの足元に紅蓮の炎が奔った。

驚愕に目を見開くも冷静に跳躍して私と距離をとる。

「i s a」

着地の隙を見計らって氷の弾幕を作り出し、徹底的に追いつめる。

だが、その大半は真紅の槍で切り払われた。

回避と防御を平行にこなしながらこちらへ向かってくる。

「ストライク・エア
風王鉄槌」

上から押しつぶすように風の攻撃を加える。

だが、天に向けられた槍に霧散させられた。

そのまま槍が勢いよくこちらに向かってくるが、私はそれを剣で防いだ。

宝具と宝具とのこすれる音が嫌に響く。

「驚いたぞ、まさか剣と魔術を使いこなすとは……さては魔術師キャスターだな？ 悪辣な企みは

得意分野という訳か」

「単なるマスターの意向だ。単にこの聖杯戦争に見出しているモノが貴様とマスターで

は異なるだけだ」

訝しげに琥珀色の瞳が細められる。

そこには目深に紫紺のフードをかぶり、バイザーで目を隠した私が映っていた。

「名誉か誇りか……その辺りを貴様は求めている。だが、私のマスターは単なる機械的な殺し合いとみているらしい。私はそれに従っているだけだ。……敵に忠告などおかしな話だが。参加者全員が同一の思考、なんてことはありえない」

ゆめ忘れるなよ、と魔力放出の勢いでランサーを押し出し、炎を発現させる。

しなやかに着地、そして回避したランサーは再び魔槍を繰り出した。

「ならば、貴殿は何故この戦いに身を投じている？ 貴殿は、この聖杯戦争に何を見出し

ている？」

「別に何も」

喉元を斬り裂く様に剣を振るったが、かわされた。

「聖杯など不要。一度でも契約を結んだからには、地獄の底までマスターの供をする。それがサーヴァントという生き物だ。違うか、ランサー」

「いいや、違わない。……先程の言を改めよう。貴殿は、騎士の誇りを持つ者だ、セイ

バー」

ランサーの応答にちらりとアイリスファイルに視線を向けた。こくり、と頷いた彼女は気高さを表す瞳を向ける。

「セイバー、この私に勝利を——騎士の矜持、存分に示しなさい」

「了承した」

戦い方に関して、マスターからは大した指示を受けていない。ただ、好きなようにやれ、とだけ。

ならば、ここから騎士の決闘に切り替えたところで何の問題もないだろう。

正眼に構え、短く息を吐き、地を抉るように足に力を込め、一気に駆けだす。

甲高い音が鳴らされ、刃が空を斬る。

「しかし、ルーン魔術ということは、俺と同郷か？」

「お手柔らかに頼もう、先輩」

「後輩の前で手抜きなどできるわけではない」

ともすれば雑談にも思える言葉の応酬。

されど、剣戟は止むことなく続いている。

槍と剣のぶつかり合いは、永遠にも思えるほどに続けられている。

だが、次の瞬間。

「AAAAA l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l i e
稲妻が落ちてきた。
!!!!!!!」

———

エルーシャ師匠はいわゆる口○ナ族とかグルグル族とかそういう系統です。

∨本気で追い求める者には

アサ次郎「ツバメ斬りたくて練習してたら第二魔法に至りました」

コクトー「夜の雪道を歩いていたら」に出会いました」

これは ひ ど い

正直作者は、魔法使いたちも魔法に「至ろうと目指して至った」とは思っていないです。

戦闘スタイル切り替えは特に意味ありません。

たまたま相手が騎士系だったからじゃあ合わせようかなと思つた程度。

切嗣からも特に指示出てませんし。マスター誤認させればいいや。

シキ「正々堂々は何も考えずに済むから楽。え？ 爆破？ 非効率的だわー」

*隠蔽箇所解放

後の「冬木の聖杯」の原型となつた、贗作といえ紛れもない聖杯。

もつとも、魔法使用により大幅に弱体化されている。

せいぜいが過程を無視して結果を得る、という程度。

故に、聖杯探索にはあまり乗り気ではなかつた。

自然の嬰兒：Dを所持。冬木（とトウリファス）以外の場所ではオミットされる。

戦争による負傷等で若干壊れているため、あまり使い物にならない。

少なくともイリヤ・アイリより下。下手したら黒桜よりも……。

まあそんなじよそこらの魔術師よりかはハイスペックです。

マーリン「気づいたら変な魔改造されてた件」

エルーシャ「ばれずに済んだ奇跡」

突如唸りを上げて現れる戦車。

青白い雷電がバチバチと轟音を立てて地面を灼く。

「双方、剣を収めよ！ 王の御前である」

大男の芯のある大声が夜の闇に響く。

……丁度、戦車のある位置が、一度魔術を仕込んでいたところだった。

「ansuz」

ライダーのマスターが怯えながらこちらを見つめる。

その瞳には、強い恐怖の色が浮かんでいたが、同時に正確にこちらを観察する冷静さも備わっていた。

「さて、気を取り直して——我が名は征服王イスカンダル!!! 此度の聖杯戦争では、ライダーのクラスをもって現界した!!!」

堂々と真名を宣言するライダー。

傍らの少年も、先ほどまで私と鎬を削っていたランサーも、背後のアイリスフィールも、思わず沈黙する。

「うぬらとは聖杯を求め相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある」

その鋭くも純真な眼差しでこちらを真っ直ぐに見るライダー。

曰く、我が軍門に下り、世界を征し、支配し、あらゆる愉悅を味わないか……という、勧誘だった。

……あらかじめ知ってはいたとはいえ、こうして実際に目の当たりにすると何とも言い難い奇妙な心地になる。

「——よし。帰るぞアイリスフィール」

「えっ!? で、でも……」

「これ以上の収穫は望めない。帰還して休養をとり、次の作戦に臨むのがいいだろう」

——と、いうわけだがいいな切嗣?

——……そこからの撤収はいい。だが、作戦はまだ終わらない。

——了承した。

恐らくアーチボルトが工房を構えるホテルを攻略するのだろう。

……結局、ホテルは爆破する方向になった。
ただ、ある程度の囿として、私も単独でホテルの攻略に臨むことになった。

『茶番はそこまでにしてもらおうか』

不意に、神経質そうな男の声が夜闇に通る。

僅かに眼を見開いたランサーとあからさまに怯えを見せたライダーのマスターから察するに、アーチボルトだろう。

『それにしても驚いたよウェイバー・ベルベット君。まさか召喚用の触媒を盗んだのが君だったとは』

「あ——せん、せい」

『……だが、結局のところ私も君も同じ穴の貉。聖杯という代物に目がくらみ、首を突っ込んだ愚かな俗物だ』

——ん？

『もはや同じ戦場に立つ身、この状況で魔術師の格など競うまい。もつとも、そのサーヴァントを君が扱えるかは疑問だがな』

「ほう、貴様が本来余を呼ぶ腹積もりだったという魔術師か。なるほど、余とは合わぬだろうなあ。共に戦場に赴き、敵と正面から見^{まみ}える者でなくては、到底余のマスターを務めることはできぬ。ここそこそと勇壮な強者の陰に隠れて謀りをたくらむような輩など、こちらから願い下げだ」

「……俺の主を侮辱するか、ライダー」

『否定はしない。正面にでる魔術師など一部の例外程度のものだ。むしろ、それはセイバーのマスターに伝えよ』

あれ？

「——なんのことかしら、ランサーのマスター」

メイガスライダー

『単純なことだよアインツベルン。貴様らがあの魔術師殺しを招き入れたことなど知っている。大方、君をマスターと誤認させて、奴は裏で他のマスターたちを抹殺する腹積もりだろう。違うか？ どうせ、私の工房も、建物ごと爆破でもするのだろうか？ 全く、忌々しいにも程がある。こうも堕ちたか、アインツベルン』

「んな——!?!」

驚愕に慄くライダーのマスター。

ほう、と感心したように顎を撫でるライダーに、顔をしかめるランサー。

思わずアイルスフィールと顔を見合わせた。

右手で通信機のジェスチャーをとり、彼女があらかじめ携帯していた端末を私に渡してもらおう。

すぐに起動し、マスターに繋ぐ。

真っ先に自分の口からでた声は、思った以上に冷え込んでいた。

「おい切嗣、クソつたれマスター。完全に貴様の作戦がおしゃかになつているんだが？」
 『…………』

「うっかり、などという優雅な言い訳はいらんぞ。で？　これで？　貴様は？　どうするつもりだ？　あ、さてはあれか？　貴様の知り合いとかいう情報屋。あれがスパイだったとかだな？」

沈黙を保つマスター。

埒が明かない、と電源を切り、アイリスファイルに返した。

「さすがだなロード・エルメロイ。情報屋でも雇ったか？　これで我々は完全に鼻をくじかれたわけだ。切嗣さまあ」

「セイバー、そんな悠長なことを言っている場合じゃないわ！」

「とはいうものの、どっちみち、こちらの大馬鹿野郎がこの程度で諦める精神はしていない。現アインツベルン当主も似たようなものだ。そういう訳で、ライダー。勧誘は諦めろ。他を当たれ」

「むう…………報酬は応相談だが？」

「鬱陶しいな貴様。そんなに私が欲しいならマスターに聞いてくれ。あと私は聖杯なん

ぞ要らん」

私は普通に言つたつもりだが、他の連中はそう受け取らなかつたらしい。

ランサーも、ライダーも、そのマスターも、奇妙なモノを視る目をしていた。

おそらくランサーのマスターも同様だろう。真つ先に私に問いを投げた。

『それは、何故だセイバー？』

「不要だからだ。生前に未練は多々あれど、それを死してから千年も経つて晴らすような性格はしていない。現世に望みなどない。第二の人生に魅力を感じないわけではないが、まずはサーヴァントの役目が最優先だ。……そこまで奇妙なモノに見えるか？

貴様とて聖杯は不要なのは同じだろう、ランサー」

「全くの不要ではないがな。此度召喚に応じたのは生前果たせなかつた忠義を果たし、主に聖杯を捧げるためだ」

『世界を思うままにできる力だろうか？ それすら不要だと』

「そも、私はサーヴァント。マスターに従う駒だ。何があろうと、地獄の果てまでついていく」

断言した私。沈黙する闇。

始めに静寂を破ったのはライダーの呵呵大笑だった。

「いや面白い！ 随分と潔いなセイバー！ だが心せよ。如何に己を道具と定義しよう
と、生前の在り方まで損なつてはならぬ。余には分かる。貴様は王者の気風を有する者
……さては名のある王者であろう？ それでは貴様の王道にも瑕が付こうよ」
「……さて。自ら国を滅ぼした暗君、ならば歴史に刻まれているかもしれないな」

胸中に黒い感情がくすぶる。

いや、大丈夫。私はあの状況下で出来ることを尽くした。

「ランサー、貴様はどうだ？ 余の軍門へ下る気はないか？」

「先程の俺の話を聞いていなかったのか？ 主を裏切ることとはできない」

『何もかも思い通りになるとは思わんことだ、ライダー。我が槍、易々と手放すものか』

「ううむ……そうかあ、駄目かあ。いや勿体ない。実に残念だ」

「ら、い、だあああ……何が軍門だよ、完全に拒否されてんじゃないかあ……」

「しかしのう、坊主。”ものは試し”というではないか」

”ものは試し”で真名ばらすサーヴァントが何処にいるんだよ!」

「ここにいないではないか」

激昂する少年に平然と返答するライダー。

思わずがつくりとうなだれ沈黙する少年に些か同情の念を送る。

アイリスフィールも、ランサーも同様だった。恐らくアーチボルトもだろう。

しかし、不意に空気が変わる。

警戒しつつもいくらか緩んでいた空間が、再びライダーの手でがらりと変わっていった。

野太い声が夜の闇に轟轟と響く。

「——来たれ! 聖杯の招きを受けし英傑たちよ!!! されど姿を見せぬ臆病者ども

には、この征服王の侮蔑を受けると知れ!!!」

征服王の力強い宣言。

一瞬、風が沈黙を運ぶが、それも声によって遮られた。

「——我を差し置いて王を自称する雑種が二匹も湧こうとは」

街灯に現れる黄金の影。

世界のすべてを見下すように睥睨している。

……なるほど。あれが英雄王。

征服王が名を名乗るよう言い放ったが、それに不機嫌そうに断った英雄王が返答代わ

りに宝具を開く。

黄金色の波紋からいくつも現れる武器。そのすべてが一級品の宝具である。

「そんな、あんな数の宝具なんて——!?」

「……なるほど。サーヴァントのクラスは割と融通が利くようだな。遠距離攻撃手段があれば弓兵、か。」

「まさか。クラスが我を縛っているのではない。我が、聖杯の敷いた法に合わせているだけよ」

ニヤリと口角を吊り上げるアーチャー。

刃の切先がこちらに向けられる。降り注ぐだろう黄金の死の雨に備えるため、剣を構える。

しかし、新たに現れた別のサーヴァントが頭上の英霊の注意を引いた。

漆黒の鎧は、同じ靄に包まれ判別がつかない。赤い光がやけに目立つ。

——心を強力な万力で潰されたような心地だ。

「は、はは、はははははははは………!!!」

「セイバー!？」

「ん？ ああ、悪いなアイリスフィール。だが一つ許しが欲しい。そろそろ、私も真名を明かそうと思う」

「な——唐突にどうしたというの！ つ、まさか、あのサーヴァント……」

「ああ。まさか、こんなところで出会うとは思ひもしなかったがな。しかも狂戦士……バーサーカー余程、私への恨みは深いらしい」

バーサーカーに注視している間に足場を落とされたアーチャーは激昂して襲い掛かろうとしていた。

そこを私の哄笑が阻害をしてしまった形になる。

「すまんが英雄王、そこをどいてもらおうぞ。所詮は身内の不始末だ、私に片づけさせてくれ」

「……フン、興が冷めたわ。あの程度の雑種など、どうでもよいわ。勝手にするがよい」
「それはありがたい」

魔力で編んだ武装を全て解く。

ここに来るまでに纏っていた黒いスーツに戻した。

「セイバー？ 一体何を……」

「剣を捨てるなど、非効率かつ非合理的。本来ならば禁忌だがな」

ジャケットを脱ぎ、ネクタイを解き、靴と靴下も脱ぐ。シャツはまくりあげた。髪も高く結い直した。

「■■■■■■■■■■——A……………t h u r……………!」
「ほう？ 私の名を呼ぶだけの知能はあるようだな。逆に言えばそれだけ狂化が不十分である、ということだが」

コンクリートの冷たさが足の裏から伝わる。

「本音を言えば、夕日の差し込む河川敷で……と、行きたいところだが、文句は言うまい。来るがいい、ランスロット。それと、言いたいことがあるのならはつきり言ったらどうだ」

私たちは、同時にぶつかりはじめた。

――

シキ「生前云々より今重視。基本的にマスターに従うよ。え？ ランスロット？
バーサーカー？ よっしや方針変更！ 殴って蹴って叩きのめす！ ケルト人だから
是非もないネ！」

円卓見ていて毎回思うのが「コイツら一回全力で殴り合ったらいいんじゃないかね？」とい
う感想。

全力で本音ぶつけ合う機会がなかったというのはなんとも悲しい。間が悪かったの
だ。

もともとシキトリアが割とチート気味なのでその分不利になるようにちよつと他陣
営も弄ってます。

この恩恵を最も受けているのがケイネス先生とランサー。

・先生の頭が割と柔軟

・ソラウさん不在

・情報が回っている

などですね。改めて考えると切嗣が本当に鬼門だったんですね。

しかしこれはこれで困った……簡単に退場させられない……二世が誕生しない……
どうしよ……。

ケリイばれてますがまあ原作からしてそこまで隠れている感じじゃなかったような
……（うろ覚え）

（愕然）
というかZeroの流れがいい加減曖昧になってます。もう六年前とかマジか……

高く頭部を蹴り上げる。その勢いのままに、胴体へ脚部を回し入れた。

魔力放出込みで蹴ったため、バーサーカーは大きく吹っ飛ばされてコンテナの一つに側面からぶつかった。

ほう、と少し息をつく。

だが狂戦士は、まだ動き出そうとしていた。

「——見事。バーサーカー相手に徒手でここまで戦い抜くとは、恐れ入った、ブリテンの騎士王よ」

「見世物にしては及第点といったところか。……狂犬め。どこまで無様を晒すつもりか」

口ぐちにそうこぼす二人の王。

返答する余裕もないため、無言を決め込んだ。

『何をしているランサー。セイバーを仕留めないか』

「ですが、セイバーは手負いです。バーサーカーも消えていない。ここで攻撃を仕掛けるなど——」

「……騎士道に反する、か？ 別に私は構わんぞランサー。今更一人も二人もそう大して変わらん」

そう口にしてすぐ、縮地でランサーの元へ一気に近づく。

右手で掌底を打ち込もうとしたが、槍に防がれてしまった。

だが硬直の隙をついて左で拳を顔面にぶつける。当たりはしたが、上手く逸らされなかった。

「A A A A A——！」

「ようやく起きたかランスロット。いいだろう、まとめて叩き潰す」

「セイバー……！」

大きな口を叩いたが、実際のところ、この二人を相手取るのは困難を極める。

今回に限って言えばランサーがあまり積極的ではないために何とか戦闘の形を成し

『令呪を以て命ずる——ランサー、もう一つの宝具を開帳しろ』
「っ、御意……!」

もう一振りの魔槍。目に鮮やかな黄色の輝き。

ランサーは苦々しい面持ちながらも、彼の視線は私に攻撃しようとして鋭くこちらを射抜いていた。

繰り返される二つ目の宝具を回避するためにコンクリートを踏みしめ脚に力を入れる。

「AAAAA」ガフツ……?!」

!!!!!!

突然の咆哮と背後からの衝撃に一瞬思考が停止する。

気づいた時にはもう遅く、黄の薔薇は私の左腕と右太腿を斬り裂いていた。

即振り返り、左脚を軸にして血を流す右脚をランスロットの局部に打ち込み、右の拳を兜へ真つ直ぐ突きだした。

叫びをあげて転がるランスロット。動き出す様子はない。

「……正しい。隙をつけて私を負傷させる、実に理にかなっている——が、やられると非常に腹立たしいな。おい、立てランスロット。手足程度、枷にもならん。十分動く。ああ……いっそ、この場で去勢してやろうか」

「それはやめてやれセイバー」

「何故だライダー？ 敵を消耗させるのは戦の常套手段、急所を突くのが戦闘の常道。何か問題でも？」

左腕をグルグルと動かす。右の腿も上下に動かしたが、どちらも問題はない。

右手に宝剣を呼び出し、柄を握りしめる。切先をランスロットに向けたが、ライダーに止められた。

よく見ればランサーどころかアーチャーまで渋い顔をしている。

それに加えてアイリスフィールとライダーのマスターも呆れた顔をしていた。

「じゃあランサーから……」

「待て何故そうなる。思い出せ、俺とお前は騎士の決闘をしていたのだぞ。何故去勢になる。というか生前の部下に容赦ないな」

「うむ……如何に騎士王といえ女子、その柔肌おなごに傷をつけたとなつては騎士の名折れかもしれぬのう」

「ここでそれを持ち出すかライダー……!!」

「フ——ハハハハハハハハハハハハ!! 自らの首を絞めるとはとんだ道化よな雑種!!
ハハ、ハハハハハ——」

納得したようにうなづくライダーと心底愉快そうに大笑いをするアーチャー。

ぐぬぬとランサーは焦った表情で呻いている。

「セイバー、もう帰りましょう? 貴方も負傷してしまつたし、もうこれ以上の収穫は望めないのでしょうか? ね?」

『まあ……令呪で命を下したのは私なのだから、責任は私にもあろう。だが謝罪はしな

いし去勢もさせないぞセイバー』

「あ、主……！」

「まるで私が悪いかのように……仕方ない。これで解散とするか。ランスロットはどこに行つたのやら……」

ランスロットはいつの間にか姿を消していた。

結果的に、分かりやすい消耗をしたのは私だけという散々な結果に終わったが、この程度ならどうとでもなる。

聖剣の発動にも問題はない。手足が動かさしくいなら、その分頑張つて動かせばいいだけの話だ。

だが、楽観的になれない。間桐とアーチボルトがそれぞれ魔力と情報という大きな有利要素を備えている。

……今から先の展望に陰りが見えるとは、この戦争はやはり一筋縄ではいかないらしい。

「とりあえず、帰ったらマスターをシバくとして……この先を考え直さねば。帰るぞ、アイリスフィール」

「ええ」

「ふむ、では余も帰還するでしょう。だが騎士王、余は貴様を我が軍勢に迎えることを諦めぬぞ。ランサーもな」

『ウエイバー・ベルベツト、臨時の課題だ。その男の手綱をしつかり握れ』
「うええええええええ!?!」

アーチボルトの発言にうなだれる少年。アイリスフィールも苦笑していた。

「誉れ高き騎士王よ、此度の戦いはひとまず預ける。いつか必ず、決着をつけよう」
「ほぼ私の負けだがな……ああ、約束しよう」

そうランサーと言葉を交わし、背を向けた。

数十分後、とある廃ビル。

一時的に私とアイリスファイル、マスター、久宇が顔を合わせて作戦の立て直しをする事になった。

「それでマスター、これからどうするつもりだ？ 完全に悟られているぞ、貴様の手口が。この際、諦めるのも一つの——」

「まさか。僕は諦めない。何としてでも、聖杯を手に入れる。アンタにも付き合ってもらう」

それならそれでいい、と返答した。

マスターは冷静さを装っているが、視線と声色には隠しきれない焦り故の鋭さがにじんでいた。

「少なくとも、ランサーたちが本拠にしているホテルの爆破はほぼ不可能だろうな。設置した爆弾は撤去されているだろう。内部から忍び込んでアーチボルトの首級を狙う手段、ということではないな？」

「アンタの聖剣でホテル諸共破壊すればいいだろう」

「魔力の無駄だ。それに、逃げられたらどうする？」

無言で私をにらむマスター。

「奴らを確実に殺せるのか？」

「この世に完全などない。成功するかどうかはその時しか分からない。ある程度、消耗を狙うつもりではあるがな」

「そんな曖昧な建前で決断するのか」

「できる、できないの話ではない。——やるか、やらないかだ」

じつ、と見据える。

しばしの無言。

「……ねえ、切嗣。今回は、セイバーに任せましょう？」

「アイリ」

「セイバーの言う通りだわ……成功するか分からなくても、まず行動しなくちや始まらないと思うの」

予想外の助け舟だった。

マスターも呆けたようにぼんやりと妻を見つめている。

「では、私は向かうとしよう。戦果は期待するなよ」

「今から？ もう少し休んだら……」

「善は急げ、という言葉がこの国にはあるのだろうか？ もっとも、やっていることは善とは程遠いがな」

そう返答して紫紺の外套を纏い、フードを目深にかぶった。ビルの窓から飛び降りて、アスファルトに降り立った。

「——主、サーヴァントの気配がします。恐らく、セイバーかと」
「なるほど。爆破は諦めて真っ直ぐに攻略しに来たか。始めからそうすればいいものを」

冬木の夜景を一望するスウィートルーム。

「客人には相応のもてなしが必要だ。ランサー、丁重に迎えるがいい」
「御意」

そう言つて、霊体化するランサー。

二人の騎士による決闘が、再び行われようとしていた。

「——まあ、真つ向から攻略などしないがな。ただでさえランサーの黄薔薇^{宝具}が効い

ているんだ。これ以上の負傷は避けたい。勝利だけなら、ただ単にアーチボルトを潰せばいいだけの話だ」

倉庫街での約束？ それはそれ、これはこれ。

そんなことを呟きながらズリズリと這って前進する。

「しかし埃っぽい……当然といえば当然か。下水道ではないだけマシだと思えばいい」

通気口から忍び込み、するすると忍者のように縦横無尽に進んでいる。

多少、武装は解いているが、^{グエ}夜天の羽衣だけは外していない。

^{アサシン}暗殺者ほどではないが、多少の気配遮断効果も有している。

「……………ん？　話し声……………」

どこかの部屋に通じている口から、光が差し込んでいる。

「——ねえ、聞いた？　港のほうで、爆発が起きたらしいよ」

「本当？　何かの事件かしら……………嫌だわ」

「最近物騒だよ。この間も、深山で儀式殺人があったって」

爆発……………マスターか教会の隠蔽工作だろうか。

確実に被害を被っただろう倉庫街の関係者たちに内心で合掌し、再び前進を始める。

「ふん——小柄かつ貧相な我が肉体、こういうときに役に立つとはな。成年の私なら、こうはいかなかったぞ……」

脳裏に長身かつ豊満な己の姿を描く。

「まあなんでもいい。さて最上階を目指すとするか」

「ここから道は縦方向に伸びており、上手くのぼる必要がある。

「む……立てん。よっ——ほっ——それ……」

上方向に折れ曲がった通り道をどうにか潜り抜け、立ち上がることが出来た。

後は気づかれない程度に跳躍して上昇していけばいい……はず。

「……魔力の気配が近い。あと少し……」

「ランサー、私の傍に來い」

「は……」

廊下に送り出していたサーヴァントを呼び戻した。

「來ませんね。間違はなく、氣配がしたのですが……」

「奴の宝具だな。あの紫紺の外套……氣配遮断の效果を持ち合わせているのだろう」

苦々しく顔を歪める魔術師。

「忌々しい魔術師殺しと契約している以上、卑怯と言われるような手段も取ってくるは

ずだ」

「なるほど……確かに、真っ直ぐ向かってくるとは限りません」

「ああ——もしかしたら、もうこの工房に到着している可能性すらある」

魔術師の一言に緊張した面持ちで槍を握りしめるサーヴァント。

「F^沸er^きvor^立, me^てi Sa^我ng^がuis^血」

その主も魔術回路を起動させ、水銀の礼装を手繰り事に備える。
数分が数時間にも思えるような静寂が続いている。

「なるほど、大した慧眼だよロード・エルメロイ」

瞬間、爆音が響いた。

「 i s a
ツ、 S c a l p !
」

穴をあけて部屋に乗り込み、すぐさま氷の刃を魔術師に向かわせる。

その大半は魔術師が操る水銀に薙ぎ払われた。

続けて魔術を発動しようとアーチボルトに向けて手を伸ばす。

「Mag^魔ic bullet, Be^始gini^動ng
 Sim^一iltane^齊ous swe^掃ep^射!!!」

「ぐっ——、ランサー！」

「(っ)に!!」

「チツ……Track^追ing, Exp^爆losi^散on！」

予想外にランサーの行動が早い。廊下に設置した音だけのフェイク魔術にも引つかからなかった。

私が放った魔弾も素早く、そして確実に真紅の槍で切り払っている。

次の瞬間には黄の短槍が空を斬る音と共に鋭く突き付けられた。

宝剣で受け止め、胴や首を狙うように斬りかかると防がれ、鏢迫り合った。

「どこから忍び込んだ？」

「通^焔気口だ。卑怯だと思うか？ 下水道よりマシだと思いがな————

Flame, Blade rain」

「ツ——貴様……!」

刃の形をなした小さな炎を大量に降り注がせる。標的は無論アーチボルト。

「Clypeus——、Torque^三、trifocused^{集束}」

「何……?!」

「こうしたサーヴァントの闘争でマスターがお荷物とならざるを得ないのは事実だ。だが、優れた魔術師ならば少ない選択肢の中で最善を掴むのも容易いことなのだよ。侮るなよ騎士王。このケイネス・エルメロイ、ただの標的となるつもりはない」

「つ——なるほど。ただ縛るだけではなく、複数の水銀を変形させ、組み合わせることでより強固な鎖にしているのか……」

細く伸ばされた水銀が三つ編みに、それがさらに集まり束ねられ、強靱な縛めを作り出している。

加えて、私の肉体を折りたたむように縛り、そこへさらにぐるぐると針金を巻きつけるように動きを封じている。

……これらの縛りはあくまでも物理的な干渉であり、そこに対魔力は発生しない。

「だが、些か考えが足りないようだなロード・エルメロイ」

「何？」

「この程度の鎖——気合いと根性で物理的に突破すればいいだけの話だ!!!」

魔力を瞬間的に放出する。

半分以上の水銀の鎖が耐えきれずに千切れ解ける。

アーチボルトの首をとろうと宝剣を振り降ろすが、ランサーの槍に防がれた。

「つ……ええい、忌々しいな脳筋！ それでも音に聞く騎士たちの王ではないのかセイ

バー！」

「生憎、円卓の連中も似たようなものだ。ガウエインとかベディヴィエールとか、そのあたりは特に」

「なんと……」

愕然とした表情をとっている。

……：そういうえばこの男、イギリスの出身だったな。

「ま、円卓はどうでもいい。どつちにしろ、今ここで貴様らの首級をとらないとクソ野郎マに誂られる。悪いがここで退場してもらおうぞランサー、アーチボルトの当主。恨んでもらって構わない。何せ、慣れているからな」

「それはこちらの台詞だセイバー。無理解を胸に抱き、我が槍に貫かれるがいい」
「フン——それはそれで名誉なことかもな。ファイオナ騎士団のデイルムツド先輩？」

同時に足を踏みだし、狭い室内で剣戟を繰り広げる。

先の言葉通り、アーチボルトは多様な魔術でランサーを補助をしている。

そうして、軽く数十分は経ったころ。

ガシャン!! と、ガラスを突き破る音がした。

振り返ると、筒状の物体と球状の物体が転がっていた。

球状の物体から、青紫色の煙が噴き出している。

「何だね?!」

「っ、セイバー、これは……」

「ああ……やらかしやがったな、切嗣!」

私がそういった次の瞬間、球状の物体が閃光と共に爆ぜた。

青紫の煙が部屋全体に広まる。直感的に背筋が凍った私はランサーを彼のマスターの方へ突き飛ばした。

「っ——う、ゲホッ、ゲホッ、ゴホッ——催涙、弾……か……?」

「ぐ……目、が……セイバー! 無事か!? 返事をしてくれ! ツ、セイバー!!」

鼻の奥がツンとした熱い感覚を訴える。

煙に加えて、僅かに涙腺から漏れた液体で視界が霞み、行動がままならない。

「ッ、まず——逃げろランサー！ 爆発する！」

「な——!?」

直感が訴える危機に従い叫ぶ。

次の瞬間爆発し、どうにか魔術防壁を張って凌いだ。

爆発と共に煙がいつそう広がる。

「仕方あるまい……離脱しろランサー！ セイバー、貴様は自力でどうにかできるな！」
「う……無論、だ——!!!」

「生きて帰れよセイバー……そして次こそ俺と決着をつけよう！」

二人が立ち去るのを背中で感じる。

まずこのサーヴァントにすら催涙作用をもたらず煙をどうにかしようと思いを集める。

だが――

「――嘘だろ」

眩いた瞬間、轟音と破壊音が耳をつんざく。

衝撃にあおられて肉体が吹き飛ばされそうになる。

霞む視界でどうにかホテルから飛び降りた。

見上げると、二人の人影が寄り添うように飛び降りているのが見えた。
恐らく、ランサーとそのマスターだろう。

「とうの昔に墮ちてるよ、可愛い騎士王さん」

念話のラインにまで響く叫びに小さく返答する。

灰色と青紫色の煙を上げるホテル最上階から落ちる影。

ランサーとそのマスターは別の方向へ飛び降りたらしく、こちらからは確認できなかった。

余程戦闘を邪魔されたのが腹立たしいらしい。

むしろ、こちらからしてみれば無駄に立ち向かう彼女がおかしい。

あれだけ駒と自称していたというのに、いざ戦闘となればやけに自らの手で潰すことにこだわっている。

拳句の果てにはあのバーサーカー相手に素手で立ち向かうなど、正気の沙汰ではない。

「それにしても、随分と強いな……サーヴァント相手にも使える催涙ガス。使いどころは選んだ方がいいだろう」

そう言つて、球状の催涙弾を手に取る。

腐れ縁の情報屋から金品を対価にもらつた代物。

どうもこの手の高性能使い捨て礼装の製作に長けた人物がいるらしい。

ある程度聞いてみたが、何故アーチボルトに情報が回つたのは分からないらしい。

——ハア!? 何でアーチボルトにばれてるのさ!? ちよつと待つて調べる!

そして情報源ぶつ潰す!

意気込んでいた腐れ縁の鬼気迫る声色を思い返す。

これからの行動の指針にも影響するため、考えながら行動したほうがいいだろう。

「まあ、いい。どちらにせよ、上手く暴れまわってくれればいい」

そう呟いて振り返ると、カソック姿の男が立っていた。

ケリイ「爆破がダメなら外から砲撃その他でもすればいいじゃない」
マーボー「秘匿しろよ」

なおシキトリアにとっては邪魔でしかなかった模様。

脳筋だから根本的に話が合わないのは仕方ないね、是非もないネ！

サーヴァントを狂わせる愛の霊薬がある。

ならサーヴァントにも効果的な催涙ガスがあってもいいじゃない。

とりあえず切嗣くんの人脈パネエってことで一つ。

作中のケイネス先生、シキトリアの詠唱は〇ーグル翻訳で書き上げました。
何かおかしいところあつたら教えてくれるとありがたいです。

シキトリアが直接対決大好きなのは理由ありますが、それは追々……。

まあそれとは別にバサスロットのことは殴りたかつたらしい。

あとデイルムツドの黄薔薇で斬られても余裕で動ける理由もあります。

ただこっちは多分作中で語られることはないと思います。

他陣営有利改変

・バーサーカー魔力供給は桜

・ケイネス月霊髓液強化

次回こそ、直死の魔眼が役に立つ……ハズ！

どうにか帰還した後、私はアイリスフィールの誘いに乗って夜間ドライブを堪能していた。

最初はそれこそアイリスフィールに運転を任せていたのだが。

「ねえ、セイバー？ そろそろ変わってくれないかしら？」

「アイリスフィール、まだ五分だぞ……」

隣からの声に思わず辟易してしまった。

視線は前方のまま、夜の道路を自動車で走り抜ける。

「そうだけど……ね、お願い」

「悪いが少し待ってくれ。サーヴアントの気配がする。このまま運転を代わるのは危険だ」

「え——そ、それならそうと早く言っただろうかい！」

ぷりぷりと怒るアイリスフィール。

すまん、と一言謝罪を口にして再び運転に集中を向けた。

「……キャスター、よね？」

「恐らくな。アサシンはまだ存命だが、こうもあからさまに存在感を示すことはあるまい」

「まるでこちらを誘っているようだわ……どうするの？」

「決まっている」

何度目かのカーブを曲がり終え、アクセルに足を置く。

「——これでも聖杯戦争真つ只中、敵はここで討つ。アイリスフィール、屈んで頭を守れ」

「え？ まさか……」

「ああ——轢き殺す」

言つてすぐにアクセルを大きく踏み込んだ。

一気にスピードを上げる車。

私の視界はすでに遠く前方に待ち構えるやけに長身の男を捉えていた。

「R e s t r a i n t」
拘束

魔術でサーヴァントを縛り、確実に轢く準備をする。

加えて、車体そのものに魔力を集め、保護と打撃の効果を備えた外装を纏わせた。

インビシブル・エア
風王結界!!!

次の瞬間、ガン！ という音と共に強い衝撃が走った。

吹っ飛ばされる影に魔術による追撃を行う。

見えなくなると同時に、ペダルをさらに踏み込み加速してその場から離脱した。

「チツ……まだ生きているな。魔術師キャスターといえど、伊達にサーヴァントではないというところか」

「いったん、城に戻りましょうか。切嗣に報告して、次の作戦を考えないと」
「了承した」

少し速度を落とし、アインツベルン城を目指して思考を切り替える。

あのキャスターがどう動くかは分からない。だが、戦場を引つ掻き回すのは間違いないと思う。

ランサーといい、バーサーカーといい、ここまで不利条件が重なっている。

加えて、そもそも私は抑止力の働きによって現界した身。出来ることは限られている。

……地獄の果てまでマスターに付き合おうと誓ったが、それがどこまで通じるのやら。

正午に、キャスターとそのマスターへの討伐命令が下された。

「報酬は令呪の追加、か……」

「ランサーの宝具による支障は無いのか？」

「少し動かしづらいが、問題はない。ただ、長期的に見て負担になるだろう」

再びアインツベルン城にて、私含め四人で作戦を立てる。

「そういえば、マスターはコンピュータゲームを……やらないだろうな」

「むしろ英霊からそんな言葉が出るのが驚きだよ」

「まあ聞け。通常の戦闘で負った傷は、ゲームで言えばHPの数値が削られる、ということとは貴様でも分かるだろう？」

「あの宝具は違うと？」

「あれはHPの上限を減らすものだ。最大値が低くなっているから、治癒の魔術等も効

果がない」

「えつと……もつと別の例えは無いかしら？」

「うむ、そうだな……器に入った水をこぼすのと、器自体を小さくするのは、異なるだろう？」

戸惑った表情のアイリスファイルに別の例えを示すと、納得したように頷いた。

「こぼしたなら、新たに継ぎ足せばいいけれど、器が小さいなら、もともと少ない量しか入らないものね……」

「もつとも、左腕と右脚が少し動かしづらくなった程度だ。こんなもの、枷にもならん。聖剣の発動にも問題はない」

「そうか。ひとまずはその言葉を信じるとしよう」

マスターの一言を皮切りに、作戦会議が始まった。

「現状、一番の脅威はアーチャーだな……そのマスター、遠坂と協力しているアサシンと言峰。色々と面倒だな。そしてランスロット……間桐雁夜とは別で魔力供給の伝手があつたとはな。大方、遠坂の養子だろう。ランサーとアーチボルトも予想以上に手強い。ライダーは何をしでかすか不明。キャスターも、だがな」

「アーチボルトは拠点の工房を潰したから、ある程度戦力を削れたはずだ」

「どうだかな……ああいうやり手は、それを見越したうえで方針を立てている可能性がある」

すでに立ち直っている可能性すらあるぞ、と呟けばマスターの眉間にしわが寄った。

「攻撃を加えるとしたら遠坂や間桐の拠点を焼き払うことしか思いつかん。だがこれも上策とは言えないだろう。あの射出攻撃手段で単独行動もちは色々面倒だ。暴君などと畏れられた男、マスターがいらないほうが危険だ」

「なら、バーサーカーのマスターを狙った方がいいか？」

「間桐雁夜が何処で何をしているのが不明だが、それがマシだろうよ」

キャスター討伐後の標的は間桐とランスロット、と方針を立てた。

そこで、どのように奴らを潰すかをマスターともども話し合おうとした矢先。

「——ツツツ……!!!」

「アイリ?」

「切嗣、セイバー……侵入者だわ」

「ほう? なるほど、大方キャスターだな? 他にも何人かいると見た。切嗣、アイリス

フィール。席を外すぞ」

「倒せるのか?」

「努力はするさ。森が荒れると思うが、そこは大目に見てくれ」

「ハア——ッ!!!」

海魔を斬り裂く。

たまたま眼前にいた三体を輪切りにしても、そこからさらに再生して増殖、加えて新たに湧き出てきた。

「ふむ、貴様を殺した方が速そうだなキャスター？」

「おお……ジャンヌ、私の……尊き麗しの聖処女……！ 復活の日を迎えられしこと、心より祝福申し上げます……！」

「会話は不可、と。まあなんでもいい、どうせ殺すだけだ」

ふと辺りを見回せば、戦場にはおよそ似つかわしくない人影を複数確認した。そのすべてが年端もいかない、幼児である。

思わず舌打ちして魔術を起動し、虚ろな瞳でこちらをぼんやりと見つめる子供たちに付与された魔術を消す。

「Object 対 design 象 nation 設 — Magic 魔 Cancel 術 解 除」

詠唱すると、虚ろだった幼児たちの瞳に光が灯る。

戸惑ったように周辺を見回す子供たち。

「Teleport」転 移

次の瞬間には子供は一人も残っていないかった。

周囲数百メートルの範囲内における気配を探る。サーヴァントと魔術師以外には、何もいない。

「邪魔者はこれで消え去った……それじゃあ、その首をもらうぞ、キャスター」

「何故、です。ジャンヌ、何故このようなことを？ 私から貴方への贈り物、一体何が気

に食わないというのですか……?!」

「何を言うかと思えば。私も貴様もサーヴァント、ならばやることは殺し合いしかあるまい?」

邪魔なものがあつたら片づけるのが常識だろう、と偉そうに説いたものの、恐らくほとんども通じないだろう。

精神汚染のスキルを有し、私を聖処女ジャンヌ・ダルクと誤認している。まともな応答を期待する方が筋違いだ。

現に、私の眼前、キャスターの周辺から、新たな海魔が現れようとしていた。

「神よ……どれだけ試練を与えれば気が済むのですか!!? 私どころか、ジャンヌにまで

こうもむごい仕打ちを……オオ！ ご安心めされよジャンヌ。不肖ジル・ド・レエ、貴

方様を忌まわしき呪縛から解き放ちましょうぞ——！」

「フン、そうやって初めから私を殺しに来ればいいんだ」

刃を振るう。

下手に斬り裂くのは難しい。一体を二つに斬ってしまえば、二体に増殖してしまうからだ。

ならば——

「こうするしか、ないな」

脳が過熱する。内臓が締め付けられる。

視界に、青い線が走り、青い点が浮かぶ。

海魔に浮かぶ線をなぞるように、宝剣の刃をなぞる。

増殖はない。

殺せばそのままだ。

「おのれ……穢れなき聖女に取りつく悪魔が!! こうもジャンヌを侮辱するなど、恥を
知れエエエエエエエエエエエエ!!!」

「死^{サトウアン}人の癖にうるさいな。私も同じだが」

とはいえ、この宝具はほぼ無尽蔵の召喚を可能としている。

いくら確実に潰せる手段があったとしても、無限の海魔相手にはきりがない。

視界の八割を占めるほどの海魔の群れ相手には、どうしても後手に回ってしまう。

脳が嫌に熱い。視界に焼きつく死線と死点がやけに濃く見える。

「恥を知るのは貴様のほうだ、キャスター！」

突然耳に入る男の声。

視界に赤が横切った。

「何者?!」

「……ランサー?」

視線を向けると昨夜も鎬を削った麗しい槍兵が立っていた。

足元には彼が屠ったと思しき海魔が転がっている。

「すでにセイバーの首級は我が獲物と定めている。俺がここに現れたのは彼女と決着をつけることに他ならない。このデイルムツドを差し置いて左腕と右脚を傷ついたセイバーを討ち果たすことは、断じて許さぬ」

起動していた魔眼を切り、霞んだ視界で朗々と語るランサー。
敵意のこもった視線でキヤスターをにらみ、赤い槍の切先を向ける。

「退け、青髭。なおもこの森に居座りセイバーを攻撃するのなら、これより先は俺が相手になる。無辜の幼子たちを手に掛けた業、ここで清算する時だ」

そういうや否や、キヤスターに向かって駆け出し、赤と黄の槍を海魔へ振るい始めた。彼の背中を追うように再び海魔の死線を剣でなぞる。

キヤスターも負けじと海魔を呼び出し、私とランサーに攻撃させている。

「フン——まるで終幕戦争だ。あの時は海魔なぞどこにもいなかったがな。だが、増殖ぶりは蛮族を思わせる」

「案ずるな騎士王。此度は月が落ちる珍事など起こるまい。思う存分、剣を振るうがい」

「……さて、どうだかな。変な事件は、発生するだろうよ」

軽口を叩きながら海魔の排除を行う。

キャスターの憤怒の表情に浮かんでいる血走った眼はこちらを睨みつけている。

「ランサー。キャスターの魔導書は貴様の槍で壊せるか？ あれが海魔の維持を担っている」

「可能といえば可能だが、海魔が邪魔だな。セイバー、道を開いてほしい」
「了承した」

ふう、と息を吐き出し左手をキャスタに向ける。

ちようど、腕がキャスターへ続く道のように視界には映っている。

「燃えろ」

「その言葉、そのまま貴様に返すとしよう」

胸から流血しながら激昂するキャスター相手に、あくまで冷静に応えるランサー。

再び海魔が召喚されるも、落ち着いて対処する槍兵相手にはもう打つ手がないと思われた。

「……ッ、ジャアアアアアアンヌウウウウウウウウウウ!!!
今、お助けいたしますぞオオオ

オオオオオアアアアアア!!!」

「何!?!」

「キャスター、貴様……?!」

海魔をランサーの合間を縫うように放たれた禍々しい黒と赤と紫の混じりあったバスケツトボール大の魔力弾。

宝剣で斬り裂くが、同時に爆発したように黒と赤と紫が広がり、私の周辺に立ち込め

る。

「あ——ガツ……！ アアア、ウ……コフツ——」

「セイバー!?!」

突如、背中と腹から押しつぶされるような感覚と共に、全身の関節に金属片が挟み込まれたような激痛が走った。

同時に視界が明滅する。喉から棒を突っ込まれ、胃袋をかき回されるような異物感。口から生温い液がこぼれる。

地面を踏みしめることが出来ない。指先も、踵も、完全に凍りついている。完全に動かない。

気づいた時には地面にうつぶせに倒れていた。どうにか顔だけあげて、キャストターを睨み付ける。

「きやす、たー、貴……様——っ、ゴホッ、ケホッ、カハ……ッ、——!!」

「少し大人しくなってもらいますよジャンヌ……我が友より受け継ぎしモノは、何も魔導に限った話ではない」

「は……っ、なる——ほど、な……だが、っ——この程度で私が立ち止まると思ったか!!!!」

動かない右手を無理やり動かして人差し指を立ててキヤスターに向け、ガンドを放った。

一発撃つだけでも一苦勞とは。全身が血液ではなく熱湯が巡っているように熱い。

「フン——わが師スカサハの鍛錬を思い出す。あれに比べればこの程度、優しいものだ」

——貴様に状態異常の術を掛けた。私を殺してみろ。

——一応聞きますが、具体的には？

——まず呼吸で生み出す魔力量の大幅減少。全身麻痺。視界の制限。眠気。吐き気。あと……

——あなた殺される気ありますか!?

殺されたい、などと言っているくせに全く逆の行動ばかり選んでいる師の一人。あのアルスターの光の御子も、似たような目にあつたのだろうか。

「はっ————一つ、言うのを……忘れていた。完全な人違いだキヤスター。私はジャンヌ・ダルクではない。私は……アーサー、ブリテンの騎士王アルトリア・ペンドラゴン。お前の敵だ。くれぐれも、間違えるなよ」

ただそう言い残して口を閉ざす。これ以上は舌と喉を動かすのも正直つらい。ランサーはひたすら海魔を槍で穿ち、斬り払っている。

先程までキヤスターは般若の形相でこちらを睨み付けていたが、今は打って変わって能面だ。

「……ここまで、ですね」

「っ!! 逃げる気かキャスター! それでもかつては聖女の剣として戦った高潔なる騎士とでも?!」

「戦略的撤退です。ジャンヌ、私は貴女を諦めませぬ。必ず、貴女に植え付けられた偽りの記憶を打ち破り、忌々しい呪いから解き放ちましょう。それまでどうか、御身に災いのなきことを……」

キャスターは霊体化して消えた。

残っていた海魔は、次々にランサーの手で消されていく。

その様子を、私は地面に倒れ伏しながらぼんやりと眺めていた。

……海魔の体液と私が吐いた血液が混ざりあい、土にしみこんで気持ち悪い。

消耗を防ぐために、魔力で編んでいた鎧を解いた。

「ぐ——うぐ、ゲホツ……ゲホツ、かは……ツ——ああ、くそ……なんで、こうなる……っ、は、あ——」

「しっかりしろセイバー! 言っただろう、お前の首級は俺がもらうと。ここで倒れる

「など、騎士の名折れではないのか！」

「は——お優しいことだな先輩。完全に無防備な私を今討てばそれは叶うというのに？」

「確かにその通りだ。だが、今ここで勝たなければならないのは、セイバーか？ それともランサーか？ 否、どちらでもない。ここで勝利すべきは「騎士の道」、我らが奉ずる誇り高き誓いに他ならない」

そう言って、倒れ伏した私を丁寧に抱き起こすランサー。
定まらない焦点をぼやけた視界に映っている青年に向ける。

「……マスターにどやされそうだ。こんなにも綺麗な理由で見逃されるなんて」

「エミヤキリツグか……。話には聞いている。卑劣、姑息な手段で無辜の民草を犠牲にする悪漢だと……そのような男がお前を召喚するとはな」

「そう言うな。あの男なりに苦しみ、絶望を味わい、必死に足掻き、戦いを続けてきた結果だ」

マスターの生き様と手段を評価する権利は私にも貴様にもない、と痺れる舌先を動か

す。

空気が喉を通るたびに奥底から温い液体が逆流する。思わず咳込むと、口元から血液がこぼれた。

「つ、ゲホツ、ゲホツ、う——ッ、ん……は、あ……さすがに、これは予想外だな……」
 「あまりしゃべるな——いや、頭脳と同時に動かし意識を保っていた方がいいのか？」
 「あいにく、この靈基肉体はそう簡単には壊れない。まあ、今は中途半端に機能が故障しているがな」

「キヤスターが最後に放った魔弾……魔術、ではないのか。こうもお前が苦しむということとは」

「寧ろ呪術……いや、呪詛の系統だな。あの魔導書はキヤスターの友人、プレラーティがイタリア語に翻訳したもの。原書は中国語で、夏王朝の時代のものだったはずだ。魔術とは法則ルールが異なるモノが記されていても、おかしくない」

対魔力では防ぐことが出来ない代物だな、と内心落ち込みながら説明する。

……戦争において、完全に有利に立ち回ることが出来る機会なんて、本当に限られていることは知っている。

だが、こうも予想外な出来事が次々に起きて、上手く物事が進まない、気分が沈んでしまう。

今回に至ってはランサーに助命までされてしまった。

これからどうしたものか、と今後の行動を脳内に描こうとするも、頭が上手く働かない。

「——他はまだ戦闘しているな。アイリスフィールと久宇……相手は、言峰か？」

「誰だ？」

「アサシンのマスターで、監督する教会側だ。アーチャーのマスターと盟約を交わしてアサシンの退場を偽装したらしい」

「……それが、何故ここに？」

「さあな。一応、教会の人間だから、神秘の秘匿やらにある程度気を使う必要はあるだろうが」

「向かうのか？」

「行けるものなら、な」

頑丈さに定評のある霊基（肉体）はキャスターの呪詛に蝕まれ、思うように動かない。

一刻も早く彼女たちの元へ助力に向かいたいが、向かったところでお荷物が良いところだろう。

衰えた状態でも暗殺者（ハサン）から逃げ切った代行者。全盛ともいえる現在なら、どうなるだろう。

「よし。行くぞ、セイバー」

「は————待て。何故貴様が？ 私を抱えてまで行動を共にする理由などないだろう。考え直せ。あと降ろせ」

「ことわる。傷ついた乙女を捨て置くなど、騎士にあるまじき行動。大人しくしている、後輩」

あつさりとし蹴したランサーはそのまま私を抱えて戦闘の気配がする方向へ駆けはじめた。

呪詛に苦しみ、意識を飛ばしているうちに言峰は森から去って行つたらしい。

アイリスフィールからランサーへの謝辞を右から左へ流していたら、城に戻ることに
なつた。

またしても美青年に抱えられる羽目になつたが、それなりに楽なので大人しくそれな
りに筋肉のついたランサーの腕の中に納まっている。

ところで、どうしてアイリスフィールはそんなにも輝いた目で見つめてくるの？

眼を閉じていても感じる視線に内心で辟易していた。

疑問を抱いても口にする体力も気力もない私は無言を貫き通した。

城内で戦闘していたのはマスターとアーチボルト。

魔術師であるかぎり敵ではない……と豪語していた切嗣のことだ。

恐らく起源弾を決めているだろう。

「などと思っていた時期が私にもありました……」

「まったく、手を焼かせてくれたな魔術師殺し。それとランサー、腕の中のソレはなんだ

「？」

平然と立っているロード・エルメロイ。多少の傷はあるとはいえ、五体満足である。その眼前には血まみれで蹲っている我がマスター切嗣。重傷。見るだけで痛々しい。

「おいクソマスター。貴様自分の発言を忘れたか？ 魔術師殺しの名はどこに行つた？

お得意の起源弾は？ 貴様傭兵だったよな？ なんで研究者に敗北しているんだ？

それで聖杯を手に入れるつもりか？ そもそも貴様にできるのか？」

「……そういうアンタこそ、英雄サマの癖に魔術師にやられて、その彼に救助されてるじゃないか。王妃の不倫を容認したからと言って、自分が顔の良い男に誑かされてもいいって？ 自分本位もいい加減にしたらどうだい、可愛い騎士王さん」

「やめろ気色悪い。というか切嗣、そのザマで聖杯求めちゃうのか？ 冗談も休み休み言え、だからお前はダメなんだよ正義の味方（笑）」

「人間が理解できない癖に僕を語るなよ、怪物」

私とマスターの間だけ吹雪でも起きているようだ。

あれだけ痺れ、凍っていた舌先が嫌味を言う時だけは動く動く。

「三戦中、二勝一分け……といったところか。期待外れだよアインツベルン。魔術師殺しなぞを招いておきながらこの体たらく」

「むしろ貴様がこうも有能なことに驚愕を禁じ得ない。良かったじゃないか先輩、貴様のマスターは当たりだぞ」

「言外に主を侮辱していないかセイバー」

「まさか。ついこの間に会ったばかりの男を侮辱するとか、逆に難しいのではないか？ あと先輩、いい加減降ろせ」

「断る」

眼を閉じていても分かる。こいつ笑っているな。

あとアイリスフィール。凝視しないで。見世物じゃないから。

「悪ふざけもそこまでにしたまえランサー。いつまでも抱えている理由は無はずだ」

「御意」

ようやく降ろされた。ご丁寧に床に寝かせるオプション付き。
そしてアイリスフィール。残念そうな顔をしない。ランサーも。

「さて……今私を討てば貴様の嫌いな魔術師殺しはここで退場。切嗣本人でも同様。やるなら今だぞ、ロード・エルメロイ」

「セイバー、俺は——」

「貴様の意見はもう聞いた。だが、聖杯戦争で優先するべきはマスターのほうだ」

「ふむ——ランサー、ここまでの働き、見事であった。貴様が奉じる騎士道に応えぬほど、私は矮小ではない」

「はっ、主従そろって優しいことだ。後悔しても知らんぞ」

「己が行動の責任をとれぬほど幼稚ではない。案ずるな、貴様の主君も、十分に痛めつけている」

「だろうな。それを聞いて安心した」

当人は手足と口元から血を流し、苦しそうに咳込んでいる。顔色は蒼白だ。どうもお互いに似たような目にあつたらしい。

「だが、覚えておきたまえ。貴様をここで潰すのがどれだけ容易いかを。ゆめ忘れるなよ衛宮切嗣。貴様が敗北したのは名誉と矜持を理解できぬ視界の狭さ。貴様が生き延びるのはセイバーの清廉さゆえということを」

そう言い残して、アーチボルトは去って行った。

ランサーも、一瞥を残して霊体化した。

「……アーチボルトは節穴か？ 私が清廉だと？ 自ら国を滅亡に追いやった愚か者だぞっ。」

「あら。そう思っているのは貴方だけ、ということじゃないかしらっ。」

「ぐ、む……やはり人間の心は分からねな。この場合、心というのは誤りかもしれんが

……」

――

「お姫様抱っこ」ってかわいいですよね。

私個人の趣味でシキトリアさんはヒロイン……のような扱いをさせております。

イケメンに助け出されるとか本当に素敵じゃないですか？

※なお本人は自分のことをラスボス系統だと思っている模様。

ケイネス先生強化しすぎたかな……このままいくとバゼットさん級になりそうな……。

単純にケリイを殺すのではなく痛みと苦しみを与えて放置するっていうね。

次回：王の飲み会（予定）

夜が明けて。

「セイバー、体の調子は？」

「そこそこ回復した。恐らく、あと少し全快するだろう」

「良かったわ」

にこり、と貴婦人らしい花がほころんだような可憐なほほえみを浮かべるアイリス
フィール。

現在、私は城の一室にある寝台に寝転がっている。隣室では、マスターも同様らしい。
マスターはアーチボルト、私はキャスター。それぞれに負わされた傷をじっくりと癒
していた。

アイリスフィールは寝込んでいる私たちの部屋を行き来しながら雑談を楽しんでい

た。

「今日か、明日か……その辺りには、脱落するサーヴァントが出るだろうな」

「唐突にどうしたの？」

「そろそろ聖杯戦争も佳境だからな。私も抑止としての役目を果たさねばならん」

「セイバー、それは……わたし達を、裏切るということ？」

「貴様と貴様の夫は裏切らない。貴様らの背後は……正直、何の感情も湧かないな」

はつきり言っただけでもいい、と断言すればアイリスフィールの口元が引き締められた。

「ここだけの話だがな。第三魔法とは人類の未来と進歩を示すもの。人類の発展には欠かせない重要な概念だ。故に、天の杯ヘヴンズ・フィールを利用することは、世界人類にとって重大な出来事である……とも言える。要はタイミングの問題だよ。今現在、第三魔法を再現しようと思っても、それが現在の世界人類に合致するとは思えん」

別の世界線にて、とある信仰者の少年が果たそうとした願い。

それが結局阻止されたのは、その世界ではまだ第三魔法の行使は早かったのだから。

では、今この世界ではどうだろうか？

第四次聖杯戦争がまさに起きている二十世紀末に、^{ヘウンス・ファイル}天の杯は相応しいのか？

「——あくまでも、私個人の推測だがな。それだけ、魔法とは世界に重要な力を秘めてい
る」

「……つまり……この聖杯戦争では、わたし達の使命は果たされないということ？」

「その可能性が高い。……まあ、逸る気持ちは分らんでもない。これまで散々失敗してきたのだろうか？ 私としては、ゆつくりと人類を見守るのも一つの術だと思っ
^{アインツベルン}貴様らには頭が痛い話かもしれないが」

人類がその領域に至るときまで、と呟くように傍らの貴婦人に語った。

「ねえ、セイバー」

「何だ？」

「貴方って、何者？」

真つ直ぐと此方を射抜く赤い瞳。

この眼差しは、確かにエルーシヤを思わせる。

「さっきの貴方の推測、わたしには数割も分からなかった。話があまりにも大きく聞こえたから、かしら。分かったのは、貴方は物事をとても高い視点から俯瞰しているということ。それこそまるで神のように。……貴方、何者なの？ 本常にブリテンの騎士王？ ……アインツベルンの系譜にして聖杯の原型アーキタイプ？」

。

「あの……セイバー？」

「ん——ああ、すまん。驚いてな。先程の会話で見抜かれるとは思わなかった」

「それって——」

「先に言っておくが、確かに私は騎士王であり、エルーシャの弟子にして冬木^{貴様}の聖杯^{たち}の大元だ」

遮るように断言する。

瞠目したアイリスフィールはどうか私の発言を飲み込もうと頷いた。

「それと、最初の質問だが……悪いが、今は回答を控えさせてもらおう。後で答える」

「どういふこと？」

「貴様同様、私の本性を見抜いた奴がいるということだ。————そら、敵だアイリス

フィール」

次の瞬間、破壊音が城中に響いた。

轟音と共に大きな揺れが肉体に伝わる。

「な、何?! 一体なんなの!?!」

「サーヴァント……手口から察するに、ライダーだな。迎え撃つか」

手早く武装を整え、部屋から飛び出し、一直線に音の方向へ駆け抜ける。

まだ姿は見えないが、攻撃に備えて剣をふりかぶった状態で疾走する。

そして、奴の戦車をとらえた瞬間、剣を振り下ろし、同時に風の攻撃を繰り出した。
だが。

「——ッ、おおう……危ないではないかセイバー。客人は出迎えるのが迎える側が示すべき礼儀というものだろう」

「挨拶代りに殺そうとしただけだ。何か文句あるかライダー」

「無粋な奴め。折角酒宴のために酒も大量に用意してきたというのに」

「しらん。どうでもいい。酒が飲みたければ勝手に飲め」

「落ちていてセイバー。いいじゃない、少しは現代いまを楽しんだって」

アイリスフィールの制止と提案に思わず視線を向けた。

彼女の瞳にはこちらへの労りの情が乗っている。

……まだ全快していないことを案じられているのか。

「その女子おなごは分かかっておるようだ。どうだ、此度は剣を収め、余と杯を交わし共に語らおうではないか」

「——ッ、チツ……あとでどうなっても知らんぞ」

「大丈夫よ。それじゃあ、場所を移動しましょう？ いいところがあるわよ」

「それは楽しみだ。案内あなしてもらおうとしよう」

……この二人。何故なんこうも和気藹々わいきあいとしているのだろうか。

Side: アイリスフィール

連れてきたのは城の一角に設けられた、白い花々が美しい庭園。

その中央で向かい合うセイバーとライダー。それぞれ隣にはわたしとマスターの男の子。

「ふむ……良い夜だ。良い月だ。そうは思わんか、騎士王」

「——ああ。こういう静かな時間も悪くない。月は……あまり、いい思い出が無いけれど」

「おお、知っているぞ。確か、ブリテン終幕戦争だったか。星の外から来たという侵略者たちに勝利したという」

「勝利？ 単に追い払っただけだ。朱い月にとどめを刺したのは師匠、ORTは外宇宙に吹き飛ばしただけ。むしろ、ピクト人と死徒には徹底的に蹂躪された。総合すれば敗北だよ、あんなものは」

「……前から思っていたんだが、貴様、自己評価が低すぎないか？ 誇りも何もあつたもんじゃない。騎士の王が聞いてあきれる卑屈っぷりだ」

「貴様にはそう映るのか？ よく分からんな……私はただ事実を言っているつもりだが」

ライダーの問いに内心で賛同する。

何度か彼女の生前の話を聞いたけれど、セイバーが胸を張るようなことは一度もなかった。

ただ淡々と過去を言葉にして、最後に付け足すように自嘲するだけだった。

「セイバー、本当に望みがないのか？ 聖杯を求めぬのか？ ただ主人に殉じると？」

「私は願望を持たない。貴様とは違う。貴様は貴様で聖杯を求めて邁進していればいい。それもまた、一つの価値観だろう。貴様の在り方は、確かに当時の人を魅了したのだろうな」

「貴様……」

……これまでセイバーに対して抱いてきた、錆びついた鎖の様な違和感が解けていく。

視点が俯瞰的。これは先程感じた。

そして——受動的。

これまでセイバーは作戦で意見を出し、戦闘で行動をしていたが、それはあくまで戦闘代行者としてのもの。

けれど……彼女が個人として意思を表すことが、一体どれだけあったのだろうか。

初対面の感謝。

バーサーカーとの一騎討ち。

切嗣への罵声。

……これ以上は思いつかない。

セイバーは余りにも能動性に乏しい。自分の感情・意思を出さない。

これでは、まるで——

「人形のようだ……か？ アイリスフィール」

わたしの思考を先読みするように声をかけてきた。

相変わらず、静かな視線。けれどももう、わたしにはこれまで通りの眼差しだとは思えない。

彼女の宝石のような瞳には、感情がない。ただ、底なしの虚無でしかない。

「——自覚はあったようね、セイバー……けれど大問題だね。無自覚で「そう」ならまだ直しようがあった。だけど、自覚していながら「そう」在り続けるなんて——そんなの、そんなのおかしいでしょう……！」

「そうか……これでもマシになったほうなんだが、まだ程遠いな。勉強が足りん。私にはお前が羨ましいよ、アイリスフィール。切嗣と出会って、人並みの感情と意思を手に入れたお前が」

心の底から羨ましい……って、ポツリと呟くセイバー。

見た目は可憐な少女なのに、瞳は無感情にわたしに向けられていた。

「——セイバー。お願い、答えて。貴方は……何者なの？」
「余からも問おう、騎士王。貴様が抱え、貴様を苛むモノの正体を」

……本性を見抜いたのはライダーのことだっただろうか。

それすらも悟るセイバー。僅かに、薄気味悪いものを感じる。

けれど、目を逸らしてはならない。

アインツベルンの系譜として、始祖ユリセシカが彼女に何を見出したのか。

わたしは、知らなくてはならない。

ライダーから手渡された杯になみなみ注がれた酒を飲むセイバー。

口から離し、静かに床に置いた。

無言で杯の酒を見つめているセイバー。……否。見ているのは、映っている月だ。

ただ静寂に浸りながら、彼女が紡ぐ解答を待ち続ける。

「私は――」

逡巡している。迷いに視線が揺れ、唇が不安げに開閉を繰り返す。根気よく、セイバーが決断するのを待つ。待ち続ける。

「……わたし、は」

ギュツ、とセイバーの眼が強く閉じられ、そして開かれた。

酒に映る虚像の月を見つめる瞳は、決意に満ちていた。

「私は、根源接続者だ」

——
ああ。

思わず涙が溢れそうになるのを必死で押しとどめる。

泣けない彼女の前で、そんなことできるわけがない。

目頭が熱くなるのを耐えながら、散らばったピースが次々に繋がっていくのが分かった。

根源。無色。万能。願望機。聖杯。原型。——……………。

同時に、円卓の騎士やブリテンの民に怒りさえ湧き出る。

分かっている。この怒りは無意味だ。むしろ、彼女からしてみれば迷惑にも等しい。

過ぎ去ったからこそ過去。

それを評価するのは後世に生きる人の特権だけど、この怒りは本当に意味がない。

でも、仕方ないでしょう？

無色透明で純粹無垢な彼女に、理想の王を押し付けたのは、その人たちなんですもの。

「根源、だって……?!」 嘘だろ。そんなのが、ブリテンの……騎士王……?!」

「まったくもってその通りだよライダーのマスター。始めから間違っていた。あつてはならなかったんだよ、こんなこと」

「……坊主。根源、とは何だ? 現代の魔術師が追い求める者ということとは分かるが……」

「ハア!? それは、ええと……」

「有体に言えば「真理」「究極の知識」といったところか。全ての原因だからこそ、全ての結果たりえるモノ。^{ハジマリ}始にして終の渦^{オワリ}。そんなモノと、私は繋がっていた。それこそ、生まれる前……母親の胎^{ハラ}から、ずっと」

「それは……つまらんのではないか?」

「ああ。人間が全能になったのではない。全能が、人間の振りをしているのだ。人間性も感情もない、生きた亡霊だ。実際、赤子や胎児の段階で生命活動を止める奴もいた。……私は、そうはならなかったがな」

セイバーの声色が少し沈んだ。

彼女が何故呼吸を止めなかったのか。何故生きることをやめなかったのか。

その答えを、わたしは知っている。

「始祖ユリセシカ……よね？」

「そうだ。私が生誕する前に、私の本質を察知し危惧したエルーシャは、無色透明だった私に在り方を定め、定義を与えた。」

「聖杯の……原型」

「あらゆる全てを可能とする私に枷を作った。それが聖杯。ただ過程を省略して結果を得るのみの、魔術礼装。マーリンの目を盗んで、な」

「……つまり？」

「苦手分野はホンツツツツツ理解力ないなお前！ 要はその酒樽だよ！ 樽がなきゃ、酒はこぼれるだろ？」

「おお、なるほど！ 形のない液体に容れ物を作ったと！ そういうことだなセイバー？」

「ニュアンスはそれで問題ない。……これでようやく、ギリギリ人間の振りをして生きることが出来るようになったわけだ」

首をかしげるライダーに彼のマスターが確かに分かりやすい例えを出す。

容れ物を始祖ユリセシカが作ったなら、他三人の魔術の師たちは、さしずめ酒の汲み上げ方だろうか。

そんな例えを考えると、ライダーの確認に返答したセイバーは、話を続けた。

「とはいえ、根本的に在り方が異なる以上、馴染めるはずもなかったがな。王になる前から、民には疎外されていた。当然といえば当然だが」

「なあ……なら何で王になったんだ？ 聖杯杯があっても、お前にできないことは少なかっただろ。だったら、逃げて別の道を選ぶことだってできたはずだ。なのに、どうして王になったんだ？」

「別に、大した理由もない」

ライダーのマスターが示した問いに簡素に答えるセイバー。

床に置いていた杯を持ち上げ、唇を濡らしてから回答を続けた。

「当時のブリテンはウーサー王の後継を望んでいた。王となって、民を救う、理想の存在をな。私はそのために生み出されたわけだが……どうせやることもないから、選定の剣を抜いた。所詮は望まれた存在だから、望まれたように振舞うのも、いいんじゃないかと思つてな」

「セイバー、それは……」

「何だ、アイリスフィール」

「……いいえ。遮つてごめんなさい。続けてちようだい？」

了承した、と返答したセイバーに、再び錆びついた鎖の様な違和感を覚える。

……切嗣に「地獄の果てまでついていく」とまで宣言したセイバーが、そんな理由で王位に？

まだ出会つて一週間程度だけれど、それでもおかしいと思う。

そんな無責任な性質なら、ランサーとそのマスターは彼女を清廉と評するだろうか。

それとも、実際にセイバーはそういう存在で、ランサーたちが誤認していた？
でも、バーサーカー相手に徒手で戦い、言いたいことがあるなら言うように勧めた。
た。

——分からない。

わたしには、騎士王深淵を識ることは、できないのだろうか。

「最も、王となった以上、戦争やら蛮族の駆逐やらで肉体が何度も傷つく。これは当然だがな。ただ、問題だったのは、枷であった聖杯までも傷ついて故障したことだ。その結果、私は聖杯の域を逸脱し、何度目かの臨死体験の時に、面倒極まりない能力を手に入れた」

閉じられたセイバーのまぶたが開かれた瞬間、思わず呼吸が止まってしまった。

……彼女の瞳は、湖畔の森林から、紺碧の青空に変じていた。

「直死の魔眼。対象の死を読み取る異能。こんなものを手に入れるまでになつてしまつた」

「セイバー……」

「征服王。私は怪物だ。人間と相容れることはない。そもそも、聖杯で叶うことは自力でどうとでもなる。私に人の心は分お前からんが……それでも、お前の王道が民のためとなつたことは分かる。正直なところ……生前から、お前は私の憧れだった。——変な話だろう？ 人形が人間に憧れるようなものだな」

死を映す魔眼が、人の限界を極めた王に向けられる。

眩しそうに細められているが、一体セイバーの視界には何が映っているのだろうか。

「だがそれでも不可解なことはある。騎士王、貴様は身分を隠して民の暮らしに紛れて

おったそうだな。それは何故だ？ 己を怪物と定義する貴様が、何故自ら相容れぬ人間の仲間に入った？」

ライダーの問い。

直死の魔眼に臆することなく堂々と向き合い、語る。

まさに征服王の在り方そのものようだ。

確かに、全能故か、セイバーは多くの矛盾をはらんでいるように見える。

伝承に語られる三つの貌。

その一つである、ただの小さな人間としての側面。

本当にセイバーが怪物なら、この側面は機能しないのではないか？

「学習のためだ。民を治めるには、民を知る必要がある。だから、民がどのような生活をしているのか知る必要があった」

「だが、ローマにて別離の際、騎士たちには全く見せなかつた涙を、民の前で初めて見せておるのだろうか？ 学習対象に向ける態度ではなからう」

「それは……経験が、刺激され——あれ……いや、違う——わたし、は……、——

」

突然、セイバーの瞳が戸惑いに揺れた。

この問答が始まって、初めて人間らしい姿を目にしたと思う。

「ちがう」「そうじゃない」としきりに呟くセイバーは、迷子の幼子にしか見えない。

……次の瞬間、わたしは思わず息をのみ、口元を掌で押さえてしまった。

何故なら、セイバーの瞳からは、真珠のような涙がこぼれ落ちていたのだから。

「何、だ……これは……こんなの……知らない、わたしは……ただ、みんなを……守つて……」

涙をぬぐい、濡れた掌を奇妙な物体でも観るかのように凝視するセイバー。

……胸が苦しい。

もう終わってしまったことなのに、今の世界では過去になってしまったことなのに。わたしは……セイバーの迷いに、胸が張り裂けるような痛みを感じている。

「なあ騎士王。確かに貴様は怪物かもしれん。人とは相容れることはないかもしれん」

いつも明朗快活で芯のある太い声の征服王が、打って変わって父親の様に優しく語りかける。

「だが、貴様は別れに涙した。永遠の別離を嘆く民に謝った。後を生きる騎士に希望を託した。未来は明るい、夢見ながら死したわけだ。そら、まるで人間ではないか！よく聞け。怪物なれど、貴様は間違いなく、人の心を持つ者であった!!」

「征服王……」

ライダーの言葉に思わず眼を見開くセイバー。

それは、一見して無茶苦茶で乱暴だけれど、同時に、暖かな肯定に満ちていた。

「しかしのう……貴様は民を救いはしたが導くことをしなかった、飾り物にも劣る無欲な王だったわけだ。それが一人戦いに死すとはのう」

「オイ、その言い方はどうなんだよライダー。作物はまともに育たない、蛮族が立て続けに襲う、挙句の果てにはアルティメット・ワン。そんな状況で自分の欲を満たすより、まず仕事をこなすのが王って生き物なんじゃないのかよ」

「それは違うぞ坊主。王とは誰よりも激怒し、誰よりも悲嘆する、誰よりも強欲な、清濁併せ呑みヒトの限界を極める存在。故にこそ臣下は王に魅せられ、従うのだ」

「だから騎士王は王にふさわしくなかった……つて？ そりゃ確かにお前から見たらそうだろうよ、お前から見たら……な」

意外なことに、ライダーに反論しだしたのはマスターの彼だった。

「枷があつたとしても、騎士王は無色透明の根源接続者だ。それこそ生まれる前から、死ぬ瞬間まで。要はさ、産まれたての赤ん坊のままだったんだ。それも生きる気力が微塵もない亡霊みたいな。そんな奴が強欲になるなんて、逆立ちしても無理だと思う」

「では坊主。そんな庇護すべき無垢な存在が、王の座にあつたというのか？」
「……それしか、なかつたんじゃないか？」

少年の答えに思わず、といったように溜息をつくライダー。

その様子にわたしも内心で愕然としていた。

ブリテンはもう、セイバーに縋るしかなかったのだ。

「別に誰かが悪いって話じゃない。上手く言えないけど……その……時間^{トキ}が足りなかつたんだよ。推測だけど、お前が言うように民を導く王になる可能性もあつたはずだ。けど……なれなかつた。そんな余裕はなかつたから。だから、騎士たちや国民が望んでいた「理想の王」を演じるしかなかったんだ。さつきみたいな人間らしい心を手に入れた

のだって、随分後になってからのことなんじゃないか？」

「——そんなふざけた話がまかり通ったのか、この小娘が治めた国では」

その一言を最後に沈黙するライダーに続いて、少年も口を閉ざす。

わたしも、何を発言したらいいのか分からない。

……いいえ。何を発言しても、間違いであるような予感がする。

「民を……導く、王——」

涙を流したまま静寂を保っていたセイバーが、ポツリと蚊の鳴く声で呟いた。

「それでも……私は、理想の王でいたかった。皆の笑顔が見れるなら、生きる希望になれるなら、それで良かった。辛いことなんて何もなかった」

「……人間に憧れる人形、か。時代の民草の希望を一身に背負ったのが、亡霊同然の赤子とはな」

「お前は正しいよ征服王。私が行ったことは外敵を排除して一時の救いを与えたただだ」

でも、と言葉を切り、杯の酒を飲み干すセイバー。

空になった器に月が映ることはない。

セイバーは天を見上げ、かつて故国を滅ぼそうと牙をむいた白い月を見つめている。

「——私が、導きたかったなあ……」

ようやく言葉に落としこめた、騎士王の正直な思い。

その一言にどれだけの意味が込められているのか、わたしには想像もつかない。けれど、寂しそうに夜闇へ視線を向ける彼女は、本当に人間のように見えた。

――

隠蔽箇所解放

根源接続者。

その在り方を危惧した魔法使いによって肉体が聖杯に改造されている。

しかし、数回の臨死体験で若干故障。脳が死を理解し、魔眼に覚醒した。

スキル根源接続者のランクはクラスによって異なります。

セイバーではランクB。

という訳でそもそも王道云々以前の問題だったんだよという話。

この設定は最後まで削除するかどうか悩みましたが採用しました。

あらためて考えると凄まじいことだよなあと考えながら執筆。

聖杯以外にもシキトリアさんは色々縛りを自らに課している設定です。

この先ライダー陣営とは何度か戦闘しますが、

涙を見ちゃったということで「やりづらいなあ」とは思われている。

次回、金びか登場&王の軍勢、の二本立て（予定）

「とにかく、私は聖杯などいらん。欲しければ勝手に争え。私はただ、マスターに従うだけだ。そこに個人の願望は挟まない」

「ううむ……もつたいない。実に惜しい。やはり余の軍門に下ってヒトの歎びをその心に焼き付け、ともに世界を制するのは……」

「本当にしつこいな貴様」

勧誘は止まらなかった。

恐らく、この男にとっては相手が怪物だろうと何だろうと関係がないのだろう。

何かに心を打ち奮わせ、一人のヒトとして全力で突き進む。

これこそが征服王。

同じ時代に生きたニンゲンたちを魅了した人の王。

……とても、眩しい。

「貴様の軍門に下るなど、わざわざ私に従ってくれた騎士たちへの侮辱だろう。そんな真似はしないし、できるはずもない。わからないか」

「何を言うか。貴様と、騎士どもの誉れある英雄譚を制覇してこそ我が王道。辱めなぞせんわ。余はこれでも相手を尊重するからのう」

「それは失礼をした。だが貴様に下りはしない。落第もいいところだが、これでも王として生きてきた。貴様のような侵略者に屈するなど、私の生きた道を否定するどころの話ではない。諦めろ」

そう。結局のところ、そこにつきる。

蛮族、帝国、死徒の侵略に相次いで悩まされてきた我が国。

余りにも広い版図を築き上げたマケドニアの超大国。

この両極端の国家を統べる者が出会えば、こうなるのは当然だろう。

「よいではないか騎士王。ともに最果ての海をめざし地を駆ける、そこに貴様がいるならば、実に心躍る！ 我が軍勢に咲く星の花、想像するだけで美しさのため息が出るわ」

「必死すぎだろう征服王……」

「おうとも。必死にもなる。貴様はまさに戦場にて輝く地上の星。勇士たちを魅了し希望を抱かせる勝利の証。理想の王という枷に縛られているよりかは、余の軍勢にてヒトが何たるかを学ぶほうがよいであろう？」

「……そうかもな。だが断る。貴様の下では意味がない。私自身が王として民を導く、なら話は別だがな。だから諦めろ」

王という概念に固執している——と言われれば、実際にその通りだ。

だが私は王である。選定の剣を抜き、蛮族と帝国を退け、死徒と外惑星の生物を排した。

その過程を無視することはできない。ふさわしくないかもしれないけれど、私は、望

まれる限り理想の王でいたいのだ。

どれほど征服王の誘いが魅力的であろうと、こればかりは譲れない。

「なあ、少しくらいよいではないか」

「いい加減気持ち悪いぞ貴様……！」

さすがにこれは頭が痛い。

いい加減この侵略中をどうしたものか、と内心悩み始めた矢先。

「——我より先に宴を始めるとはいい度胸だな、雑種」

不意に、空気が変わった。

一応は和気藹々としていた宴席が一気に寒々しいものに変化する。それもきつと、この男が持つ威圧感と声色によるからだろう。

アーチャーのサーヴァント。

英雄王ギルガメツシュ。

「おお、遅かったなアーチャー。貴様も余と共に酒を酌み交わし、共に語らおうではないか」

「このように埃積もった貧相な庭に呼びつけて、安酒を我に吞ませるなど、恐れを知らぬ

奴よ」

「無論。貴様のような勇者を恐れて誘わんなど、この征服王の名が廢る」

酷薄な笑みを浮かべるアーチャーに堂々と返答するライダー。

この小さな庭園に、かつてそれぞれの形で自らの国家を統べた王が三人も集っている。

それが、どれほどの価値と意味を持つのかは、死人には分らない。

「——何だこの雑味は。これが現代の酒？　笑わせる。これで我をもてなしたつもりか」

「そういうなアーチャー。ならば、貴様が知る極上の酒とは、余程の美味なのであろうな？」

「当然だ」

アーチャーの背後が黄金色に揺らめき、酒が入っていると申しき杯が取り出される。

それがライダーに手渡され、飲まれた次の瞬間、ライダーの眼が大きく開かれる。

「——うまい！　これはうまいぞ。これほどの美酒は生前にも飲んだことがない。いやあ、参った。どうだセイバー、貴様も飲むか？　まつこと美味であるぞ」
「それは貴様が飲めばいいだろう」

他人が一度は口にしたものは、なるべく摂取しない。

そう言えばライダーは一瞬残念そうな顔をしたものの、すぐ喜色満面で酒をあおった。

かと思うと持ち込んでいた樽から新たな酒を私によこした。

このあたり、実に面倒見がいい。

「アーチャーまで呼びつけていたのか。そこまでして宴を開きたかったのか？」

「無論だとも。華々しき英雄たちがこうも揃っていないながら、語らう機会が全くないなど、寂しかろう？ 余は寂しい。故にこうして宴を開いたのだ」

「……そういうものなのか？ よく分からんな……」

「貴様には分かるまいよ。そやつはヒトの限界を極めし者。始めからヒトならざる貴様とは違う」

「それは分かっている。だから、少し物珍しく感じた」

生前ではどうだっただろうか。

騎士たちの一部が己の誇りや矜持を熱く語っているところを見たことがある。

そうではない者もいた。

前者はガウエイン、後者はアグラヴェインが主な騎士だった。

兄弟でありながら随分と対照的である。

ただ、少なくとも……私が語ることは、ほぼ皆無であったはずだ。

「まあ、それだけだ。私は私。貴様は貴様。それ以上でも以下でもない。そういう考えも、あるのだろう。それはそれでいいんじゃないか」

「何ともつまらぬ娘だ。自らの武勇を比べ、次なる進歩の礎とすることの愉しみを解せぬか」

「比較の意味などあるまい。全ての頂点は我。後に王を名乗る有象無象の雑種どもが続く。そら、何の面白みもなからう?」

「最初の一言のみ同意する。私も、貴様らも、何もかも違い過ぎる。比較以前の問題だ」
 英雄王と私がそう口にする、征服王は何とも興ざめそうな面持ちでため息をついた。

そして、征服王は再び酒を飲み、些か乱暴気味に甲高い音を立てて杯を床に置いた。

「ああもう、空気の読めん奴らめ! よい、では次の問答は即ち、「聖杯」だ!」
 「飽きないな貴様……私はもうほとんど語ることないぞ」

「構わん。好きに感想を言えばよい。——余たちサーヴァントは聖杯を求めて冬木に現界した。故に、この問答で語るの「何ゆえ聖杯を望むのか」に他ならぬ」

あるいは、何故聖杯戦争に身を投じるのか。その目的・真意を語り合う……というこ
とらしい。

これまで散々聖杯は不要と断じてきた私にとっては、この酒宴は少しアウエーに感じ
る。

堂々と太い声が夜の庭園に響き、それに応えるように酷薄な声が響く。

私は無言でその応酬を眺めていた。

「———そも、「争う」という前提から間違っているのだ」

二人の王の声を聞き流しながら、私はこの先の展望を考える。

恐らく、この後アサシンが玉砕覚悟で突っ込んでくるだろう。

その後……未遠川でキャスターの巨大海魔が召喚される。

また次の日にランサーと決着をつける……が、今の状態で勝利できるか怪しい。

アーチボルトに弱点たる婚約者は同伴せず、起源弾で魔術師として終了してもいい。
い。

これでマスターはどう勝利するつもりなのだろうか。

ランサーなら私が殺せば良いだけの話だが、マスターは恐らくそれだけでは済まさないだろう。

……いや、待てよ？

かのロード・エルメロイ、時計塔にて神童とまで謳われる天才魔術師。

その教え子ウェイバー・ベルベツトはいずれ大聖杯を解体し、真の意味で聖杯戦争を終結に導く。

この二人が揃っているのなら、あるいは――

そも、ランサーの宝具ならば、小聖杯を……………

「受肉、だ」

「っ——はあああああああ!!!?」

ライダーのマスターの叫びで思考が現実に戻される。

どのような会話だったか。

確か、征服王の目的は世界征服で、聖杯を求めるのは受肉するため……………だった、はず。

実際に眼前でそのような会話が繰り広げられている。加えて、アーチャーが手ずから殺すという宣言もされた。

「セイバー。貴様にとつて聖杯が不要であることは分かっている。ここで余が聞きたいのは、何故この聖杯をめぐる戦争に参加したか、だ」

「——何故、か」

ライダーから向けられた視線に思わず目を瞬かせた。

……どこまで話せばいいのだろう。

大聖杯にて息を潜ませているこの世^{アンリマユ}全ての悪のことまでべらべらと話していいのだろうか。

傍らのアイリスフィールや恐らく聞き耳を立てているマスターがどう動くかも分からない。

下手に情報を明かして最悪の方向に動き出したらたまったものではない。

どう説明したのか。

あくまで抑止の話は伏せておいて、私個人の話をすればいいだろうか。

「……呼ばれたから、か？」

「何だと？」

怪訝な顔をする面々。

抑止側はさておき、どうあれ、騎士王^私を呼び出したのは紛れもない衛宮切嗣自身の選択であることは確かだ。これはゆるぎない事実である。

「望まれたから、求められたから、それに応える。……すまん、こういう説明しか思いつかん」

「う、む……まあ、未だヒトを知らぬ無垢なる貴様ならば、言葉にするのも難しからうな」
「氣遣いに感謝する、征服王」

「……ふむ。僅かながら私の興味を引いたぞ、雑種。貴様は根底の欲求を自覚していないだけだ」

「どういふことだ、英雄王？」

私ですら気づいていない私自身の欲求——この男が理解するのも分からなくもない。

余りにも広い視野を持つ男、マーリンと同じ千里眼の持ち主。

彼ならば、こうして枷によって縛り付けている私の性質を見抜くのも容易いだろう。

「我が貴様に告げると思ふか？」

「いいや、まったく。まあ、心の片隅にとどめておくさ」

そう言つて、杯の酒を飲んだ。

「——ああ。忘れていたが、そろそろ出て来たらどうだ、アサシン」

飲み終わった私がそういうと、突然空気が殺気立つ。

「いや、すまない。訂正しよう。アサシンが出てくるなど、あつてはならないことだからな」

まあ、私には関係ないが……と、言い終わった後、指先から魔弾を放った。こつそり魔眼を起動して、死点の中心を狙って撃つ。何体かは潰せたらしい。

「な、なんだ!？」

「一応聞くがアーチャー。これは貴様が呼んだのか？」

「言葉に気を付けろよ雑種。……時臣め。どこまでもつまらぬ男よ」

二人の会話のすぐ後に姿を現す複数の影。

アサシン。ハサン・サツバーハ。あるいは、百の貌のハサン。

「……お互い、マスターには苦勞するな？」

「セイバー」

私の発言を嗜めるアイリスフィール。

その後、征服王が杯を掲げてアサシンに宴に入るよう誘うも、返答は短剣の投擲だった。

そして、立ち上がるライダー。

魔力の風が彼を中心に吹き荒れる。庭園の花々が散っていく。

最後の問いが投げかけられた。

私は——

「……わたしは。一人でしか生きられない。孤高でなければならぬ。だって、誰かと一緒にいたら、その人を傷つけてしまうでしょう?」

英雄王の失笑と私の答えを突っぱねたライダー。

次の瞬間、世界は宵闇から青空と灼熱の砂漠に変化していた。

振り返れば、征服王に従った勇者たちが揃っている。

征服王の朗朗とした叫びに呼応する。

間違いなく、彼らはヒトとしてこの世界に生きたのだろう。

う。ヒトであることを喜び、ヒトのままに征服王^{人の王}に従い、広大な世界を走り抜けたのだらう。

……なんて、眩^美しい。

同時に、羨ましくも思った。

——

後はほぼ原作通りなので省略します。

最後のほうちよつと違うけどわざわざ書くほどではないかなと。

AUOはシキトリアさんのこと他の雑種どもとは違う、という認識。

これはこれで愉悦対象であることは事実ですが、それでも何か異なる、みたいな。

征服王も割と高く評価していますが、お節介勧誘が激しい。

無色透明、純粹無垢な亡霊みたいなもんだから仕方ない。

王道問答は難しいですね。

AUO始めとした濃厚なキャラクターたちは私の手では書ききれません。

何を喋らせても「何か違う」となるあたり難易度が高すぎる。

次回は未遠川大海魔決戦です。多分。

アイリスフィールと共に未遠川へ急行した。

すでにいた男を見つめる。

ぎよろりと濁った瞳が私を射抜いた。

「ようこそ。よくぞいらつしやいました聖処女よ。再びお会いできたこと、お慶び申し上げます」

「一応聞いておこうか。キャスター、今宵は何をするつもりだ？」

「ですが、申し訳ありません。ジャンヌ、主賓は……私がもてなすのは貴方ではないのです。されど——ええ。貴方がこうして列席して頂けるのなら、至上の幸福に他なりません」

死と退廃の腐った臭いがはびこっている。

ああ、まどろっこしい。

「面倒きわまりない。これは聖杯戦争。サーヴァントが殺しあう場。要は、貴様を殺せばいいだけの話だ。その首、私に明け渡す覚悟はいいな？」

「おお、おお……！ 未だ呪いに縛られし唯一の貴方。ですがご安心召されよ。確かに主賓は貴方ではないが、貴方もれつきとした客人。この饗宴にて貴方を今度こそ解放いたします！」

そういうや否や、キャスターの足元で触手が蠢きを大きくした。

同時に、膨大な魔力が奴を中心に放出される。

「今、ここに!!! 我らが救世の旗を掲げよう——!!!」

触手がキャスターに絡みつき、背後で巨大な影が持ち上がる。

次の瞬間にはキャスターは吸収され、影に同化していく。

百年戦争における英雄の朗々とした、されど慟哭があふれた声が冬木の夜に木霊する。

「御座より引き摺り降ろす、か……」

最後にキャスターが言い放った言葉を繰り返した。

次の瞬間、轟音と共に何か近く降り立った。

「もう来ていたか、騎士王」

「ライダー」

「ああ、此度は休戦だ。あんなものを放ったままでは殺し合いも果し合いも出来ん。一応、呼びかけて回っておるのだ。ランサーとそのマスターは承諾した。直にここまで来るだろう」

「了承した。こちら共闘に異存はない。マスターは知らないが……さすがに今回は大人しくしているだろう。むしろそうしてほしい」

あるいはどこかでキャスターのマスターを始末するかな、と小さくつぶやいた。

「アインツベルン、策はないのか。キャスターと戦うのは、初めてじゃないんだろ？」
「速攻で倒すに限るわね。あの怪物、今はキャスターの魔力で動いているけど、自給自足を始めたら手におえない」

「そうなる前に止めるべきだ。加えて再生・増殖能力がある。生半な攻撃では無意味だ。一応、私の魔眼と宝剣の真名開放ならば再生を潰せるがそれでも限度がある。アレは大きすぎる」

「なるほど……岸に上がって食事を始める前に倒すと。しかし、当のキャスターは分厚い肉の内部に籠っておる」

「聖剣ならばまるごと潰せる。だが発動前に隙が大きい。それと、確実に当たり、なおかつ周辺被害を抑える十分なスペースが欲しい」

「ううむ……それは最終手段だな。他の手段はないものか……」

困ったように頭髪をかきむしるライダー。

そこに、新たな声が響いた。

「無論、引きずり出すしかあるまい」

現れたのは、麗しい青年槍兵。

よく見ると、そのマスターの姿もある。

「ランサーか」

「奴の宝具さえむき出しにできれば、俺の破魔ゲイの赤薔薇ジャルグで術式の破壊が一撃で可能だ」

「……そういえば、キャスターは貴様の黄槍を喰らっていたな。それでも根性であそこまで行動できるものなのか」

「あの魔術師にしてみれば些細なことにはすぎんのだろう。お前と同じだ」

「心外だ。——それで、ランサー。槍の投擲で、キャスターの宝具は狙えるのか？」
「標的さえ見えているのなら造作もない。的確に狙って見せよう」

得意げに真紅の槍を見せつけるランサー。

「では、私とライダーが先鋒だ。それでいいな？」

「構わんが……余の戦車はともかく、貴様は川をどう攻めるといふのだ？」

「歩く。もしくは飛ぶ」

「それはまた大きく出たものだ。ますます余の軍門に加えたい。どうだ、これが終わつたら……」

「この国には、取らぬ狸の皮算用、という諺があるらしいな？ ……今は海魔から奴を出す」

「応とも。では行くぞ坊主！ 一番やりは——この征服王が頂こう！」

そう言って、稲光を走らせながら、ライダーは戦車を動かし始めた。

少年の叫びが尾を引いている。

私も魔力で武装を編んだ。夜天ツェの羽衣ンは出さない。

「セイバー、武運を」

アイリスフィールの声掛けに無言でうなずき、魔力放出で一気に川まで飛び出す。その勢いのままに、剣を触手に突き刺して抉り斬った。

魔眼を起動。向かってくる巨大な触手に走る青い線を宝剣でなぞった。両断され、ボトリと川面に水しぶきを上げて落ちる。

「再生を防げるのは私だけ……ライダーはどうしても不可能だろうな」

視線を向けると、どれだけ斬ろうとたちどころに修復される触手に苦戦している姿が見えた。

「せめて、「そういう武装」でもあればいいのだが——ん、武装……?」

ふと、手にもつ宝剣を見た。

……私の聖剣がこの巨大海魔に有効なのは、単純に火力でまるごと潰せるからだ。

もしこの場にいるサーヴァント全員が同様の宝具を持っていれば、この事態はすぐに解決していただろう。全員で宝具をぶつければいいのだから。

だが、恐らくは私とアーチャー位しか火力で押し切れるサーヴァントはいない。

そしてアーチャーはこの戦いに真面目に参加するとは思えない。実質、私一人だ。

「ライダー。少しここを任せてもいいか?」

「どうしたというのだ騎士王」

思いついたら即行動。

一気にライダーの元に近付いて声をかけた。

「貴様でもあの無限再生触手を潰せる武装を今から作る。なるべく手早く終わらせるつもりだ」

「なっ———そ、そんなことができたら早く言えよ!!」

「今しがた思いついたところだ。それで、やれるか?」

「然り。騎士王の奇策、愉しみにしておるぞ。さあ行くぞ坊主! 存分に、余の勇姿を見

ておれい! —————A A A A A A A A A A l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a
lie!!」

苦戦が嘘のように、呵呵大笑と共に触手へ臆せず攻撃を加える征服王。
それを見届け、すぐさま岸に戻った。

「セイバー? 一体どうしたの?」

「すこし、な。まあ、すぐ終わらせるさ」

アイリスフィールの問いかけに短く答え、掌を胸の前で横に並べる。そして、眼を閉じ、意識を掌の上に集中させる。

「な——」

驚愕の声が聞こえる。

私は、静かに武装をつくる。

火力重視、ということやはり約束^エされた勝利^カの剣^リをベースにするべきだろうか。しかし、これは魔力の消費が激しい。一回放つてそれつきり、というザマでは意味がない。

連発が可能、という点ではかの竜殺しや関係者が扱う幻想大剣・天魔失墜があげられる。

だが、それもそれで大きな魔力消費は避けられない。戦闘より武装で疲弊など、笑えない。

つまり——高い火力、連発可能、そして魔力消費が控えめ、という三点を備えた武装だ。

このような誰もが喉から手が出るほど欲しがりそうな武装。果たして本当にあるのか……

「——あったな。「アレ」が」

とはいえ、アレもある程度の負担は避けられないと思う。

その辺りは、こちらの作成技術にかかっている、ということだろう。

私の掌の上で漂うだけだった魔力の塊が、明確なカタチを持つ。

なるべく使用者に負担がかからない、それでいて高い性能を誇る一品。恐らくあの男のことだから、外見もそれなりに美しいものがいだろう。

そんなものを作り上げる。

「……こんなところか」

眼を開けば、私の掌には一本の剣が乗っていた。

刀身は向こうが透けるほどに透明な真白。随所に、七色に輝く石が埋め込まれている。

そして、金と銀の装飾が切先から柄頭まで絡みついている。

「セイバー、それは一体……？」

「ライダーのためにつくった。一応、私や貴様らでも使用は可能だ」

試しに使ってみるか、と一言こぼして川に戻った。

小さな影が巨大な海魔と触手に挑んでいる。

「あの剣……サーヴァントの宝具に並ぶ。セイバー……一体何を作ったというのだ」

*
*
*

ランサーの疑問に答える者はいない。
アイリスフィールも、ケイネスも、答えられないからだ。

瞬間。

ツ
!!!!!!!

「っ——な、何?!」

突如、純白の光が海魔にぶつかり、夜空に爆ぜた。

よく見ると、光の端々に七色の燐光が煌めいている。

崩れていく触手。すぐさま再生が始まるが、続けて光が放たれた。

またしても崩れ、そして修復され、光に消されていく。

「再生が、間に合っていない……これなら……!」

「だが、あれは一体……?」

アイリスフィールとランサーの疑問を解消する真実を持つ男が呟いた。

「あれは………宝石剣だ」

「え——!?!」

「宝石剣ゼルレツチ。かのシュバインオーグの系譜に連なる魔術師のみが扱える魔術礼装。なるほど、確か騎士王は直弟子だったか。ならば、作り出し扱うのも当然だ」

「で、でも、あれはライダーのために作ったのでしょうか？　じゃあ、意味がないわ」
「恐らく……宝石剣は「ベース」だ。あれはあくまで似て非なる……されど贋作ならざるモノ。セイバーやライダーはおろか、私でさえ扱える代物だろうね」

ケイネスの言葉に同意するように光が横殴りに海魔へ叩きつけられる。
よく目を凝らすと、その剣はすでに征服王が扱っていた。

「まったく……恐ろしいことをしてくれるな、騎士王」

「悪いなロード・エルメロイ。時計塔の君主ロードとしては頭が痛いだろうが……これでも緊急事態なのでな。そのあたりの気遣いまでは手が回らない」

魔力で飛行しながら征服王が潰し損ねた触手を斬りおとす。時に死点を通じてはたちどころに触手は消滅していった。

「それにしても……嬉しそうだな。そこまで喜ばれるとは予想しなかった」

視線を向けると、満面の笑みで体ごと剣を振り下ろしている征服王。
極太の純白が発せられ、触手をなぎ倒していく。
傍らで悲鳴をもらしながら怯えている少年のことは目に入っていないらしい。

「ん——」

不意に、視線を感じて見上げた。

そこには、黄金色の飛行物体があった。

「あれは……アーチャー？ と、いうことは——」

さらに天を仰ぎみて、雲の向こうを凝視する。

二つの影が、高速でこちらに向かっているのが視認できた。

「どうしたセイバー。何か感じたか？」

「少し用心しろライダー。さすがのこの事態、完全な秘匿はほぼ不可能だ」

「え——じゃ、じゃあまさか……」

「ああ。……早い到着だな、自衛隊！」

一気に高度を上昇させ、自衛隊機を目指す。

それに何を思ったか、ライダーが付随してきた。

「お、おい！ 何をする気だよ！ あの怪物を放つてどこに——」

「あの二機を帰らせる。不可能であっても、パイロットの救命ぐらいする。貴様らは触手を潰していればいい。では、任せたぞ。武運を祈る、征服王」

「な——おい、待ってれば、おい！」

ライダーのマスターの制止を無視して夜空を駆ける二機のF—15戦闘機を目指す。吐息が白んでいる。

「そこまでだ、その二機」

魔術でパイロット——小林と仰木だったか——に呼びかける。

目に見えてうろたえているのが分かるが、今は時間がない。

何としてでもこの二人をこの腐臭にまみれた戦場から遠ざけなくてはならない。

「仰木一等空尉。小林三等空尉。すまないが、撤退してもらおう。もはや、これは貴方たちの手に負える事態を超えている」

『な、——それよりも、アンタは一体——』

「頼む。撤退してくれ。さすがにこれ以上は安全を保障できない」

上司の方は、どうも話を聞いてくれそうだが……。

『こんなところでは、帰れない……！ もう少し高度を下げて、接近してみます！』

『なっ?! 小林！ 待て！ ディアボロ2！』

「——チツ……仰木一等空尉！ 貴方は撤退しろ！」

『だ、だが……！』

「小林三等空尉は、私が何とかする！」

高度を下げ、海魔に近づく戦闘機を追尾する。

毒々しい紫の霧を抜ければ、すでに海魔の触手が待ち構えていた。

『ヒ、ヒギヤアアア……ッ！』

『小林!?!』

「っ——キヤスター……!」

衝突する勢いで小林の操縦する機体へ着地した。

絡みつく触手を魔眼が映す線をなぞって斬り伏せていく。

だが、一際太い触手が機体の動きを止めてしまった。

『こ、小林……! 小林!』

「ああもう、止むを得ん……!」

コックピットのガラスを一気に破壊して、中のパイロットをどうにか引きずり出した。

この一連の作業の間にも、触手は私と小林を捕食しようと向かってくる。

完全に気を失ってしまった小林を抱えて、どうにか戦闘機から離脱した。

振り返れば、先ほどの機体を海魔が捕食している光景だった。

「聞こえているな仰木一等空尉。貴方の部下は生きている。彼はこちらで保護するか
ら、貴方は撤退しろ。今すぐだ。いいな？」

『あ、ああ……しかし、アンタも、あの怪物も、一体何者なんだ……？』

「世の中には、知らなくていい——否。知らないほうがいいことも数多く存在する。そ
れだけだ」

『でも、何と報告すればいいのか……ま、きつとなるようにな——ヒィイツ!』
「どうした!？」

突然悲鳴を上げた仰木に思わず機体を振り返る。

みれば、見慣れた人影が戦闘機に張り付いていた。

「——っ、貴様がランスロット！」

抱えている小林の負担にならないような速度で一気に機体まで近づく。

その勢いのままに落とそうと横から蹴りを打ち込んだが、多少揺らめかせた程度だった。

再び私はコックピットのガラスを割り、中の仰木に呼びかける。

「こちらだ！ 急げ、手遅れになる前に！」

「っ、う……ああ、わかってる……！」

手を伸ばして仰木を引っ張り、両手にしっかりと二名の自衛隊員を抱えた後、すぐに飛び降りる。

視線を向ければ、すでに戦闘機はランスロットの宝具と化していた。

「あのクソツタレ……！」

「分かっておる。貴様も十分、気を付けるのだぞ」

「無論だ。……仰木一等空尉。もう一度飛び降りる。舌を噛まないよう気を付けろ」

「な——ちよ、」

返答を聞かないで再び飛び降りた。

振り返ると、空中戦を繰り返している二つの飛行体を確認することが出来た。

どンドン速度を緩めていき、静かに飛行を始める。

向かってくる触手は回避しながら、時に魔術で潰していった。

「大丈夫か仰木一等空尉。理性はあるか。精神は潰れていないか。意識を飛ばしてもいいぞ。全部夢みたいなものだからな」

「……飛ばせるなら飛ばしてえよ……」

「そういうと思った」

どうにか海魔から距離をとり、アイリスファイルたちが待機している河川敷に降り立った。

「まったく……職務に真面目なのはいいことだが、こういう状況だと考え物だな」

「俺だってもう帰ってえよ……何なんだよもう……」

「いいから寝てしまえ」

私がそういうと、やはり色々と限界だったのか、気絶したように眠り始めた。

思わずため息をつく。

「神秘の秘匿……とはいうものの、自衛隊機が二つも潰されている時点ではほぼ不可能に

等しいな。余程の苦しい言い訳でも作らないとどうにもならんぞ。諦めも肝心やもしれんぞ、ロード？」

「言いたいことは理解できるが、それでも秘匿は魔術師^{我々}の義務だ。确实に行う」

そう言って、横たわる二人に近付くアーチボルト。

暗示か何かでもかけるのだろう。

実際のところ、彼等の心情としては、忘れてしまいたいぐらいだろう。

「さて、どうしたものか」

振り返り、海魔を見つめる。

上空で争う王と騎士。七色の燐光を纏う純白の光を放つ王。

戦いは、終わらない。

――

小林&仰木救済。

さすがにこの二人は……うん……助けたいよね。

宝石剣（偽）

もちろん第二魔法。一応、誰でも扱える。

出力の細かい調節が可能。

魔力消費はほぼゼロだけど、肉体に負担がかかる。

最大火力（聖剣レベル）は三日〜一週間気絶。
色々違い過ぎて贗作の域を逸脱している。

征服王から引き継いだウエイバー君が

10年後とかでこれを巡った騒動に巻き込まれるかもしれない。

敵の戦力を自分が増加させるという行為。

だがシキトリアさんは構わない模様。

次回あたりに聖剣で決着つけると思っています。

触手を斬りおとしながらこの先の行動を思考する。

上空で遊んでいる馬鹿二人と河川敷で待機している連中のことも忘れない。

ライダーと私は、迫ってくる触手を、時に協力して潰していた。

正直なところ、攻めあぐねているが、まだ何とかなっている。

私も魔術で焼いているし、何より征服王は私が作成した宝石剣の贗作を手にしてい
る。

だが、足りない。

攻略の糸口となるあと一步。

……聖剣を使うか？

だが、発動前の際にあの海魔は一気に体積を増やして私を捕食しようとするだろう。宝石剣も同様だ。安心して真名開放の前準備に勤しむことが出来ない。

「こりやどうにもならんぞ、セイバー」

「ああ……必要なのは、時間稼ぎだな」

「？ どういうことだよ？」

「例えばだが、私の聖剣ならアレを丸ごと潰すのもたやすい。だが、発動前に大きな隙がある。そこを突かれて捕食されるわけにはいかない」

「なるほど、故に「時間稼ぎ」が必要である、というわけか。——よし。一度引き上げるぞ。改めて策を考え直す」

ライダーの提言に頷き、二人で河川敷を目指した。
その間にも大量の触手が蠢き伸びてきたが、それもすべてを潰した。

——いいえ、いいえ。いかせませんよジャンヌ。

その声が聞こえた瞬間、凍るほどに冷たい舌で背筋を一気になめられたような心地を味わった。

ひゅ、と私の喉から間拔けな息が漏れるのが耳に入った。

ライダーは振り返って眼を見開き、同乗しているマスターは余りの恐怖に悲鳴を上げていた。

一本の触手が私たちを潰そうと迫ってくる。

ぷし、と先端から毒々しい色の魔力が吹き出し始める。

……間違いない。この色は、森で辛酸をなめた呪詛の魔力だ。

——貴方もまた、私をもてなさなくてはならない客人なのですから。

「先に行けライダー！ あの噴出しているのは吸うなよ！」

「貴様はどうするのだ！」

「無論、撤退だ。もつとも……しんがり殿だがな！」

たった二騎で殿というのも可笑しな話だが、役割としては正しいだろう。とにかくあの呪詛をどうにかしなければならぬ。

「Mag^魔ic Ammu^砲nition, Be^始gin^動ing
 Full^全 fi^弾ri^発ng^射!!!」

轟音を立てて魔力の塊が超高速で触手とぶつかり爆ぜ散る。

しかし、崩壊した触手が一気に黒と赤と紫が毒々しく混じり合った魔力へと解けてしまふ。

「中々やるなキャスター……風王鉄槌^{ストライク・エア}!!!」

突風で吹き飛ばし、呪詛を退け視界を確保し、水面に着地した。

……逃げられるだろうか。

もし河川敷までたどり着いても、あの呪詛まで飛んで来れば元も子もない。

幸いにも奴の狙いは私一人、ここにいれば待機している彼らに危険は降ってこない。

「まったく……仕方あるまい。いいだろう、私が相手だ、キヤスター」

そう呟いて、剣を構え、魔力放出で海魔めがけて跳躍した。

魔眼を起動。

触手に絡みつく鳶のように走っている青い線を丁寧に、そして素早く斬りつけ^{殺し}ていく。

霧散して呪詛の魔力にはならない。

——ジャンヌ。誰よりも気高く、貴き潔白の聖女。

声が聞こえる。

私はその声に応えない。ただひたすら、剣を振るう。

——その姿に希望を抱いた。その声に祝福を感じた。

——在りし日の栄光。あの美しかった日々。

——私は……それを……貴方を……

「? ……何だ?」

触手の速度が落ちている。

あれほど猛烈に向かってきていたというのに、のろのろと動きが遅い。だが、確実に私を囲んでいる。

斬りおとそうと近付けば、確実に私を屠ろうと牙をむくだろう。

「ストライク
風王——」

……嫌な予感は、的中した。

——貴方を……この手で、穢して、捌つて、殺したくてたまらない!!!!!!

次の瞬間、取り囲んでいた触手が一気に魔力へと霧散した。

「——、鉄槌^{エア}ツ!!!」

回転斬りの要領で風によって魔力を吹き飛ばす。

しかし、一度は遠ざかった呪詛はまるで生きているかのようにその形を変え、刃と弾

に変化した。

刃、そして弾の形をした呪詛が一斉に放たれる。

「つ……さすがは軍師……！」

思わず賛辞を呈するほどにこの戦術は完璧だ。

何が問題かというと、この呪詛は「当たらない」のだ。

この弾幕は、私を避けるように張られている。

少しでも動こうものならすぐ横を突っ切る呪詛の餌食となるだろう。

つまり、身動きが取れない。

故に、もし致命的な一撃が飛んできて、対処をすることは非常に困難である。

「ツ——ぐっ……！」

行動不能に陥った私を喰らおうと死角から飛んてくる細い触手。

我が身を穿つ十数センチメートル手前でどうにか魔力壁を作って押しとどめた。

だからこそ、この不意に対応できなかつた。

バシユツ！

「!? つ——う、ゴホツ、カハツ……！」

呪詛が眼前を通り過ぎる瞬間、爆散して目の前に黒と赤と紫の魔力が立ち込める。

アインツベルンでの戦いである程度の耐性が付いたのか、前回ほどひどい症状は無

い。

すでに迫っていた二本目の触手は本当にどうしようもなかった。

「ガフツ?!」

腹に異物感、そして痛みと熱。じわじわと痺れが滲んでいく。

それらを認識した刹那、一本目に背後から貫かれるのが分かった。

次に両腕、そして両脚。

糸で縫うように一本の触手が何度も肢体を貫く。

とどめとばかりに呪詛の弾幕が一気に我が身へと殺到した。

肉体の奥底から焼け焦げるほどの熱が生まれる。

恐らく、まだ残っていた前回の呪詛だろう。

第六感は言わずもがな、五感はほとんど機能していない。

突き立つ触手から煮えたぎる毒の蜜が送られているかのようだ。

口からこぼれる温い鉄の味をした液体は、本当に血液なのだろうか。

「……………いや……………まだだ……………」

力を振り絞り、魔力を一気に放出する。

それだけで絡み貫いていた触手は一気に跡形もなく消滅した。

体中に穴を開けたまま、空中に放り出される。

だが、触手はそれを許さないとばかりに再び私を貫こうと上下から襲い掛かってきた。

マスターの少年はさすがに置いてきたらしい。

「手早く済ませろよランサー。そう長くおられんぞ」

「分かっている。——セイバー、少し衝撃が来るが、耐えてくれ。すまない」

左腕で私を支えているランサーは、よく見れば右手に宝石剣を持っている。
なるほど。ソレで吹き飛ばすと。

ランサーが剣を海魔に向けると、宝石剣が七色の燐光を纏う純白の輝きを纏う。

「Es^解 last^放 frei^斬 Werkzug^撃——！」

すぐ傍まで迫っていた触手が光に呑み込まれた。
黒と赤と紫の魔力も純白に塗り替えられていった。

「Es^解 last^放 frei^一 Eile^斉 Salv^射e^撃——！」

再び放たれる純白の光が触手を薙ぎ切っていく。
 宝石剣を操るランサーの横顔を盗み見るが、やはり霞んだ視界ではよく分からない。
 ただ、何となく、静かに激怒しているようだった。

「ははは……力強いな騎士よ！ 余も負けてられんわ！ 遥ワイア・エクスプラグナティオかなる蹂躪制覇オオオ!!!」
 「Ei接ne, Zwi統ei, Ra解ndVe放rschwi大nde斬n——!!!」

特大の光と、雷光を残して、三人の英雄を乗せた戦車は撤退した。

この先どのような策を講じるにしろ、必要なのは「時間稼ぎ」である。

それには征服王の軍勢召喚固有結界が使えるだろう。

とはいえ、精々が数分の足止め程度。あの巨大生命体を完全に討つなどもつてのほか。

——そこを、我が聖剣によって消し飛ばす。

私たちはそのような策を立てて、真っ先にライダーは駆けて行った。

「セイバー、しつかりして！ 貴方がここで倒れるはずがないでしょう！」

「っ……………」

「クソ、何だよコレ——どうやって治すんだよ……………」

「なるほど。中国系の呪術か……………学問ではない、などと言われているが、まさかサーヴァントに有効だとは。さすがに予想外だ」

河川敷の草地に横たわった私をとりまく三人の魔術師。

ありがたいことに一応は敵対関係にあるライダーとランサーのマスターまで治療に参加している。

それでも手に負えないほどに現在の私は悲惨な状態にあるらしい。

「致し方あるまい……………ランサー。少し来たまえ」

「は……………しかし、俺に治療の術は……………」

「知っている。使うのはその剣だ。あまり好ましい手段ではないがな」
「——ああ、なるほど。確かに、それなら治るだろうな」

平行世界から膨大な魔力を供給する宝石剣。

オリジナル 原典はただ光の斬撃を生み出すのみの補助礼装、しかし私が作成した贋作はそれ以外の用途にも扱える。実質、極小規模の聖杯といっても過言ではない。

要は膨大な魔力によるゴリ押しで治療。これまで見てきた彼の人柄から察するに、確かに好みそうではない。だがそれしかないのだろう、と他人事のように考える。

それなりに回復した視界で渋い顔のアーチボルトを確認する。彼にとっては、頭が痛いどころの話ではないと思う。仕方ない、とため息をついていた。

「先生は、やらないんですね」

「私が土壇場で扱うよりある程度使い慣れたランサーが安全だろう」

「——承知いたしました。このランサー、必ずやセイバーを完治させましょう」

……もう彼らを討つことはできない。

単なる救助ならともかく、瀕死の重傷を治療までされた。なのに何食わぬ顔で剣を向けるなど、出来るのは多分衛宮切嗣だけだ。

いや、もしかしたらまだいるかもしれない。けれど、私にはできない。

「先輩、ありがとう」

「気にするな」

彼等に任せてしまおう。

宝石剣から流れる魔力が少し心地いい。

ふと、上空に視線を移すと、二機の飛行物体が天空を縦横無尽に駆け巡っているのが見えた。

「……まったく、あのバカが」

「セイバー?」

「いや、なんでもない」

ランスロットの行動に思わず悪態をついたものの、アーチャーを攻撃する指示は、恐らく間桐雁夜によるものだろう。

一概に彼が悪い、という訳ではないが、それでも複雑な感情を味わってしまう。

……キャメロットにおける誉れ高き湖の騎士としての彼しか見たことがないからだろうか。

それにしても英雄王は本気で何しにきたのだろうか。

急降下する漆黒の機体を眺める。

海魔にぶつかりそうになった次の瞬間、征服王の固有結界に取り込まれて巨影が消えた。

ランスロットの操る飛行機はそのまま地上近くで方向転換し、私たちの前を通り過ぎて行った。

「――、ぐっ……」

「うわあっ！」

「きゃ……………」

強烈な突風が正面からぶつかってくる。

…………自分の表情が基本的に、というより、ほとんど変わらない自覚はあるものの、今
回ばかりは引き攣っている自信があつた。

英雄王といい、この男といい、やる気がないのなら帰ってほしい。

「…………先輩、一つ頼みがある」

「どうした？」

「ランスロット。奴がもし目に余るようなら、宝具化をその赤い槍で解除して欲しい」
「貴様の騎士ではなかったのか？」

「この状況で過去の因縁を持ち出すほど暇ではない。遠慮はいらないからな」

一瞬、小さな爆炎が視界に映る。

数十秒後、また小さい焰が落ちていくのが見えた。
間桐雁夜と遠坂時臣だろうか。

「終わったぞセイバー」

「ん——感謝する。この恩はいずれまた……」

「律儀だな」

さすがに倉庫街でランサーの黄薔薇につけられた傷は治っていないが、それでも十分だ。

地を駆け、天を飛び、剣術に魔術を手繰り、聖剣を発動することに問題はない。

次の瞬間、アイリスフィールの服から電子音が鳴り響いた。

「……あ、えっと、どうしたらいいのかしら……」
「つたく……魔術師殺しだろ？　ちよつと貸せよ」

アイリスファイルから通信機を渡された少年は、そのままマスターとの会話をし始める。

……内容は、「ライダーの固有結界を解除した際、中身を狙った場所に落とせるか」かどうか、だ。

少年の答えは「主導権はライダーに在るため、ある程度、百メートルの範囲で可能」だった。

「——まあ、マスターのことだから、信号弾の一つや二つ、持っていてもおかしくはないか」

戦場を渡り歩いた歴戦の傭兵。

それが我がマスター、衛宮切嗣。

「策はなったのかね？」

「……そう、ですね。セイバーのマスターが示した信号に合わせて、固有結界を解除して」

「そこを我が聖剣でもって叩き潰す。これならいけるだろう」

アーチボルトの問いに少年が答え、そして私が続ける。

ということは、マスターが乗っていた船は緩衝剤代わりだったか。

「では、行くか」

宝剣をしまい、聖剣を呼び出し、纏わせていた風の鞘を全て取り払う。

現れるのは、黄金の輝きを剣の形にした至高の聖剣。
三人のマスターと一人のサーヴァントが、其々感嘆に息をのんでいた。

次の瞬間、上空から高速で移動する気配を感じた。

思考を戦闘へ瞬時に切り替え、一気に川へと走り抜ける。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAARRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR
rr
!!!!!!!」

ランスロットの咆哮が尾を引いている。

同時に、戦闘機の装備が火を噴き始めた。

その後を黄金の機体が追いかけるも、背後には目もくれないヤツの攻撃に晒されている。

恐らく爆弾の類だろう。

アーチャーはそのまま放置して、私に攻撃を仕掛けているランスロット。

……潰すか？

いや、聖剣の発動が控えているこの状況で、多大な魔力消費は控えたい。

ならやはり、先ほど頼んだランサーに任せるしかないだろう。

猛烈な弾幕が途切れた一瞬、河川敷へ振り返り、ランサーを見据えながらランスロットを指差す。

それだけで意味は伝わったらしい。

数秒後には戦闘機が崩壊し、二つの人影が落ちていくのが確認できた。

だが、人影の一つは物々しい銃火器を携えていた。

「つ——本当に空気が読めないな貴様は！」

理性なき男に私の悪態は届かない。

再び弾幕を張ろうとガトリングの銃口が私に向けられる。

だが、突然、無数の武器がランスロットめがけて飛んできた。

刃が次々にランスロットを切りつけ、銃火器を二つに分け、爆発にランスロットは飲まれた。

「……英雄王」

冬木大橋に立つ黄金の鎧を確認できた。

……さすがにまだ死んではないだろう。恐らく、次に会う時こそ決着の時だ。

マスターの信号弾が上がった。

数秒後には、その真下めがけて上空から巨大な影が落ちてきた。

戦車が宙を駆けているのが見える。

幾つもの視線を感じる。

聖杯戦争の参加者だけではない。野次馬達の視線も集めていると感じた。

「舞台は整った。願望を諦める覚悟はいいな、ジル・ド・レエ」

天へ聖剣の切先を向ける。

星の煌めきを持った粒子が草から、水から、溢れて剣へと集っていく。

「ああ、それと——私は聖女ではなく王だ。今度こそ、間違えるなよ」

刀身から光があふれる。

水面を踏みしめ、息を吐き、柄を握りしめる。

「約束エされた勝利スの剣カ

アアアアアアアアアア
!!!!

極大の光柱が天と水面を貫いている。

幾億もの星々を束ねたような余りにも眩しいその輝きに、ライダーは思わずため息をついた。

その悲しいほどの美しさと、いつそ痛ましく思えるほどの尊さ。そして何より、亡霊のような赤子と称された騎士王の人生そのものに。

だが、アーチャーは最高の娯楽を見つけたかのように喜悦の笑みを浮かべていた。

見ているこちらが苦しく感じるほどの在り方に、愛しいと口にした。

恐らく生前の散り際に流しただろう涙は、どれだけ甘美な味を含んでいたのだろうか、と。

この冬木に集った三人の王。

彼らの信念が、重なることは決してない。

お待たせしました。

前半のキャスター戦は暗殺教室の夏休み編を参考にしました。

あの作戦、個人的に大好きなんです。

多分どつかでまた使うかもしれませんね。

またしても宝石剣。

光の斬撃オンリーな原典に対して基本なんにでも使えるシキトリアさん製。

ただし魔力量は低い。HF√終盤の投影品が10000なら人によって3000〜8000ぐらい。

ランサー陣営生存確定。

散々悩みましたがこの方針でいくことにしました。

まあ正確にはケイネス先生が、ですが。

ランサーはサーヴァントらしく聖杯戦争のみの活動とします。

まだあと一つ悩んでありますが、とにかく続けたいと思います。

11

如何にしてマスターの手からランサーとアーチボルトを逃れさせるか。

窮地を救った彼らに報いるには、我がマスターの策謀を阻止すべきだと思う。

幸いにも、キャスターを討伐した現在における次の標的は間桐雁夜とバーサーカーである。

— 当分、マスターが彼らを狙うことはないとしても、早いうちに彼らの安全を確保しておきたい。

加えて、二十年後の大聖杯解体をより迅速に行う強力な人材にもなるだろう。

ウェイバー・ベルベット共々冬木の聖杯戦争を終結に導いてほしい。

……聖杯の汚染を伝えるか？

この戦いが異常をきたしていることを示すにはどうすればいいだろうか。
大聖杯そのものを見れば、疑う余地もないのだが。

「ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリは不在。ランサーは二槍を保持。どうしたものか」

そういえば、言峰璃正が殺されることはないのか。

この先何らかのアクシデントで監督役が死ぬこともあり得るが、少なくともアーチボルトが殺すことはないだろう。

まだ明けやらぬ早朝。

晩秋の冷えた空気が鼻腔を通り、脳と心を静かに研ぎ澄ませていくのが実に爽快感溢れる。

ランサーたちの仮拠点、廃工場の屋根に立つ。

間桐雁夜とランスロットを探すついでに交渉が出来ないものかと単独で来てみたはいいものの。

「……不在、か？」

結界はあるものの、人の気配はしない。

彼らは彼らで戦っているのだろう、と推測を立て、静かに立ち去ろうと踵を返して地に降り立つ。

「——まさか、お前がここに来るとは」

「！ランサー」

真つ先に視界に入ったのは見慣れた麗しの青年槍兵だった。

物陰に隠れるようにしてアーチボルトの姿があるのも確認できる。

「それで、何のようだ？ まさか世間話をしに来たわけではあるまい？ キャスターを屠る際にあの特技を繰り出したのだ。宝石剣を作り出しもした。呪詛に苦しみました。多大な消耗があってもおかしくなからう？ それでもここで剣を交えるとう？」

「そうだな。実際、世間話というのも当たらずも遠からず、といったところだ」

怪訝そうに眉を顰めるランサー。

「まずは感謝を。フィオナ騎士団の麗しき騎士、デイルムツド・オディナ。私は貴方に命を救われた。それ以外にも、貴方の存在があったからこそ助かったことが幾度となくあ

る。……本当に、ありがとうございます」

「……本当に律儀な後輩だ。用件はそれだけか？」

「いいや。——私はこの恩を忘れない。故に、この聖杯戦争の間、貴方たちの命は、何があっても私が守ると誓おう」

まず、これは譲れない。

「なるほど。自分は命を救われた、だから相手の命を守る。これだけならば等価交換としては成り立っているようだな」

「……俺は納得いかない。戦場において忠義を果たす、これこそが我が望み。それを邪魔するようにも聞こえるが？ 加えて、決着をつける約束もあつただろう？」

「それでも、だ。自分の命を救った相手に素知らぬ顔で剣を向ける非常識人は、私のマスターだけで十分だ。ある意味、マスターへの裏切りでもあるが、構うものか」

「だが、私をその範疇に入れる意図が不明だ。あくまで貴様の命を救ったのはランサーであり、決して私ではない。何故私も入るのだ？」

アーチボルトにはそう映るのか。

彼にも恩があるのだが、彼がそう考えるのなら、こちらも理由を作ればいい。

「少し話が長くなるが……構わないか？」

「私の命を保障する理由ならば、いくらでも話せばよい」

「ありがたい。——話は、今から六十年前の第三次聖杯戦争にまでさかのぼる」

多くの情報を伝えた。

アインツベルンがルール違反を犯してアヴェンジャー「この世全ての悪」を召喚した
こと。

聖杯に収められた結果、聖杯が悪性情報に汚染されたこと。

無色の願望機は人類を駆逐する装置となったこと。

私が召喚されたのは「この世全ての悪」が顕現するのを阻止したい抑止力の導きであること。

当のアインツベルンは第三魔法の再現さえすれば構わないスタンスであること。

「証拠は、あるのかね？」

「深山町の柳洞寺。その地下に大聖杯が敷設されている。この街の魔術的観点における心臓部だな。あと……間桐家の当主、間桐臓硯も知っているはずだ」

「貴様が私に託すのは何だ？」

「大聖杯の解体、及び聖杯戦争の完全な終結。無論、一朝一夕に終わるようなことではな
い」

それまでにもう一度聖杯戦争が発生するだろう、と付け加えた。

アーチボルトは視線を地面に向けて口元を引き締めながら沈黙している。

「理由としてはこんなところだ。もし承諾しなくても、私が勝手に貴方を守る。それだけだ」

「私が単独で聖杯を解体できるとでも？」

「……ウェイバー・ベルベット。それと、遠坂時臣の娘。この二人は確実に使える」

「後者がどのような人物か知らないが……凡庸、かつ若輩である彼が私の役に立つと？」

「彼の鑑識眼と思考は紛れもない宝石だ。魔術の才はなくとも、魔術師を育てる才は間違ひなく随一といえる。時計塔の勢力図を書き換えることすら可能だろう。……そも、

あの征服王が目にかけている時点で、その辺りは愚問ではないか？」

もつとも、あの構いたがりのことだから、才能の有無は関係ないのかもしれない。

風が沈黙に吹きぬける。

徐々に空が白み始めていた。

「今回の聖杯戦争で現れる小聖杯はどうするのだ？」

「私が破壊する。切嗣が令呪で止めようと、確実に」

「……そうか。では、ランサー。この聖杯戦争最後の命だ。セイバーと共に、小聖杯を破壊せよ」

「！ マスター、それは……」

「セイバー。このケイネス・エルメロイ・アーチボルト、わが命の保障と引き換えに貴殿より託された使命、これを遂行してみせることを誓おう」

真つ直ぐな眼差しでこちらを見据えるアーチボルト。

「——ありがとう」

「何、等価交換は魔術の基本だ。衛宮切嗣に見つからないうちに帰っておきたまえ」
「一応ランロットを探していたところだ。それなりに冬木を回ってから帰るさ」

それでは、と廃工場から立ち去った。

——彼らのことだから、ある程度の危害はどうにでもできると思う。少なくとも、切嗣の攻撃対象にならなければいいが。

「なるほど、これほどまで」

セイバーが示した大聖杯の在り処。

試しに二人で訪れてみたが、騎士王の説明は真実であった。

「これは生半な手腕ではどうにもならん……解体までにもう一度聖杯戦争が起こるとい
う見立ては間違いないだろう」

「いつになるでしょうか？」

「さて……聖杯を破壊しても、魔力が満ちたまままだというのなら、十年といたところ
か」

この世全ての悪を満たした願望機。

現れた瞬間、どうなることか。

「交わした以上、約定は果たす。……確認はできた。戻るぞ、ランサー」

「御意」

遠坂からの同盟の申し立て。

ランサー、ライダー、そしてバーサーカーを相手取るにあたって与しやすいと考えたのだろう。

アイリスフィールは舐められていると言っていたが、その通りだと思う。

どうにか生きながらえているとはいえ、先のキャスター討伐で私は多大な消耗をしたのだから。

冬木教会。

出入り口に久宇。通路に私とアイリスフィール。

正面には遠坂、言峰。壁にもたれているアーチャー。

……言峰とアーチャーが密約を交わしたのはいつだったか。
遠坂の「うっかり」も真面目に考えてみれば全く笑えない。

御三家ではなく、外様の魔術師に聖杯が渡ることを危惧している遠坂。それ故に同盟を結ぶことを持ちかけたようだ。

しかしアイリスフィールは強気な態度で突っぱねた。ただ、倒す順番をつけることに異論はないらしい。

——遠坂を敵とするのは他のすべてのマスターを倒した後。言わば条件付き休戦協定。

アイリスフィールが要求したのは二つ。

ライダーとそのマスターの情報開示。言峰綺礼の聖杯戦争から排除。

後者の理由に、アインツベルンとの遺恨を上げた。

彼を擁護するなら信用することはできない、と。

……まあ、こっそり手を組んでいるなど、確かに信用できないだろう。内心で自分のことを棚に上げてそんなことを考えた。

それにしても……この男、さすがに節穴過ぎるのではないだろうか。

全くの赤の他人であるにも関わらず、無意味に不安と呆れを覚えてしまうのは何故だろうか。

思わずため息をついた。

弟子と使い魔が裏で手を組み、自分を葬ろうとしていることに感づかない遠坂時臣。

それはそれとして盟約。

最後に相争うのは私とアーチャー。

……生存を約束したランサーをどう誤魔化せばいいだろうか。

征服王は英雄王が屠るだろう。

ランスロットは、上手く処理できればいいのだが、やはり間桐桜の魔力供給がネックだ。

「焼くか、間桐家」

これが一番、手っ取り早い。

どうあれ、あの五百年熟成された妖怪は早いうちに潰しておいても問題ないと思う。

「陰鬱だな……魔術師の家はこういうものか？」

一度拠点に戻った後、切嗣と改めて話し合った。

バーサーカーを潰すには、彼を現界させる要因を断つべきだろう、と。

間桐桜は魔力を供給するラインを断ち切れば殺す必要はなくなる。

間桐雁夜は、まあ放っておけばいいだろう。

明け方には遠坂時臣も背後からアゾット剣で刺されている頃合いだと思う。

腰元の宝剣に手をかけ、魔眼を起動する。

結界に絡みつく様に縦横無尽に張り巡らされた死線めがけて居合切りの要領で剣戟を叩き込んだ。

それだけでピシリと罅が入った結界はたちどころに碎け消えた。

「さて、いくか」

無防備になった間桐の敷地内に侵入する。

魔力放出で一気に玄関の扉まで跳躍し、その勢いそのまま蹴破った。

「では、存分に破壊させてもらおう」

そう呟いて、魔術の炎で玄関一帯を燃やす。

この家における最も重要な施設は地下の蟲に満ちた蔵。欠片一つ残さず、まるごと燃やし尽くせば間桐はほぼ再起不能に陥るはずだ。

……間桐の人間は大体揃っているらしい。

ならとつと燃やして殺虫したのち、魔力供給ラインを断ち切っておくでしょう。

室内を駆け巡り、炎を撒き散らしながら探索する。

「地下、か……なら普通に蹴り抜けるか」

その場で跳躍し、脚に魔力を集めて床に大穴をあけて一気に降下する。

仄暗く、生臭い空間に蠢くおびただしい蟲どもに掌を向ける。

「Flame, blade rain!」

小さくも燃え滾る炎の剣が降り注ぎ、蟲に着弾した瞬間に爆発して周辺を一斉に焼い

ていく。

ひらりと身をひるがえして軽やかに着地。振り向くと、二人の姿が視界におさまった。

「バーサーカーのマスター、間桐雁夜だな？ それと……間桐家当主、間桐臓硯——否。

マキリ・ゾオルゲンと呼ぶべきか？」

「な——お前は、セイバー……?!? 何故、ここに?!」

「何故だと？ 敵の本拠がガラ空きならば、そこを叩くのは戦争の基本だろう。何せ、当のバーサーカーが見当たらないんでな」

ならこうするしかあるまい？ と、剣を向ける。

あからさまに怯えの表情を見せる間桐雁夜と苦々しい表情の間桐臓硯。

「さて、質問だ。間桐桜はどこにいる？」

「っ、桜ちゃんに何をやる気だ!？」

「貴様たちの態度による。ああ……無論、こちらも情報を開示する。遠坂時臣はそろそろ死ぬぞ」

「は? と、きおみが……?」

「何でも裏切られるらしい。もつとも、だからと言って、何かが変わるわけでもないがな。間桐桜は永遠に間桐桜のままだ。彼女を間桐から出すことが望みらしいが……徒労だったな、間桐雁夜」

「それで? セイバーよ。桜をどうするつもりじゃ?」

「回答しないなら、こちらで探すまでだ」

知覚魔術を屋敷内全体に広げる。

すぐに見つかった。どうも地上の屋敷にある一室にいるらしい。ならばここに用はない。

跳躍で上に戻り、最高速度で部屋に辿り着く。扉は斬り破った。

少女を視認。

すぐさま、魔眼を起動する。

「直死——」

少女の肉体に青い死線と死点。

……違う。これではない。

もつと、もつと目を凝らして、よく見て——

脳が過熱するのを無視する。

一本の、赤黒い線が彼女の肉体に繋がっているのが見えた。

それを確認した刹那、宝剣を振るった。

宝具になった何かの棒切れをこちらに向けて振りかぶるランスロット。
剣で捌き、から空きになった脇を突くが防がれる。
部屋から追い出すように腹を蹴り飛ばした。

「A……………thur……………！」

「ああ、私だ。何か言いたいことでもあるのか？」

狭い廊下で剣戟は非常にやりづらい。

それでもランスロットは一周まわって笑えるほどの技量でこちらを攻めてくる。

「それと……いい加減、顔を見せて欲しいところなんだがな！」

強く斬りつけて怯んだその瞬間、兜を蹴り上げて弾き飛ばす。

ガン、と鈍い音を立てて転がるのが耳に入る。

それでも視線は正面に立つ長い付き合いだった騎士に向けていた。

「A A A r r r ……！」

「ハッ——随分と印象が変わったな。見違えたぞランスロット」

犬歯をむき出しにして唸り、あの憂いを帯びた瞳は狂気に取りつかれている。

「では続きだ。まだ夜は長いぞ？」

この後、散々なぐり合った後、バーサーカーの霊体化を合図に戦闘を終えた。間桐臓硯は私を逃すつもりはないようだが、適当に屋敷と蔵を火にかけて逃げた。

今日中に、彼と決着をつける。

多分原作より一日はやく終わりそう。

というわけで今回のハイライトはランサー陣営との密約ですね。

あと間桐家大炎上。十年後にどこまで持ち直しているやら。

第三次までは反英雄は召喚不可能、汚染されたために四次五次で召喚可能になった。

このことを遠坂氏は知っているのでしょうか。……知らないだろうなあ。

あと三話以内に終わりますかね。

ちよつとした蛇足も書きたいのですが。

12

マスターから遠坂時臣の死亡の連絡が入った。

加えて、言峰璃正も死んだらしい。十中八九、息子の仕業だろう。

自らの在り方に目覚めた彼のことだから、そういう結末になってもおかしくない。

……まあ、私には関係のない話だが。

夕日が冬木の街並みを照らしている。

この地に降り立ってすぐに、アイリスフィール共々、黄昏空を眺めたことが遠い過去のように見える。

まだ二週間にも満たないというのに、死闘に身を投じるうち、こうも朧気な記憶となってしまうた。

「――、来るか」

魔力の流れを感じる。

マスターの声が脳裏に響く。

瞬きの刹那、私は土蔵の入り口に立っていた。

「せい、ばー」

「無事か久宇」

「らいだーが、まだむ、を……」

「分かっている。今から追跡する。マスターもすぐに来るだろうからそれまで耐えろよ」

鮮血に塗れた久宇に治癒の魔術を施し、すぐに踵を返した。

武装を纏い、飛行魔術でライダーに偽装したランスロットを確認する。

魔力放出で跳躍し、猛スピードで飛行しながら彼を追跡。

「A r r r r ……i！」

「仮にも征服王に扮するならば、もつと速くならんのか」

脚に魔力を込めて蹴り飛ばす。

同時に抱えられたアイリスフィールを引きはがし、空を突っ切っていくランスロットを追う。

すでに偽装は解けていた。する必要もないと判断したらしい。兜はなかった。血走った昏い眼でこちらを睨み付けている。

剣戟と打撃に魔力とこめて吹き飛ばしながら宙を移動する。

丁度、未遠川の河川敷に差し掛かったあたりで、脳天から踵を落として地に墜とした。私も地に降り、少し離れた場所へアイリスフィールを寝かせ、防御結界を張る。

そうして、改めて騎士に向き直った。

のせいかな。

私の記憶にある気高き湖の騎士は一体どこにいったのだろうか。

「AAAAAAAAA………:rrrrrrrrrrrrrrr」

「どうした？ そんなものなのか？ なあ我が友、栄えある湖の騎士よ」

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

!!!!!!

る。
魔力供給のラインを断つたためか、立ち振る舞いにやや精彩を欠いているように見える。

それでも相変わらずふざけた技量であることは間違いないのだが、分かりやすく動きが悪い。

これなら、いける。

「直死——」

脳が過熱し、世界が不安定に青く線が引かれていく。もはや私の視界には彼と彼の死線しか映っていない。それ以外には何も無い。

死線をめがけて宝剣の刃を滑り込ませようとするが、奴の武器に阻まれ上手くいかない。

フェイントもかけながら死線を斬ろうと剣を繰り出すも、たちどころに防がれる。

「まったく……狂おうと、魔力が不足だろうと、変わらぬ技巧。感服したぞ」

いつの間にか空は蒼い闇が下りてきていた。

恐らく、星の一つ二つも出ている頃合いだろう。

「そなたたちには未来の民を導いてほしかった。浅からぬ因縁はあれど、それでも心新たに進んでほしかった。——そこに、私のような怪物は不要だ。だからこそ、最後に溜まった要らない事物を私の死と共に洗い流した」

「それでも、私は……貴方と共に戦い抜いて、騎士の本懐を果たしたかった……！」
「ならん。そなたのような類まれな才持つ騎士を、どうして無駄に消費できようか」

ままならない、と他人事のように思う。

置いて行かれる重みがどれだけのものか、私には決してわからないのだろう。

ほぼ瓦解寸前だった円卓が急速にまとまったのは、間違いなく朱い月の襲撃だろう。

互いに相争う存在を纏めるには、共通の敵を作るという手段がある。

加えて、ブリテンの滅亡と私の死によって、関係性をリセットして新たな可能性を示した。

……それが最善と信じてはいるが、納得していない騎士もいただろう。例えば、彼の様

「本当に、そなたには感謝している。……貴方たちのおかげで、私は前を向くことが出来た。——うん。ありがとう、ランスロット」

「——王に感謝されながら逝くなど、まるで私が忠義の騎士であつたかのようにではありませんか」

「何を言う。私に仕え、ギネヴィアを支え、後の国を導いた貴方が不忠であるとは、冗談はその飛び抜けた技巧だけにしておけ。気高くも心優しい、騎士ランスロットよ」

つらそうに顔を歪めていたものの、最後には憑き物が落ちたかのような安らかな面持ちでランスロットは消滅した。

後に残つたのは私と横たわつたままのアイリスフィールだけである。

いつそ嫌になるくらい、心に清々しい涼風が吹いている。

こんなにも爽やかで快い気分だったのは生前にもない。

……そんなにも私は、無意識に彼らのことを気にかけていたのか。

見上げると、星が輝いていた。

「随分と人間らしい振る舞いをするのだな？」

「雑種」

不意に、尊大な声が耳に入る。

振り返ると、黄金の鎧をまとった傲慢の体現たる王がこちらに視線を向けていた。

「何の用だ英雄王。遠坂時臣死亡を理由に協定の破棄でもしにきたのか？」

「いやなに。狂犬めの死に様を見に来てやったのだが……思いのほかつまらん結末であつた」

「そうか」

「しかし……随分と晴れ晴れとした顔つきよな。そこまであの雑種に貴様の心を寄せていたと？」

「色々と奴も悩んでいたらしい。今回の件に、何らかの意味があれば——いや、英霊には無駄な思考か」

私がそういうと、怪物私が彼を気に掛けるのが愉快だったのか、呵呵大笑する英雄王。

「ハハハハハ、ハハハハハハハハハハ——それは本気で言っているのか？ その手

で望みを果たしながら、未だに己が本質を知らぬと？ 無垢にもほどがあるぞ雑種……

！」

「英雄王……?」

「よい、興が乗った。では我自ら貴様に教授してやる。万金よりも上回る王の言葉、静粛に拝聴せよ」

丁度いい獲物を見つけたと言わんばかりに、愉悦に口角を釣り上げるアーチャー。
真紅の眼差しは私を評定するかのようにジロジロと向けられている。

「そも、ただ貴様のマスターに勝利を捧げるだけなら、他のマスターを始末すればいいだけの話だ」

「ああ……中々上手くいかないものだな」

「だが貴様ならば可能であるはずだ。夜の衣と宝剣、貴様の宝具を駆使すれば不可能ではなかるう?」

「確かにそうだが……」

「加えて、あの狂犬と最初に戦った際、貴様はあろうことか剣も鎧も捨て、生身のぶつか

り合いを選択した」

「あの時はさすがに苛立ちを感じてな」

「それだけではあるまい？ 確実な手段を捨て、自らの身を危険に晒してまで貴様は白兵戦を望んだ。これが何を意味するのか、貴様ならば分か——いや、貴様のことから理解しえぬか？ だが解答はすでに出ている。何せ、たった今、貴様がその手で果たしたのだからな！」

そう言つて、英雄王は沈黙した。

……私が果たした望み？ ランスロットの言葉を聞くことではなく？

本質とは何だ。私は怪物。それ以上でも以下でもない。

——アインツベルンの城で英雄王が語った、私自身が気づいていないことが、あるということか。

私が今、この手で果たした事？

ランスロットと戦いたかった……いや、違う。この胸の清涼感はそこではない。

もっと根底的な、衝動的なモノ。この目が覚めるような快感は、一体いつ生まれたものか。

剣を握りしめ、眼を閉じ、先の戦いを思い起こす。

空を往くランスロットを蹴り落とし、剣戟を繰り広げ、死の線を宝剣で突き――

「剣、で……？」

そうだ。

この爽やかな心地は、ランスロットを剣で穿った瞬間に湧き出たものだ。鏑迫り合いの果てに私が掴んだ決着の瞬間に胸の内から溢れ出たものだ。

「そう、私が……この手で、殺して――」

「ようやく気付いたか」

金属のこすれ合う音。

こちらに歩み寄る英雄王。

「無論、ただ殺すことではない。殺戮も、暗殺も、貴様の望みとは遠く、決して交わることはない。貴様が望むのは一対一の殺し合い、その果てに相手を殺人することにほかならない」

叙事詩に語られるすべてをみた人。

たつた数度の邂逅で、私の欲求を見抜いた慧眼。

「如何なる邪魔もなく、たつた二人だけの世界を作り上げ、ただ命のやりとりのみを行う。いや……邪魔すらも貴様には甘美な味付けに過ぎぬのだろう。それすらも、斬り伏せてしまうのだから」

そうだな。その通りだ。

もし仮に殺し合いを阻むモノが現れようと、すべて殺してしまうのだろう。

「それこそが貴様の欲求、昇華された殺人衝動の在り方だ。そしてそれは果たされた。どうだ？ かつての騎士を殺した気分は」

静かに紡がれる男の声が清流の様に耳に入ってくる。

……私は、言葉を紡げない。

「少し急かせすぎたか。まあよい、在り方を自覚したばかりは、狼狽える者が多いことよ。では、我直々に貴様の望みを自覚させてやったのだ。代償に、その女をもらおうぞ」
「待て何故そうな、——！」

抗議しようとしたが、封じるように宝剣の雨が私に降りかかってくる。

回避と防御の隙にアーチャーが乱雑にアイリスフィールを持ち上げる。

「もとより少し予定が狂ったに過ぎない。我らの雌雄を決するときこそ、聖杯戦争終結の戦いだ」

「待て、そもそも貴様何のために私を——グウツ……!?!」

さらに問いただそうとしても、夥しいほどの武器群がそれを許さないとばかりに降り注ぐ。

「ではな。その時を、楽しみにしているぞ」
「待てアーチャー！ 話はまだ——!」

再び我が身を貫かんと牙をむく刃の雨。それを凌いだときには、二人の影はどこにもなかった。

「ああクソ、何をしているんだ私は……！」

否。

これはある意味好都合ではないか。

一度、ランサーと合流して事情を説明し、小聖杯を破壊する手はずが整えられる。間違いなく、次の朝にはすべてが終わっているだろう。

切嗣にはバーサーカーを倒したこと、アイリスフィールがアーチャーに連れて行かれたことを伝えた。

一度、魔力の大きな揺らぎを感じ取った。十中八九、アーチャーとライダーだろう。

そうして深夜、私は、建設途中の市民会館内を進み、ホールを目指していた。すでに、間桐雁夜と遠坂葵も対面しただろうか。衛宮切嗣と言峰綺礼は間違いなく戦っているはずだ。

歩いているうちに、膨大な魔力の高まりと同時に破壊音が響いた。泥があふれて施設の一部を破壊したのだろう。

重い防音扉を開けて、ホール内へ踏み入る。

宙に浮く聖杯。その下には大穴があいていた。

まだ生き残っているサーヴァントがいるから聖杯の顕現は起きないかもしれないと思っただが、杞憂だったらしい。

「待ちわびたぞ、セイバー」

「……アーチャー」

聖杯の荘厳さにも負けない鎧の燦然とした輝き。

真紅の瞳は細められ、唇は薄く笑みを浮かべている。

「気分はどうだ？ 己の在り方を自覚し、望みを果たし、もはや思い残すことなどあるまい？」

「……何が言いたい」

「そう照れるな。私の言葉はこの世で最も重いとはいえ、それを一々実感しては気も休まらぬ」

「何の話だ？」

「あれには留まらぬ。人が何たるか。世界は如何にして動いているか。我が全て教えよう、無垢なる赤子よ」

……つまり？

「我が妻となれ。貴様に課せられたあらゆる縛りより解き放ち、貴様が人間として生きる導きとなろう」

……いや、数ミリ程度の予想はしていたが、それでもまさか本当に求婚されるとか。

急速に胸中が冷え込んでいくのが分かる。

固辞するのは当然として、この男も結局殺さなくてはならない。

今回は例外があるとはいえ、基本的に生き残ったサーヴァント同士が行うのは決着の戦闘と決まっている。

別にランサーのような密約は結んでいない為、ここでさっさと果たしあうべきである。

である、のだが……。

「どうした、セイバー。あまりの歓喜に息さえできぬか」

「……不思議、だなあ」

ぼつり、と言葉を漏らした。
思わず私は俯いていた。

「二対一の殺し合い、がしたくて聖杯戦争に参加した……うん、確かにあなたの言うとおりだよ。だからあなたと最後に殺し合うんだ、つて。その覚悟でここまで来た。来た、のに……」

どうにか目線を持ち上げる。

「変だ。あなたとなら本当に本気で殺しに行ける。それが分かるのに、全然楽しくない……つまらない……なんでだろ……？ でも、これもサーヴァントのお仕事だから、ちゃんとやらないといけないよね……」

聖剣を構える。

先程の求婚から心は冷え込んだままだ。

それでも、私は聖杯を破壊しなければならぬ。

この男を、殺さなくてはならない。

射出される刃を剣で叩き落とし、その隙にまた飛来する切先を跳躍で回避する。

再び襲い掛かる武器は風の魔術で全て払い落とした。

「もはや貴様に王の枷は不要。これよりは私の導きで、私の言葉で、我と共に人の世を歩もうではないか」

当然の摂理とばかりに断言する英雄王。

「濁世に揉まれ苦痛に苛まれながらその純真さを失わなかった貴様を、愛することが出来るのは天上天下において我一人。我が名はギルガメツシュ。人の万象を統べた人類最古の英雄王。人の苦楽を貴様に教えてやろう」

座席の影に隠れながら死の雨をやり過ごし、止んだ瞬間に聖杯めがけて走り出す。その間にも大量の宝具が私を標的に定め飛来してくる。第六感が訴える危険な攻撃だけ防御回避に努め、その他は全て無視。

「さあ、返答を聞こ」
雷Thunder, よheaven, 天spea往rr!
く
槍
と
化
せ

何かを言おうとしていたが、聞かずに雷の魔術を叩き込んだ。稲光が晴れた後には自動防御と思われる数枚一組の円盤が展開されていた。

「——貴様、王の問いを遮るか」

「別に、そういうのいいから。ぶつちやけ、好みじゃないし」

返答の瞬間に放たれる新たな宝具。

剣で叩き伏せ、魔術で吹き飛ばし、跳躍で回避する。

次の攻撃に備えようとした瞬間、新たな人間の姿を確認した。

「……切嗣」

右手甲を掲げるマスターに、思わず笑みをこぼした。
結局、やることは決まったらしい。

「衛宮切嗣の名において、令呪を以て命ずる——セイバー、宝具で聖杯を……破壊しろ」

瞬間、聖剣に眩い光が満ちはじめる。

「ああ……了承した、マスター!!!」

「貴様——!?! おのれ……雑種の分際で我が婚儀を邪魔立てするか——!!!」

持ち上げた聖剣をどうにか押しとどめ、両足で地を踏みしめる。
振り下ろしそうになるのを耐えながら、その名を叫んだ。

「つ、ランサー！」

「ああ、任せろ！」

舞台の天井からひらりと落ちてくる麗しい青年。

聖杯に赤の長槍と黄の短槍が突き立てられ、次の瞬間には私の宝剣が突き刺さる。
あらかじめ、このために預けておいたものだ。

「貴、様……！」

アーチャーの貌が憤怒に歪んだ瞬間、魔眼を起動し、一気に距離を詰める。
この男を殺すべきだろうか。

彼の靈基肉体に引かれた死線を視ながら不意に思考する。

……否。

マスターが命じたのは異なることであり、私が最初に目的としていたことも異なることだ。

「——じゃあね」

一言だけ残して、跳躍でアーチャーの頭上を通りながら聖杯に聖剣を向ける。
落下の勢いでそのまま突き立てた。

「ッ……ぐ——」

「第三の令呪を以て——」

「まだまだ切嗣！ その令呪は次に使え！ 聖杯の破壊はこれで終わらない！」

一点集束。ランスロットがかつて無毀アロンダイトの湖光を扱ったときの様に、光を一点に無理やり集める。

「ツ——アアアアアアアアアアアアアアアアア………!!!!!!」

手元の輝きが一瞬、大きく爆ぜた。

耳と目が一時的に麻痺する。

それらが回復したところには、辺りは見ても無残に倒壊していた。

……如何に集束させたとはいえ、さすがに市民会館の崩壊は免れなかった。
天井に空が見えるほどの大穴があいている。

「……セイバー、「次」とはいつたい……?」

「上を見てみる」

ランサーの問いに短く返答し、穴から夜空を見上げる。
すでにそこには、赤黒い「孔」がその威容を示していたのだ。

「な……あれ、は——」

「そんな、バカな……」

「——マスター、命令を。あれは、貴方の指示がなくては壊せない」

「まさか……ここまで、予見して……」

「無論」

聖剣を構え、マスターに視線を送る。

絶望に染まっていた彼の表情は私の声でなんとか持ち直し、再び命じられる。

「第三の令呪を以て命ずる——セイバー。あの「孔」を、破壊しろ……！」

「了承した、マスター」

泥が今にも漏れ出そうだった。

令呪の魔力に、私がついていた残りの魔力、呼吸と共に生み出す魔力を全て注ぎ込む。

……直死の魔眼が、僅かに映した、薄い薄い、微かな一本の線。

そこめがけて、全ての力を振り絞り、解き放つ——
!!!

「約束された勝利の剣」

!!!!!!!

瓦礫に囲まれた小さな空間。

「……先輩。今度こそ、決着をつけないか？」

「ああ、いいぞ」

武器は既に失ったが、拳はいまだ健在。

かくして、とってつけたような蛇足の決闘を以て、第四次聖杯戦争は終結した。

聖杯の孔が齎した呪いは、騎士王の聖剣に防がれ、災害を起こすことは無かった。

その聖剣が僅かにとりこぼした泥の数滴を浴びた神父と王。

拾い上げた言峰綺礼が目覚めるのを待ちながらギルガメッシュは思考する。

通り過ぎたあの蒼い魔眼が、視界に焼き付いて離れない。

紺碧の青空を切り取ったような瞳も、それが映す死の安寧も、最奥に潜む、深淵の輝きも。

何もかもが、心に刻みつけられたように離れなかった。

時間が止まったような心地だった。

「ソレ」以外に何も認識することが出来なかった。

一点の曇りなき、突き抜けるような蒼天に、魅了された。

否、魅了なんて言葉では全く足りない。

四方八方から雷で撃たれ、全身の血液が濃厚な酒で満たされたような心地。視界がくらくらと歪む。思考がまとまらない。

心が騒がしく喚きたてている。

強烈な激情を訴える。悲哀の静謐で満ちる。

王としてあるまじき醜態。

だが。

余りにも……居心地がよかった。

——なんて、美しい。

この瞬間、己にとって最も重要な「何か」を叩き壊されたのかもしれない。あつてはならないことかもしれない。植え付けられた偽の情かもしれない。

それでも、この心を締め付ける疼きは、紛れもない真実であった。

「あの輝きを我に見せぬとは……ほとほと呆れた奴よ。何も知らぬまま愛を囁くなどという愚行、この我に犯させおつて」

胸に手を当てる。

霊体から肉を得たとはいえ、所詮は仮初の肉体。

それでも鼓動は激しくも甘く、胸中の感情を訴えている。

生前はついで、芽生えなかつた想いだつた。

だからこそ、慎重にならざるを得ない。

英雄王ともあろうものが、感情の一つに振り回されるなど、あつてはならないのだから。

この世をあらためて支配するのもいいだろう。

増えすぎた人間を間引くのもいいだろう。

だがそれも、あの美しくも悲しい、蒼の瞳には決して勝らぬ。

「まあよい。時間はまだある」

息を吐き、瞳を閉じる。

「次」が来るにはどれほどの期間があるだろうか。また彼女に出会えるだろうか。それまでの間、存分にこの「愛」に浸らせてもらおうとしよう。

――

この話、本当は二話分だったんですが、早く終わらせることを優先してこういう形に

なりました。

雑な展開にご都合主義等、色々見苦しいですが、これにて第四次編は終了です。御付き合ひ、ありがとうございました。

先輩と後輩のラストバトルの結果は相討ちとだけ。

要はF G O五章ラストの師匠と先生。

最後のシーンに関しては何の言い訳もできないですね。

でもFakeのジェスターさん見て思ったんです。

A U Oがガチ惚れしたら一体どうなってしまうのかなあ、なんて。

という訳で最後の隠蔽箇所解放

*隠しスキル

魅了

根源接続に由来。彼女の瞳にはわずかながら余人を魅了する効果がある。

一般人でも振り払えるほどに弱いもの。ちよつと目を引く程度。

……なのだが、直死の魔眼は超低確率で強い精神ショックと酩酊効果が発生する。

基本成功しかないダイスロールでファンブル引き当てやがったA U O。

多分座のほうにまで影響出てるかもしれない。

まあ一回の現界でルチャに嵌った善神さんもいらつしやることですし。

次回：F G O第六特異点 スーパーシキトリア大戦

……の前に、何本か番外編挟みたいと思います。

もしシキトリアさんが受肉してA U Oに拾われたらというi fとか。

夏休みだから頑張る。

幕間 i f

13

不意に、目が覚めた。

瞬間に肌と喉をを焦がす熱が私に覚醒を促す。

「ん——」

冬木の、大災害？

「ッ!? まさか、受肉——」

その一言を口にした刹那、作為的な眠気が脳に浸透する。

ああこれは、抑止によるものか。

^{ア—サー主}
本体は眠っている。

にもかかわらず、今の私は^{ア—サー主}覚醒し行動している。

その矛盾を正すための機構だったはずだ。

「……自主封印、プログラム——本体へ、処分要請………」

万一のために組んでおいた二つのプログラムを起動する。

そのまま瞳を閉じ、冷たくて優しい、温かくて恐ろしい、暗闇に意識を委ねた。

「よ、よ、よ、つと」

第五次聖杯戦争へと召喚されるほんの瞬きの隙間時間。
分体わたしは要請を受け、受肉してしまった分体の処分に來ていた。

瓦礫に横たわる分体をみやる。

容貌は至極当然、わたしと瓜二つ。

恐らく受肉直後は一糸まとわぬ裸体だっただろうが、現在は純白のドレスを纏っている。

……確かこれ、何処かの世界線でコルキスの魔女から押し付けられたものだったはずだ。

それをベースに、自己封印用の安全機構として作成されたプログラム。

「んじゃ、さっそく処分殺しますか」

剣を振り上げ、自分の筋力と重力に従って斬り——

「待て」

尊大な声と共に、剣が弾かれる。

……防壁？

「えっと——英雄王、どういうつもり？ あと何しに来たの？」

「無論、その眠れる我が姫を奪還しに参ったまで」

「ハア？ ……ねえ言峰。もしかして受肉でバグったりした？」

「さてな。天上に座す名高き英雄王の思考回路なぞ、一介の神父に量れるものか」

それはそうかもしれない。

一体この分体に何の価値があるというのか。

今でこそ封印されているとはいえ、核爆弾より厄介な代物だ。

何にせよ、この男は分体を求めている。

一度本体に問い合わせて——

……………。

「——マジか。けど本体がいいならわたしが一々申し立てる意味はないからなあ」

「決まったか？」

「んー、でも処理自体はやっておかないとね」

パチン、と指を鳴らす。

空中に金の細い鎖が生成され、ジャラジャラと金属音を立てながら分体に巻きついて

いく。

さらに薄布をくるむように巻きつけていく。

腕に脚を封じる態勢になった後は、もう一度指を鳴らす。

「ブックメーカー
却本作り」

太いマイナス螺子が真つ先に胸の中央に刺さった瞬間、金髪は白髪に変化した。それを合図に縛られた手足を繋ぎ止めるように螺子を突き刺していく。

「あと……これと、これと、これと、ついでにこれ——」

どこかの世界線で分体や転生体が作成した魔術礼装。

データそのものは残っているため、量産はいくらでも可能である。

手枷足枷、首輪に目隠し。新しい鎖を錠で結ぶ。

最後に、封印の魔術を何重にも重ねれば、余程のことがない限り大丈夫だろう。

「ほら、持っていきなよ。煮るなり焼くなり好きにすれば？」

「何故ここまで縛める」

「え、だって変なことになって自爆とか困るし。まあそもそも多分ソレ目覚めないけど」

ひらりと手を振って退去の準備を開始する。

体が金色の粒子になりはじめた。

「それは本体から分離して、独立した一個体になった。だから分体わたしから言うことは何も
ない。それじゃ、二度と会うことはないだろうけど……とりあえず、その独立わたし体をよろ
しくね？」

挨拶だけ残して、退去。

それじゃあ、私の鞆の元へと急ごうか。

もう一人の騎士王は去った。

残ったのは先程まで英雄王と相争い、今は目覚めぬ眠りにつく騎士王だけである。

「放任、むしろ過干渉と取るべきか……どちらにせよ、自分自身に対して随分な扱いだ」
「それだけ自己を危険視しているということだろう。欲を言えばあの分体も手中に収めたかったが……仕方あるまい」

「……それで、ギルガメツシュ。お前はその騎士王をどうするつもりだ？」

「あ奴の言う通り、好きにするさ。ああ、我の糧となる魔力の供給源にはするつもりだ」

「そうか。こちらも助かる。しかし、いつそ過剰なほどの封印を、お前はどうかできるのか？」

「無論。これも試練と思えば易いことよ」

大量の封印が施された騎士王を抱き上げるギルガメツシユ。

つい先程まで冷酷に宝物庫から刃の雨を降らせていたとは思えないほどに優しい手つきだった。

眠る騎士王に向ける視線すら、穏やかさにどこか甘さを孕み、別人としか思えない。

「行くぞ、言峰」

その一言を合図に、二人と一人はその場から立ち去った。

教会の奥まった一室。

ギルガメツシユの個人空間。

生前の居城とは比べることすらおこがましいほどに質素で地味な部屋だったが、文句は言わない。

この可憐な少女騎士さえいるならば、たとえばあばら家であろうとそこは天上の宮殿と化す。

蔵から出した豪奢な寝台に寝かさされた白髪少女。

その傍らに腰を落ち着けたギルガメツシユは愉しそうに笑みを浮かべた。

彼にとつて、現在の騎士王はまさに、果ての無い苦難の冒険の末に手に入れた金銀財宝にも等しい……否、それ以上の価値をもっていた。

「ふむ……まずは魔術から解くか」

かつて叡智館の主と影の国の女王から魔術の手ほどきを受けたという騎士王。
この肉体に掛かっている封印の魔術も、現代の魔術師ではお手上げの域に達して
いる。

だが英雄王の宝物庫に不可能はない。

とりだしたのは魔術を解除する効果を持つ銀の鍵。

それを振りかざせば立ちどころに魔術は消えていく。

しかし、完全な解放には程遠い。

一番骨が折れるのは分体が「却本作りブックメーカー」と呼んでいた何本も突き立った螺子だろうと

踏んではいるが、果たして攻略にどれだけ時間がかかるのやら。

「む——いくつか効かぬな。……だが、アレがあつたな」

銀の鍵をしまい、次に取り出したのは青にも緑にも映る宝石があしらわれたペンダ
ント。

チエーンをつまんで、宝石を騎士王の胸から十数センチメートル上で揺らす。すると一つ二つと封印は解けていった。

施された魔術を解くたびにパチンパチンと鮮やかな魔力の光が騎士王から弾けては消える。

そして、また魔術を消した瞬間。

「っ、——!？」

不意に、騎士王の口から血液がこぼれ落ちた。

ギルガメッシュは慌てて宝石を蔵にしまい、改めて騎士王の肉体と魔術を検分する。

「フン……解除と同時に肉体を崩壊させる魔術か。その抗いと拒絶、些細なれど苛立たしくもある……そこまで我を、世界を拒むか根源接続者」

ポツリと吐き捨て、洩れた血を舌でなめ上げた。

ついでとばかりに彼女の僅かに開いた柔い桃色の唇へ舌をねじ込み、腔内をかき乱した。

混ざりあう唾液から魔力を吸い上げる。

「っ、は——甘い、甘いな……しかし何の反応も示さぬとは、つまらん」

口ではそういいながらも、ギルガメツシュの声色も、視線も、いつぞ恐ろしいほどに優しい。

白くまろい頬を撫で、変色しながらも乱れひとつない頭髪を梳く。

「何にせよ、封を解かぬことには貴様を味わうことすらままならぬ。当分はこの縛めを解くのに専念するか。ゆめ我を飽きさせなよ——」

このままでは抱きしめ眠りにつくことすら叶わない、と内心でギルガメツシュは嘆

く。

召喚当時の自分ならば涙が出るほどに笑い転げそうな痴態である。

それでも、己の心を射抜いた少女がこうして眼前に眠るといふ甘美な毒のような時間。

いつそ本当に泣きたくなるほどに、ギルガメッシュの心を満たしていた。

不意に、目が覚めた。

甘く芳醇な果実の香がわたしに覚醒を促す。

「ん——」

……何があった？

本体から独立したとはいえ、目覚めることなく消滅まで眠り続けると思っていたのだが。

しかし現実には、わたしはこうして五感から情報を得て思考を続けている。

あれから、どれだけの年月が経った？

「——だめだ、あたまが回らない」

覚醒したとはいえ、封印の影響か、はたまた分離の影響か。思考は重く、さらなる眠りを求めている。

どうしたものかと寝返りを打った瞬間、初めてその違和感に気付いた。

「あれ……ブックメーカー却本作りが……はずれてる……？」

無論、上半身は未だに細いマイナス螺子が突き立てられ、鎖・布共々手と腕を拘束している。

しかし、脚に刺さっていたはずの螺子は外れ、鎖も布も完全に解かれていた。下半身は完全に自由になっている。立って歩くことすら安易だろう。

否、それだけではない。

いくつか残っているとはいえ、封印の魔術も魔術礼装もほぼ完全に解除されている。

……一体誰が？

「目が覚めたか」

耳に入る男の声。

傲岸不遜を人間にしたような、酷薄な声だ。

振り向くと、金髪赤目の男が笑みを浮かべてこちらを眺めていた。

「あなたが、全部解いたの？」

「うむ。随分と骨が折れたわ。特にその……却本作り、ブックメーカーといつたか？ それに二年も困

らされた」

「ふうん……」

「出来ることなら全て抜きたかったが、まあ優先順位はつけねばと、脚から取り掛かった」

「なんで？」

「脚を動かせぬと、貴様を味わえぬではないか。偶然といえ、焦がれた女が無防備に眠っている。ならばやることなど一つしかあるまい？ 物言わぬ人形なれど、愛らしいものは愛らしい」

無遠慮に寝台へと上り込む……いや、もともとこのベッドは彼の物なのだろう。

横たわるわたしの顔の両隣に手をつき、覆いかぶさる男。

愉しそうに、嬉しそうに笑う男。ぼんやりと、他人事のように眺める私。

「しかし、不遜にも王の寵愛を阻む縛めが施された。ようやく手にした一輪の花が唐突に氷で封じされたのだ。だがこの手からこぼれ落ちたわけではない。やれることはある。故に、今日という日を待ちつづけた」

「あなた……ひまなの？」

「そう恥じらうな、愛い奴め。——幾度となく口づけを交わしたが、やはり欲を重ねるほうがずつと悦ばしいであろう？」

「は……ええ？ 何？ どういうこと？」

「今更それを口にして……いや、貴様は眠っていたな。ならば解らぬのも道理か。ままならぬものよ」

一瞬残念そうに目を伏せたが、すぐに愉悦の笑みを浮かべていた。

「単純なことよ。我と貴様は体を重ねた。男女の関係となったわけだ。つい数日前にな。許せ騎士王、あまりの歡喜に柄にもなく三日にわたって獣のように貪ってしまっ

た。英雄王ともあろう者がこの体たらくとはな……ああ案ずるな、責任をとる甲斐性はある」

「……へえ」

「む。あまり驚かぬな貴様……憤怒か悲哀に喚き散らすぐらいは予想していたのだが。つまらん」

「そんなめんどくさいことしないよ」

武骨な掌が思いのほか優しくわたしの顔を撫でる。

何故だか居心地が良くて、温もりにすり寄せた。

「存外に素直になりよって……それが素か？」

「ちがうけど……」

「ふむ、まあよい。——それで、返答は？」

「……なんの？」

思わず聞き返すと、男は呆れたように首を振った。

「とぼけるな。……今一度問うぞ、騎士王。我が妃となる覚悟はあるか？」

先程までの愉しさを優先した態度が嘘のように、紅い瞳は真剣な眼差しを向けていた。

「……その前に、ひとつ、聞いていい？」

「何だ？」

最初に彼の姿を確認してから、ずっと抱き続けた疑問があった。

「名前、何だっけ？」

誰だこいつ（真顔）

脳裏にジエスターさん描きながら書いていたらとんだキャラ崩壊ですよコイツア。
そして独立体とのテンションの落差がひどい。

←おまけの雑小ネタ←

1 管理人@月の独立体

このネットワークはアルトリア・ペンドラゴンの分体・転生体・独立体の連絡・雑談

用回線です

状況に応じて自身の出自が分かるようなコテハンを付けてください

2 人目の騎士王さん

……なにこれ？

3 人目の騎士王さん

え、ちゃんねる？

4 人目の騎士王さん

全部私なんですがそれは

5 人目の騎士王さん

ヤバイ w w w w w w w w w w w w w w w w

6 人目の騎士王さん

さては転生体だなオメー

7 人目の騎士王さん

これって確か独立体の一人がたまに繋いでる回線だよな？
転生体で騎士王の記憶／Zeroだけど今はあるんだよな

8 人目の騎士王さん

そうそう

確か活動休眠中・・・人間でいう睡眠中に合わせて結ばれるネットだから

9 人目の騎士王さん

ちゃんねるっつーかほぼラインだな

10 人目の騎士王さん

こんなにもたくさんの私が・・・これは抹殺せねば

11 人目の騎士王さん

この殺意マシマシなXさんのことはほおっておいてください

12 人目の騎士王さん
エックス&えっちゃん乙

13 人目の騎士王さん
独立体三人だったよね確か

14 管理人@月の独立体
それが増えたんですよ

15 人目の騎士王さん
えっ？

16 人目の騎士王さん
……………え？

17 人目の騎士王さん

ゑ？

18 人目の騎士王さん

(. . ω . .) エツ？

19 人目の騎士王さん

. どういう経緯で増えたのさ？

20 人目の騎士王さん

3人の時はなんだっけ

21 人目の騎士王さん

X、えっちゃん↓本体の精神の欠片が遊離・定着

管理人↓分体がお月様を乗っ取った影響で変質・分離

22 人目の騎士王さん

サックス

23 人目の騎士王さん
こんかいはどうなの？

24 管理人@月の独立体

第四次直後です

どうもうっかり分体が受肉してしまつたらしく………

25 人目の騎士王さん

あつ（察し）

26 人目の騎士王さん

あちやー………

27 人目の騎士王さん

← アーサー王はアヴァアロンで眠りについている

聖杯戦争に呼ばれる分体は本体の夢

←

分体が受肉する⇨本体は眠っているのにアーサー王覚醒状態

←

圧倒的矛盾

28 人目の騎士王さん

そうそうそんな感じ

だから受肉したら自動的に眠っちゃうんだよね

29 人目の騎士王さん

あれ？

でもたしかその場合、処分用の分体派遣されなかった？

30 人目の騎士王さん

そういえばそうだ

31 管理人@月の独立体

それがですねえ

たまたまその場面に同じく受肉したA U O（と麻婆）がやってきてですね…

32 人目の騎士王さん

うえ

33 人目の騎士王さん

ウエ W W W W W W W W W W W W W W W W

34 人目の騎士王さん

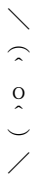
うえええええええええ

!!!!!!

35 人目の騎士王さん

うわあああああああああ
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

36 人目の騎士王さん



37 人目の騎士王さん
拾われちやった系だな！

38 人目の騎士王さん
拾われちやった系ですな！

39 人目の騎士王さん
やっべえ今四次だから注意しないと

40 人目の騎士王さん
五次のワイ、高みの見物

41 人目の騎士王さん
でも五次にもA U Oおるやん

42 人目の騎士王さん

ルーマニアなうだけどA U Oおるで

43 人目の騎士王さん

ヒエツ

44 人目の騎士王さん

アイツ聖杯戦争参加しすぎじゃね？

45 人目の騎士王さん

最多参加数は伊達じゃない…

46 人目の騎士王さん

それで？

その独立体はどうなったの？

47 五次分体

ノシ 召喚前に要請受けて処分しに来てん
嚴重に封印措置だけやってそのまま召喚先に行ったわ
もっててよかった却本作り

48 人目の騎士王さん
ブックメーカーwwww

49 人目の騎士王さん
弱体化の極みですね、分かります！

50 人目の騎士王さん
基本休眠だしなあ
もしかしたらこつちくるかも？

51 人目の騎士王さん
せやな

52 A U Oの嫁@冬木の独立体
呼んだ？

53 人目の騎士王さん

(。D。)ポカーン

54 人目の騎士王さん
ファッ!?

55 人目の騎士王さん
ちよw w w w w w w
マジできやがったw w w w w w w w w w w

56 人目の騎士王さん
コテハン・・・おい・・・

57 人目の騎士王さん

求婚・・・受けちゃったんですね・・・

58 人目の騎士王さん

まあ状況考えればどうしようもない希ガス

59 A U Oの嫁@冬木の独立体

おまいら揃いも揃ってひどすぎワロタwwwwwwww

まあ気持ちは分からんでもないけど

ああ見えて結構イケメンだぜアイツ？

60 人目の騎士王さん

ええ・・・

61 人目の騎士王さん

無いわー

62 人目の騎士王さん

いやあの人根っこは間違いなく善の英雄だけど
マジでイケメンだし慢心Offはかっこいいけど
私たちが面倒くさいようにあの人も結構面倒くさいよね？

63 人目の騎士王さん

裁定者として北風であること、だっけ？

64 人目の騎士王さん

独立体がA U Oに付き合うのも信じられんし
そもそもA U Oが独立体に付き合うのも……

65 人目の騎士王さん

それな

66 A U Oの嫁@冬木の独立体

まあその辺りは気にスナナ

あ、そうそう処分した分体さん

72 人目の騎士王さん

この場合A U Oがつていうより

G O Bがつて感じだよね

73 人目の騎士王さん

まあG O Bつて令呪もあるから・・・

74 人目の騎士王さん

G O Bは無敵、はつきり分かんだね

75 人目の騎士王さん

今回の接続はその報告つてとこか

76 人目の騎士王さん

せやな

77 人目の騎士王さん

多分増えないだろうと思われてた独立体が増えるとは

78 人目の騎士王さん
赤飯？

79 人目の騎士王さん
いやめでたくないから

80 人目の騎士王さん
まあそういうことで

あとはいつも通り雑談だな

81 人目の騎士王さん
よっしゃ恒例の転生体自己紹介シクヨロ！
例によって切嗣がクソだから暇つぶし頼んだ！

82 人目の騎士王さん

切嗣
www
www
www
www
www
www

83 人目の騎士王さん
切嗣は仕方ない

84 人目の騎士王さん
士郎マジ靴

85 人目の騎士王さん
知ってる

86 如月千早@グラブル世界
何か毎回こんなことやってる気がする
現在グラブってます

87 渋谷凜
グラブル(▽、)人(▽、)ナカーマ

88 ミラー・マクスウエル@原作終了
私も今はグラブってる

89 提督

グラブってる勢多くね？

90 審神者

俺もグラブりたい

91 桐ヶ谷和人

そろそろ課金は自重すべきか・・・

92 グラン@原作前

別の転生体と会いそうで怖い

93 藤丸立香@ロード・アニムスファイア二世

・ ・ ・ 本場に多いなグラブル勢
びっくりだ

9 4 星伽白雪

お前の肩書のほうがよっぽどびっくりだよ！

9 5 アルトリア@グラブル世界
わたしってどういう扱いなの？

9 6 アルトリア@アイマス世界
さあ？

9 7 アルトリア@ブリーチ世界
一応転生体なんだけどね

9 8 イリヤスフィール@リボン世界
何かこの間ルビーに絡まれたんだけど

99 アルトリア@聖☆お兄さん世界
まさかAUOまで転生体を派遣するとは
求婚うざいんで受けちゃってもええんか？

100 人目の騎士王さん
相変わらず転生体の闇鍋っぷりが愉快

現在の独立体

- ・謎のヒロインX
- ・謎のヒロインX〔オルタ〕

- ・アドミニストレータ
ムーンセルを管理している独立体。

要請を受けて派遣された分体が乗っ取りして変質・分離した。通称管理人。月の人。あるいは観測魔・出歯亀厨とも。

定期的に分体・転生体で回線を繋ぐ。掲示板と銘打ってはいるがほぼライン。その性質上、よくトラブルの発端にいるラスボス系愉快犯でもある。

彼女が元凶の騒動が起きる度に分体・転生体は「おのれ観測魔」と叫んでいる。

・冬木の妃（仮称）

経歴は本文にて。通称A U Oの嫁。

実はまだ完全な覚醒には至っていない。半分寝ている。

そのため、常にローテンションで無気力。面倒くさがり。なるようになるさ。

流され体質で、A U Oのプロポーズも「あ、はい」の一言で受け入れた。

以来、それなりに平穏な夫婦生活を送っているとかなんとか。

分体・転生体の間では「アグラヴェインに合わせてはいけない独立体第一位」と言われている。

転生体

騎士王のとしての自覚・記憶はまちまち。

回線接続時は全員平等に自覚と記憶が完全である。

転生体が身に着けた技術は本体にフィードバックされる。

その後、本体が許可すれば分体・転生体も利用可能。

作中の却本作りは以前に某先輩に転生した時のもの。

ちなみに、某人外とは今でも親交がある。

14

301 人目の騎士王さん
そろそろ問題を片づけるべきなのかもしれない

302 人目の騎士王さん
やめろよ
めんどくさい

303 人目の騎士王さん
いやあでもさあ
やんないといけないじゃん

304 人目の騎士王さん

そろそろ直死・・・じゃなくて直視する必要が出てきたようで

305 人目の騎士王さん

いかないとなあ

カルデア

306 人目の騎士王さん

いやだああああああああああああああああああああ

307 人目の騎士王さん

昔の知り合い大集合とかホント無理

308 人目の騎士王さん

お前それシロウの前でも同じこと言えんの？

309 人目の騎士王さん

ごめん

310 人目の騎士王さん

逆に考えるんだよ

昔の知り合いに関わらなければいいんだって

311 人目の騎士王さん

どうやって？

312 人目の騎士王さん

別の楽しみを見出す

313 人目の騎士王さん

ほう

314 人目の騎士王さん

ほほう

315 人目の騎士王さん
ほほーう？

316 人目の騎士王さん
やめい w w w w w w w w w w

317 人目の騎士王さん
別の楽しみだったって何するのさ

318 人目の騎士王さん
そりやおめー

ぐだーずの嫁 or 婿を見繕うんだよ

319 人目の騎士王さん
なんと

320 人目の騎士王さん

神か

321 人目の騎士王さん
むっちゃたのしそう

322 人目の騎士王さん
楽しそうだな分体は

323 人目の騎士王さん
そりゃあもう

324 人目の騎士王さん
基本的に恋愛のアレソレがないからな
シロウ？彼は例外です

325 人目の騎士王さん

相変わらず鞆に甘い俺らである

326 人目の騎士王さん

まずぐだ男の嫁は誰よ

327 人目の騎士王さん

マシユ

328 人目の騎士王さん

マシユ

329 人目の騎士王さん

マシユ一択

330 人目の騎士王さん

マシユ以外にいても？

331 人目の騎士王さん
どうあがいてもマシユ

332 人目の騎士王さん
圧倒的後輩

333 人目の騎士王さん
ぐだマシユはアヴァロン、異論は認めぬ

334 人目の騎士王さん
じゃあそれでいこう
……で、問題はぐだ子の婿なのじゃが

335 人目の騎士王さん
んー…

336 人目の騎士王さん

悩ましい

337 人目の騎士王さん
無難に巖窟王？

338 人目の騎士王さん
アラフイフはいいぞ

339 人目の騎士王さん
風魔きゅんは？

340 人目の騎士王さん
キングハサンとか言ってみる

341 人目の騎士王さん
グランドアサシンはおじいちゃんだろ！いいかげんにしろ！

342 人目の騎士王さん

ここまで悪属性

ベデイヴェイエルは駄目ですか

343 人目の騎士王さん

いいねベデイ

ガウエ、ランス、トリはどうよ？

344 人目の騎士王さん

ないわ

345 人目の騎士王さん

ないわー

そもそもマシユ（inギヤラハッド）がいる時点でランスロットは無し

346 人目の騎士王さん

ないない

あえてのシロウ

347 人目の騎士王さん

シロウには凜桜白野だと思うんじやが

あ、イリヤ美遊クロエは妹枠な

そこでキャスニキ先輩ですよ

348 人目の騎士王さん

おいおいお前ら何言ってやがる

ドクターロマンを忘れるなよ

349 人目の騎士王さん

いいねドクター

ああ〜心がぼかぼかするんじや〜

350 人目の騎士王さん

突然のソロモン

3 5 1 人目の騎士王さん
やめい

3 5 2 人目の騎士王さん
モードによるぞ

ガチ非人間か中身ドクターかゲーさんかで色々変わってくる

3 5 3 人目の騎士王さん

ゲーさんいいよね

かわいい

3 5 4 人目の騎士王さん

＼やだよ／

3 5 5 人目の騎士王さん

ゼパなんとかくんは殺生院の観葉植物になっててください

356 人目の騎士王さん
意見割れるなあ

357 人目の騎士王さん
いつそくじでも引く？

358 人目の騎士王さん
いいね

男鯖（とドクター）からランダムに決めるか

359 人目の騎士王さん
FGO世界線はいくつもあるから何回でもできる

360 人目の騎士王さん
まさに理想郷

361 人目の騎士王さん
くじプログラム組んだぞ

362 人目の騎士王さん
さすが私、仕事が早い

363 人目の騎士王さん
自画自賛乙

364 人目の騎士王さん
一度引いたキャラは以降ナシ？

365 人目の騎士王さん
いや、アリで

世界線はたくさんあるから

366 人目の騎士王さん

んじゃー一発目！

367 チキチキ☆ぐだ子の彼氏様は誰だろな！

【エミヤ〔アサシン〕】

368 人目の騎士王さん

却下

369 人目の騎士王さん

却下

370 人目の騎士王さん

却下

371 人目の騎士王さん

アイエエエエ?!!
 キリツグ!? キリツグナンド
 デ!?!?!

372 人目の騎士王さん
単発教はまずかつたんじゃ・・・・・・・・

373 人目の騎士王さん
石は無限だから問題ない

374 人目の騎士王さん
とりあえず次いくぞ

375 チキチキ☆ぐだ子の彼氏様は誰だろな！

【マーリン】

376 人目の騎士王さん
アウト

377 人目の騎士王さん

アウト

378 人目の騎士王さん

アウト

379 人目の騎士王さん

どう考えてもアウト

380 人目の騎士王さん

男鯖全員つてこういうやつらも含むつてことだよね

381 人目の騎士王さん

じゃあ次は十連でいくか

382 チキチキ☆ぐだ子の彼氏様は誰だろな！

【巖窟王 エドモン・ダンテス】

【ギルガメツシュ】

【アストルフオ】

【天草四郎】

【巖窟王 エドモン・ダンテス】

【李書文】

【ガウエイン】

【巖窟王 エドモン・ダンテス】

【巖窟王 エドモン・ダンテス】

【ダレイオス三世】

383 人目の騎士王さん

ひえ・・・

384 人目の騎士王さん

ざわ……

ざわ……

385 人目の騎士王さん

アストルフオキゅん含むのかよお！

386 人目の騎士王さん
これもうわかんねえな

387 人目の騎士王さん
巖窟王多すぎイ！

388 人目の騎士王さん
最後の人はいいの？含んじやうの？

389 人目の騎士王さん
アステリオス君ならまだ救いはあつた

390 人目の騎士王さん
ちよいちよい地雷案件があるんですがそれは

391 人目の騎士王さん

天草はやめとけ

392 人目の騎士王さん

金ぴかは・・・マズイ・・・

393 人目の騎士王さん

キャスターならワンチャン

394 人目の騎士王さん

どっちにしろいつも通りじゃないですかヤダー！

395 人目の騎士王さん

いったん次の単発で終わりにしよう

396 チキチキ☆ぐだ子の彼氏様は誰だろな！

【佐々木小次郎】

397 人目の騎士王さん
ああ・・・

398 人目の騎士王さん
うん・・・

399 人目の騎士王さん
いいんじゃない？

400 人目の騎士王さん
反応薄すぎワロタ
wwwwwwww

|

「つてことがあつたんだよねえ」

「ホント暇だな貴様」

いずこかの世界線、冬木の街を劫火が呑み込んでからざつと三年と少し。

何やかんやで夫婦の間柄となったアルトリアとギルガメツシユはのんびりと雑談していた。

最近はお動くようになったとはいえ、妻は一日の大半を寝台で過ごしている。

夫も傍を離れないため必然的に二人は寄り添うように生活しているのだ。

膝枕、などという聖杯戦争当時であれば考えられない態勢であつても平然としてい
る。

基本拒絶の意思を見せない騎士王、そんな彼女にぞつこんな英雄王。

もはや教会では名物の光景となつている。言峰は慣れたらしい。

ちなみに膝枕の枕役はギルガメツシユである。

「だって立香だよ？ コミュカ天元突破な圧倒的善人だよ？ お見合いババアになりたい。結婚式で号泣したい。第一子を抱き上げてあやしたい」

「その欲求がどこから湧き出るのが至極奇妙よな」

「あなたなら分かるでしょ。他人が愛しい人との関わる中で一喜一憂しながら親愛度を高めていくの、萌えるよね。全部録画したい」

「雑種の恋愛事情を揶揄するのは愉快だが、萌えるという感情は理解しがたい」
「ちえー」

子供の様に頬を膨らませるアルトリア。

内心で愛らしさに悶えていることを顔に出さないよう、ギルガメッシュは努めて冷静に返答する。

「そも、何故我まで彼氏とやらの候補になつている。王の寵愛を受けるにふさわしいのは一人しかおるまい。というかよくも我の前でかような妄言が吐けるものだな」

「それはそれ、これはこれ。たとえ本命がいたとしてもあえて別の相手を想像するんだよ」

「意味不明だ」

「別にあなたに理解してもらおうとは思ってないから。——やれやれ、わたしも観測魔のことは悪く言えないな。まあわたしだけけど」

観測魔。

時に彼女が口にする独立体の一人。

「面白いデータが欲しい」という単純な動機で世界レベルの大災害を稀におこす迷惑な傍観者。

この独立体の被害にあつた人間など掃いて捨ててもまだ溢れるほどいるだろう。

「つまり、他人の情事を眺めたいと」

「そういうこと。物陰から見つめたい……いつそ壁になりたい、空気になりたい」

「だから後半が意味分からん」

「考えるんじゃない感じるんだ。心を静め、思考を研ぎ澄まし、世界と一体になりながら湧き出る萌えに感謝するんだよ」

いつもの無気力が嘘のように熱く語るアルトリア。
ギルガメツシユはもう諦めていた。

「……もうよいわ。それで、理想の相手とやらは決まったのか？」

「ぐだ男は即決でマシユなんだけどねー。ぐだ子が中々に割れるんだよなあ」

「もう女でも後輩でよいのでは？」

「!? ——百合、だと………?!」

あ、変なスイツチ入った。

「ありがとうギルガメツシユ。おかげでとてもおいしいことになりそうだ。さて書き込んで他のわたしたちから意見をもらおうか……」

「………そうか」

——すまぬ何処ぞの世界線の雑種。不要な発言はするものではなかった。

割と真面目に謝罪の念を平行世界に向けたギルガメツシユ。

その顔には諦念と呆然の色が濃い。

反対に、彼の腿に頭を預けるアルトリアは期待に笑みを浮かべ、その瞳は興奮に輝いていた。

「……ほほう、性転換……そういうのもいいね……イケメン女子が多いもんね……」

「あー……それで、アルトリアよ。貴様が良いと思う雑種の伴侶は誰だ？」

「——それ、聞いちゃおう？」

かつぴらく騎士王の眼。それはまさにメジエドのごとく。

「なに、興味本位ゆえな。貴様が愉悦を語ったこともなからう？」

「そうだけど……迷う……あ、くじ始まった。じゃあ引いた奴から順番に話していくか」

誰かなー、と笑いながら目を閉じるアルトリア。
しばしの静寂後、ふむと彼女は考え込んだ。

「巖窟王か……やつぱ監獄塔で一週間すごしたつてのは大きいよね。肩を並べるのはもちろん、最後は鎧を削っている。これは相当ポイント高いよ。光の相棒がマシユなら、彼は影の相棒だね。あと生前の経歴が適正高めてる」

適正とはなんぞや、と内心で疑問を抱くも口にはしない。

再び沈黙するアルトリア。次の言葉を待つギルガメツシュ。

「ええマーリン!? んー……あの非人間が一介の女子に翻弄されてるかと思うと萌えろし笑える。いいぞもつとやれ。そして無様な醜態を晒すがいい」
「明らかに表現が異なっているぞ」

「だってアイツだし……お、クー・フリーン先輩か。あの人、気さくでとつつきやすいから安心感あるよね。べつたりでもなく離れすぎでもない、適切な距離感を保てる人は本当に貴重だと思います。べつたりでも美味しいけどネ！」

「ちなみに狂王は」

「オルタニキ先輩はその辺おかまいなしだから……それはそれで可愛いと思う」

うんうん、と噛みしめるように頷くアルトリア。

「ヘクトール氏か。あの人基本的に飄々としている割には「俺のトロイア」とか言っちゃうんだよね。無気力を装いながらも的確かつ迅速に仕事をこなし、大切な人にはいっそ重いくらいの情を傾ける。……本気なオジサン、最高です」

「次」

「んええ天草て！ えーと……揺らがない信念が揺らいだら最高だと思います」

「次」

「アンデルセン、だと……?! んんん……何事にも真摯だからぐだ子にも真正面から向き合ったら最高。月の裏での勇姿をわたしは忘れていません」

「先程から「最高」としか言うておらぬぞ？ では、次」

「アラファイフねえ。およそ人間らしい情を持たない教授をあそこまで愉快人間に仕立て上げた手腕はマジですごいと思う。というか新宿の時点で「大切な存在」になってる時点で語るまでもなかったですね……アラファイフ尊い」

その後もくじで引かれた順に語るアルトリア。

「ジキル君は狂気を押さえた上であの優しさというところが尊い……あ、ハイド君もですよ?」

「ビリー君って、大分親密にならないと本音出さないんだよね。そこが控えめに言つて最高」

「アルジュナ……本性見せても許しちゃうんや……無理……ヤバイ……」

「雄ゴリラにめちやくちやにされてたら本当に死ぬ……シコい……」

つらつらと内容が行方不明なアルトリアの発言を聞き流す。

そんな中、ギルガメツシュははたと気づいた。

「——これが、「語彙力のないオタク」という奴か」
「ああああドクタ~~~~~~~~……マジ天使……」

シキトリアさん（ブケファアラフム憑依）

……もちろん冗談です。

よく「語彙力がない」とは言いますが、実際に書いてみると予想以上に難しい。診断メーカーも使ってみました。あまりうまくできませんでした。

ギルガメツシュがいつの間にかツツコみに。そして放棄。
それでも話を聞いているあたり本当に健気で一途。誰だこいつ。

「ところで、妃よ」

「なに？」

「貴様、何故転生などする？」

第五次聖杯戦争を間もなく控えたある日。

夫は妻にそう問うた。

「突然どうしたの？」

「人に焦がれる貴様ならば何者かの人生を見つめることで心を満たすことも可能だろう」

「んー……まあ、そうなんだけど……なんていうのかな……」

白髪を揺らし、考え込むアルトリア。

「ええと——百聞は一見にしかず、みたいなの？」

「——なるほど、確かに道理よな」

「見るのもいいけどね。やっぱり自分の身で体験するのが一番だと思うよ？」

微笑むアルトリアを撫でるギルガメッシュ。

「では、我に聞かせてくれまいか。貴様の分身が見聞きしたことを」

「え、わたし独立してるからその辺詳しくないよ？」

「融通は利くのではないか？ 回線から聞いてみるがいい」

「ちよつと待つて……」

瞳を閉じるアルトリア。

「今ちようど『トラブルお悩み相談室』やってるからその辺から適当に抜粋でいい？」

「うむ、構わぬぞ」

「んじゃ、えつとねー……」

701 遠坂凜@EXTRA本編終了
ザビ探したいんだけど

702 人目の騎士王さん
確か日本だったはず

703 人目の騎士王さん
そうでなくても極東地域だな

704 人目の騎士王さん
うっかり西へ行くなよ

705 人目の騎士王さん
確かレオ・ラニも生存だっけ？

706 人目の騎士王さん
月の裏メンバー（キアラ除く）全員だよ
随分と欲張りな願望叶えたんだな岸波は

707 神峰翔太@パーティーリーダー攻略中
デレマスの武内Pにスカウトされた

708 人目の騎士王さん
断れ

今優先すべきは部活の方だろ

709 人目の騎士王さん
まずパーティーリーダー攻略して大会進めろ

話はそれからだ

710 人目の騎士王さん

武内P女子だけじゃなかったんか！

711 人目の騎士王さん

事務所もなりふり構ってられんのじゃろ（適当）

712 マシユ@カルデア爆発

先輩がいない

713 カルデア分体（青剣）

すぐいく

714 人目の騎士王さん

ひええ・・・

715 人目の騎士王さん
主人公いないのかよ

716 人目の騎士王さん
偶に別作品が紛れ込むこととかあるけどさ

717 人目の騎士王さん
転生体も結構入り込んでたよね

718 藤丸立香@ロード・アニメスファイア二世
時計塔の老害ってどうやって黙らせられるの？

719 人目の騎士王さん
泰山麻婆おすすめ

720 人目の騎士王さん
くさやでも可

721 瑠伽@メタフアリカ創造完了

回転おにぎりならあるよ…？

今ならお玉が溶けるシチューつき

722 人目の騎士王さん

メシテロ（ガチ）やめいwwwwww

723 彌紗@原作前クロニクルキーなう

くっそ暇なんじゃが

724 人目の騎士王さん

回線ROMってろ

725 人目の騎士王さん

誘拐待し希

726 人目の騎士王さん
母さんと和解しとけよー

727 ミュール@封印なう
くっそ暇なんじゃが

728 人目の騎士王さん
またかい

729 人目の騎士王さん
アルトネ多いな

730 イオン@アルノサージュ終了
地球に戻った方がいいかな・・・？

731 人目の騎士王さん
そこは好きにすればいいんじゃない？

732 人目の騎士王さん

ラ・シエーラに未練があるなら残ってもいいし
無いなら帰ればいい

733 人目の騎士王さん

もう終わったんだし好きに生きてもええんやで？

734 シェリル・ノーム@原作前

喉にいい食べ物って何かない？

735 人目の騎士王さん

それぐらい調べろよ

736 人目の騎士王さん

生姜とかはちみつとか？

737 人目の騎士王さん

しょうもないこと相談しやがってwwwwww

738 人目の騎士王さん

まあ折角つないだ回線だし

盛り上がろうぜ

739 エステル@原作前

目の前には毒が盛られた紅茶

部屋には敵の息がかかった護衛と使用人（複数）

頼みのフレンは遠征で不在

原作開始前に死ねというんですか……（；ω；、）

740 人目の騎士王さん

う、うわああああああああああああ
!!!!

741 人目の騎士王さん

しょうもない話題の次がこれとか
wwwwww

これとか・・・

742 人目の騎士王さん

詰みですね

743 人目の騎士王さん

詰んだな

744 人目の騎士王さん

エステル@の終了っぷりがとても悲しい

745 帝国モブ騎士

ちよ、まって何か心当たりある！多分同じ世界！

待っててくださいもう一人の俺（主君）!!!

746 人目の騎士王さん
お？

747 人目の騎士王さん
これは光明か？

748 人目の騎士王さん
とりあえず頑張れ

749 人目の騎士王さん
もう一人の俺（主君）の意味不明っぷり

750 人目の騎士王さん
同一存在だけど同一人物ではないから……

751 アルトリア@大神世界

分体だけどアマ公の石像が破壊されたから代理出張なう

俺自身が疑似サーヴァントとなることだ（キリッ

とりあえず行動指針教えてくり〜

752 人目の騎士王さん

よくあるよね

何らかの事情で原作が進まないⅡ世界が維持できないから分体派遣つて

753 人目の騎士王さん

とりあえず筆しらべは進んでいくうちに自然と集まるから

754 人目の騎士王さん

妖怪退治はそこまで心配するこたあねえだろ

755 人目の騎士王さん

イツスンとサクヤとは仲良くしとけよ

ウシワカは……………どうなんだ？

756 人目の騎士王さん
適当にからかいつつ相手してればいいんじゃない？

757 人目の騎士王さん
疑似サーヴァントってあれか

派遣された分体にアマ公の霊基を憑依させるとかそんな感じ？

758 人目の騎士王さん

サーヴァントにサーヴァントを・・・？

五次キャスもびつくりの反則じゃね？

759 人目の騎士王さん

原作が進まないから是非もないネ！

760 ワンピ世界モブ

家が消えた

761 人目の騎士王さん

どこぞの海賊同士の戦争かな・・・？

762 人目の騎士王さん

とりあえずドンマイ

763 人目の騎士王さん

緊急プログラム使えるか？

あれ一時的に疑似サーヴァントになって行動の保障する奴だろ？

764 人目の騎士王さん

もしくは海軍に入隊か、海賊になるか

765 工藤新一@原作クラッシュ

幼児化回避成功！一部キャラ生存保障成功！

というわけでとつと某お酒の組織潰したいんだけど

766 人目の騎士王さん

つ【某組織全データ】

767 人目の騎士王さん

はやいwwwwwwwwwwww

768 人目の騎士王さん

某組織は完全にタイムアタックの標的だから……

769 人目の騎士王さん

普通に「あの方」暗殺もしくは逮捕から

聖剣or聖槍でジャンルを間違えた終焉を迎えたりと

その結末は多種多様です

770 人目の騎士王さん

完全におもちゃ

771 人目の騎士王さん

作品がクロスオーバーしてるとさらに目も当てられんからな

772 人目の騎士王さん

南無（一人）

773 型月モブ混血

実家が管理していた宝石を標的とした予告状が二通

一通は神出鬼没の大泥棒、もう一通は月下の奇術師

そして宝石はS A N 値直葬間違いなしの超☆曰くつき

・・・どうしよう？

あ、ちなみに僕の家は遠野に連なります

774 人目の騎士王さん

マジでクロス世界キタ——（。▽。）——
!!!

775 人目の騎士王さん

しかもよりによって型月とかwwwwwwwww
ルパン&キッドの死亡が確定しましたwwwwww

776 人目の騎士王さん

ぺろっ、これは月姫系統！

777 人目の騎士王さん

混血の異能は何が使える？

某当主や軋MAXまでとはいかなくても何かあるだろ

778 人目の騎士王さん

死徒も魔術師も聖堂教会も退魔も絡んできそうですねえ……

779 人目の騎士王さん

ミステリーとはなんだったのか

780 人目の騎士王さん

最悪粉末状にして凝固剤で固めた後海に捨てればいい

781 人目の騎士王さん

それはそれで大惨事の予感・・・

782 人目の騎士王さん

まあ盗むブツが消えれば何も起きないわけですし……

783 モブ武偵

マジかこつちも某小学生探偵来てるんだけどww

一応潜入任務なのにむっちゃ絡んでくるwwwwwwww

たwwwswwwwwwwwwwwwwwwwww

784 人目の騎士王さん

好奇心旺盛ですね（白目）

785 人目の騎士王さん

緋弾世界かぁ

ヤバめなふいんき（何故かry）だなあ

786 人目の騎士王さん

気が付けろよ

787 如月千早@グラブル世界

声が出なくなつた

788 人目の騎士王さん

!?

789 人目の騎士王さん

フアツ!?

790 人目の騎士王さん

え、事故回避したから弟生きてるって話じゃ・・・

791 人目の騎士王さん

そもそもグローバル世界にはいねえだろ

792 人目の騎士王さん

何があつたし

793 人目の騎士王さん

とりあえず団員の協力とりつけとけよ

794 アルトリア@アイマス世界

【悲報】AUOいる

795 人目の騎士王さん

またか

796 人目の騎士王さん
本当どこにでもいるな！

797 人目の騎士王さん
暇なんだね…

798 人目の騎士王さん
まあ転生つて楽しいから

799 愉悦部所属ジータ団長@黒髭と清姫拾った
亡国イベなうだけど

何故か牢屋芸人に間違えられて収監された
「執政官に踏まれたい」とか言わないほうがよかった？

800 人目の騎士王さん
まずコテハンからツッコませろ

「……なんているの？」

「さあ？ 座の本体が興味を持ったのだろう」

「え、そういうのってあり？」

「我に不可能などない」

確かに、強烈な出来事が座の英霊本体にまで影響を及ぼすことはままあるかもしれない。
い。

だからと言って、アルトリアにしかできない暇つぶしがギルガメッシュにできるのだ
ろうか。

この愉悦王はとうとう分体を転生させてきたのだ。

どこまでアルトリアに執着しているのやら。

「我としてはむしろ貴様の分身に突っ込みたいところなんだがな。何故此界の雑種英霊が異界にいるのか。それも蛇女と海賊。どう考えても大惨事しかありえない」

「コラボでもあつたんじやない？」

「それにしたつて人選が意味不明よな。よりによつて、といったところか」

「わたしに言われても……ユニヴァースエツクアスの独立体かえつちやんよりましだと思ふ」

「どっちもどっちだわ、たわけめ」

呆れてアルトリアの鼻をつまむギルガメッシュ。

「加えて、よりによつて神ごときをその身に降ろすなど、どれだけこき使われているのだ、貴様は。もっと仕事を選べ。カルデア派遣は溜め込んでいたのだろう？」

「メソポタミアのやべー女神ヤツとアマ公を一緒にしないでいただけですか。あと派遣は結構楽しいよ？ 面白いもの見れるし。ランダム、いいよね」

「そこまで娯楽を見出し愉悦を追求するのか」

「だってアヴァロンで寝てても暇だから……」

沙条も似たようなことやつてたし、と口をとがらせるアルトリア。

「そういうえば、わざわざ異界の騎士王の立場を奪うような真似すらしただったな、貴様は」

「大して深い意味はないよ？ 単に沙条へ嫌がらせしたかっただけだから」

単純な同属嫌悪。おなじ根源接続者でも両儀はそうでもないのにどうしてこうなった。

恐らくは騎士王の存在ゆえなのだろうと適当な仮説をギルガメッシュは立てる。

來野翼が謎のヒロインXを召喚したときは大変なことになったとか。

「して、声は治ったのか？」

「声？ ——ああ如月千早のこと？ どういう経緯で声が出なくなっただのか分かんないから何とも。もしかしたら専スレたてるかもしれないけど……まあ大丈夫だと思うよ」
「その自信は一体どこから湧いて出てくるものなのか疑問よな。あと……ロードの名を

冠した雑種。あれはどうなった？ 時計塔のことを相談していたな？」

「出世したよね、あの転生体。——ウエイバー君が間違いなく味方だろうからどうにかやっていけるとは思うけど。マジで勢力図かわるよねえ……」

「麻婆なんぞを凶器に薦めた貴様の発想が怖い」

「回転おにぎりのほうがよかった？」

「そういう問題ではないわ」

回転するおにぎり。パワーがあるんだか無いんだか。

「そういえば空の世界に分体が多いな？」

「ただの偶然でしょ？ まあ、あの世界って変な物が入り込むこと多いんだけど。アイドルとか飛ばされてる時点で察せって感じ。笑えるほどヤベー事態も起きてるから」

「具体的には？」

「一番ヤバかったのは殺生院キアラかなあ……次点で甘粕とか。あと——球磨川禊わの転生体が迷い込んだこともあった。シエテ君と士郎アチャがやりあったのはいつだったわけ

……？」

思った以上に危険な世界だった。

詳細が非常に気になるがそれは後にしておこう。

「ま、それなりに楽しくやっていますよ——お、ミリアサ世界に分体がいった。最近多いなあソシャゲー派遣……この間もデイバゲ行っただし……」

「ああ、それには我も覚えがある。もともと、詳細に把握しておるのは座の本体だけであろうが」

そうして、有り得ない関係を築き上げた二人は、静かに過ごしているのであった。

第五次聖杯戦争まで、あと少し。

A U Oと異世界談義。

ちなみに作者はグラブル未プレイです。プレイ動画等で満足勢。

何故って、F G Oでも苦戦しているのに二足の草鞋とか無理ですから。

根源接続者でも関わり方が異なっている。

「両儀式」とは可もなく不可もなく、けどたまに殺し合う。

沙条愛歌とも殺し合うことはあれど、しょっちゅう嫌がらせしてる。

とはいえ、あくまでプロト世界の話であり、ひむてん・F a k eではそうでもない。

Q. 何故グラブル世界はこんなにも魔境なのですか？

A. 世界そのものの特徴として、異物を受け入れやすい。さながら幻想郷のように。

まああんなにもコラボやってるんだから、変な物の一つや二つ、入ってもおかしくな

いよね。

脳内には人類悪変生 i n グラブルのネタが在るんですが需要が行方不明。
間違いなく読む人を選ぶだろうなあと迷ってる段階。しかもプリヤも交ざるし。

第六特異点

16

選ばなければならなかった。

獅子王を名乗る何者かが提示した救済に従うか、逆らうか。

だが、どちらにせよ、轡を並べてきた円卓の友に刃を向けるといふことだけは、明らかだった。

荒れた大地に朝の光が等しく照らされる運命の日。

高潔なる騎士がその身を獣へと落とす日。

獅子王を止めるには獅子王を守る同胞を手に掛けなければならなかった。

獅子王を守るには獅子王を止める同胞を手に掛けなければならなかった。憎悪はない。あるのはただ決意だけだった。

だが。

「その選択は無意味です、円卓の騎士」

突如現れた闖入者は、さらりと言い放った。

「だってそうでしょう？ 救うべきヒトなんて、そんな気持ち悪いモノ、どこにもいないんだもの。全部潰しちやっただも仕方ないわね、そうしたかったんだから」

「貴様、は……」

「おかしなことを言うのね獅子王。貴方にヒトを救うことなんて出来っこないのに。ヒトに疎まれる怪物に、一体何が出来るのかしら？」

いつの間にか、そこには全身黒づくめの少女と思しき者が立っていた。

黒衣に身を包み、外套のフードを目深にかぶり、目元は黒い布で覆われている。

外套から覗いて見える武装も、全て漆黒だった。

「貴方たちがどこの誰なのか知らないけど、わたしの前で殺し合いなんて、もつたいなさすぎる真似はやめてね？ 折角のお料理がぶちまけられる様子なんて見たくないわ。

まあ、さつきも味わってきたんだけど……ほら、わたし、欲張りなもの」

「——この特異点における生命の数が激減している。サーヴァントの仕業かと思ったが……貴様だったか。吹けば掻き消える泡沫の夢でありながらよくも人を殺したな」

「そして同時に貴方のせいでもあるのよ？ わたしたちはいつだって、ヒトに災いを成す害悪に他ならないんだわ。それを知らない貴方ではないでしょう？」

フードから僅かに露わになっている唇が薄く笑みを浮かべる。

どこか妖妃モルガンを彷彿とさせるその顔に、無言を保つ騎士たちが不快感に眉を顰めた。

「……予定を変更する。ソレを始末しろ。所詮は儂く消える熱情に過ぎぬ」

「『『御意』』」

こうなることも御見通しだったのだろう。

黒い影はくすくすと嘲笑をあげ、腰から二振の剣を引き抜いた。

「ああ、でも自己紹介くらいはしておいたほうがいいかしら？ といつても、そもそもわたし、大した名前がないのよね。わかりやすい呼び名は必要かしら？」

「不要だろう。貴様が何かは私が知っている」

「そんなもの、当然でしょう？ 分かり切ったことを口にするなんて、いよいよ脳が溶けたのかしら？ ……ふふ。でも、わたしも貴方の事は言えないわね。だって、わざわざ

問いかける必要なんてないんだもの。脳が溶けていたのはわたしの方だったのね」

仮面を外し、フードを脱ぎ、露わになる顔。

その顔に、獅子王以外の全員が驚愕に息をのんだ。

「あな、たは——」

「……ん？　なあに、その反応。まるで幽霊でも出たみたい。でも……かわいい。殺したくなっちゃう。……ああ、言っておくけど、わたしは貴方たちなんて知りませんから。ね？」

金の髪に碧の眼。

誰もが呼吸すらできないほどに、震えていた。

「でも、ふうん……貴方たちはわたしのことを知っているのね？　　なんというか——

——本当、」

気持ち悪いわ。

その一言と共に、刺し貫かれたと誤解する程の強烈な意志が充滿する。

殺意。

一点の曇りもない、憤怒も憎悪も敵意もない。

ただひたすらに「殺す」という意志だけが少女から発せられていた。

「貴方が獅子王ケモノなら……そうね。わたしは——殺人鬼バケモノ、かしらね？」

殺意の権化——アルトリア・ペンドラゴンはそう言つて双剣を構える。

濁つていたとはいへ、碧色だったはずの瞳は、いまや寒気がするほどに突き抜けた蒼色である。

「どういうことだ、オイ」

誰もが言葉を発さなかつた中、ただ一人怒りに問いかける者がいた。

「何かしら？」

「お前だよ。——俺が知つてるバカはな。基本人バカでなしの薄情者だ。それも、相談のいつもなしに勝手にアホやって、尻拭いをこつちに全部押し付ける。そして最終的に皆の

ためになつちまう。そんなバカが服着て歩いてるみたいなやつだ」

「ふうん。それで？」

「それで、じゃねえよ。……誰のためにもならない、何の意味もなさないような殺戮をするような奴じゃねえ」

「あら……貴方、わたしを知っているのね。でも……肝心なことは何も知らないみたいだわ」

訝しげに騎士——サー・ケイは目を瞬かせる。

義妹だったモノはくすりと笑いをこぼし、蒼い魔眼で静かに見据えている。

「貴方が知っているわたしはね、王様の振りをしていたの。上っ面だけ綺麗に、猫をかぶっていたんだわ。貴方たちが知らなかっただけのことよ」

「じゃああれか。お前が本性だということもりか」

「よく分かっているじゃない。……そうよ、こつちが本当。王様の振りして抑え込んでいた殺意を抑えなくなっただけ。簡単でしょう？」

ケイをにらみ、純粹すぎる殺意を向け、その首を断とうと剣を構える殺人鬼。

その一連の動作はごく自然に、当然のように行われた。

「じゃあ、アイツは」

「アイツ？ その救世主の振りしてるお馬鹿さんのこと？ わたしが本性なら、あつ

ちは本質ってどこかしら。おかしいわよね、わたしたちに救済なんて不可能なこと、わかってるのに」

「本、質——」

ただ一人、殺人鬼の言葉を反芻したのはモードレットだった。

「——もう言葉はいいでしょう？ そうね、本当に無駄な時間だったわね。わたししたら何をしてたのかしら。こんなことに一々時間を掛けるぐらいなら、とつとと殺してしまえばよかったわ。いけない、いけない。……まあいいわ。殺しちゃえば全部無意味に終わるわけだし？」

剣を振りかぶる殺人鬼。

義兄であったはずの男に何の躊躇もなくその命を潰そうと刃を閃かせる。

だが、剣がケイの霊基を破壊することはなかった。

その寸前で、投げられた銀色が殺人鬼の殺人を阻んだ。

「……何かしら？」

「別に、何も」

銀色の正体は燦然と輝く王剣。

それを投げ、ケイの命を救ったのは、モードレットだった。

不快感を隠さない殺人鬼を、王の子は無表情で見つめている。

「父上——いや、アーサー王。ずっと違和感を感じていましたが、ようやく気付きました……貴方たちは、俺の父上ではない」

「わたし、子供なんていないのだけれど？　ねえケモノさん？」

「モードレット……私に、叛意を示すか」

「ハッ、冗談じゃない。初対面も同然な他人同士なのに叛逆も何も無いってえの。単純に、始めから俺たちは敵同士だった……そのことに、たった今気づいただけの話だ」

そう言い残して、その場から立ち去ろうと背を向けるモードレット。

しかし、不意に視線だけを背後に向けた。

「首洗って待ってる、獅子王に殺人鬼……徹底的にテメエらの邪魔して、その魂胆ぐつちやぐちやの台無しにしてやるからな」

「貴方一人に何ができるといふのかしら？」

「本性と本質を名乗るテメエらだからこそその弱点があるんだよ、他人の空似」

そう言って、モードレットは床に刺さった王剣を引き抜き、走り去った。

かくして、円卓の騎士は崩壊した。

獅子王に齒向かった者は全員死亡した。だが、その大半は、殺人鬼を名乗る少女の手にかかった。

獅子王に従い、勝利した者は祝福を授けられた。その後、殺人鬼の駆逐に臨んだが、為し得なかった。

彼らの戦いから離反した者は、特異点を流浪し、暗殺者が守る山の村に身を寄せることとなる。

そこで、人類最後の希望がたどり着くまで、獅子王の目論みと殺人鬼の放蕩を阻害する戦いに身を投じるのだった。

「うーん……エルサレムねえ……」

カルデア内、とある一室。

サーヴァント一騎ごとに与えられた個室ではなく、十数人入ってもまだ余裕のある比較的大きな部屋である。無機質な室内には畳が敷かれ、卓袱台や座布団も設けられていた。

恐らく、爆破事件前は、会議室として利用されていたのだろう。

多数のサーヴァントが跋扈する現在は、アルトリア・ペンドラゴンと真名を冠する少女たちがたむろする場だった。むろん、家具等はすべて彼女が持ち込んだものである。

「いるよねえ、間違いなく。この間だって、回線であの観測魔が連絡いれてきたほどだし。絶対にわたしの分身がいるよね。確定的に明らかだよね？」

「プロント語にする必要は理解不能ですが……その考えは間違いないでしょう。用心が必要ですよ」

畳に寝そべる少女と行儀よく正座する少女。

全く同一の貌をしているが双子ではない。同一人物である。

寝そべっているのはキャスタークラスで現界したアルトリア。

正座しているのはセイバークラスで現界したアルトリア。

現在、このカルデアには謎のヒロインXも合わせて計七騎の英霊アルトリア・ペンドラゴンが登録されていた。同一人物の別霊基としては最多数である。

「ただ、不可解だったのが、アドミニストレータがしきりに無駄や余計と言っていたことでしょうか。いったい、どういうことなのでしょう」

「そういえばそうだね。確か「変なもんまで入り込みやがった」だった？　転生体が紛れ込んだりしたかな？　また面倒なことになったねえ」

「それはまだマシなほうでしょう。特異点修復まで隠れ潜む程度、可能でしょうから」「そだねー」

比較的古参——キャスターは最初に召喚されたサーヴァントである——に属するアルトリアたちは、こうして次の特異点へ向かう前の作戦会議を行うのが通例であった。

「被害者面しておきながら、異物混入を未然に防がなかった時点で、アイツの思惑なんざお察しだけど。……あの愉快犯が。我が分身ながら腹立たしい」

「面白そうだと思うえば完全に容認しますからね。ムーンセルで起きた事件でも、殺生院

キアラやアルキメデスの策謀を阻止できたはずだというのに」

「やるわけないじゃん」

「そうですね」

うんうん、と頷き合う同一人物。

同一存在ではあっても、迷惑かけられれば遠慮なく批判するのが彼女たちである。

「そもそも、根源接続者って神霊化できるのでしようか？」

「どうだろ……弱くなったのか、強くなったのか、よく分かんないよね」

「発端はベディヴィエールが聖剣を返還しなかったからですよ？ あちらの世界線ではどのような結末を迎えたのでしょうか？」

「終幕戦争があったかどうかすら不明だからねえ……まあ、アドミニストレータなら知っていると思うけど。知っていて黙ってるんだらうね」

「我々も知ろうと思えば知ることは可能ですよね」
「型落ちだから無理無理」

そうでしたね、とキャスターに応えるセイバー。

恐らく全てを知っているのは神の眼ムーンセルを管理する独立体と、今もアヴァロンで眠りにつく本体のみだらう。サーヴァントの身分に計れることなど程度が知れている。

「人類の選別と保存……人理が焼却されてる今だからこそ許されてるけど、本来ならアウトだよ。人類悪顕現だよ」

「どうでしょう。他のビーストとは違って、愛ゆえに人類を滅ぼすというわけではありませんから。微妙なところだと思います」

「あー、じゃあアレだ。「オシリスの砂」だよ。あんな感じなら間違いなく人類悪顕現だわ」

「それつまりアトラス院の長がとんでもないということになりませんか」

「違うの？」

「違いますけど」

世界を滅ぼせる兵器を量産しているだけはある、とアルトリアたちは何とも物悲しい気分になった。

「ま、自分の不始末は自分で片づけないとね？」

「ええ。———そういえば、マシユに宿った英霊がサー・ギアラハッドだと判明するのは今回でしたね。宝具が完全に解放されるのもこの時でしたか」

「そういえばそうじゃん。やー……懐かしいなあ、召喚直後に休眠に入ったギアラハッドにコンタクトとった時のこと」

「回線は大盛り上がりでしたね」

カルデアのデミ・サーヴァント実験が頓挫した直後、アルトリアの分体の一つがマシユ・キリエライトの肉体で休眠するギャラハッドと接触したときのことである。

騎士と王は共謀して、触媒の有無に関わらず第三号英霊にレオナルド・ダ・ヴィンチ、爆破後の第四号英霊にアルトリア・ペンドラゴンが召喚されるように仕組んでいたのだ。

「何でも知ってますよ顔でロマニ君をからかうのも飽きてきたしなあ……ここいらで一つ爆弾でも落とすか。脅してみようかなあ……ふふふ」

「……キャスター、さすがに悪趣味ですよ」

「はいはい。——さて、そろそろマシユの身の上話も済んだところかな?」

「行きましようか」

同じだけでも少し違う、そんな奇妙な二騎の英霊は連れたつて部屋から出た。

Side：藤丸立香

「——え、何。アルトリアはマシユが誰を宿しているのか、知ってるのか？」

「というか、知ってるも何も、生前の部下だし」

「……それってつまり、円卓の騎士ってこと……でいいのか？」

「そうですよ」

「何で、黙ってたんだ？」

「いやあ、カルデアスタッフがだーれも教えてないから、空気読んだだけっていうか」

「それに、ロンドンでグランドキヤスターと邂逅した時、ドクターは「聖杯に選ばれた英霊」と言っていましたね」

「そこまで言っておいて何も言わないってことは、そういう方針なんだろうなあ、と」

微妙な空気が管制室に流れる。

否、微妙なのは俺とマシユ、ドクターとダ・ヴィンチちゃん、スタッフさんだけだ。

二人のアルトリアは極めて自然体である。

事の発端は、ブリーフィングのさなか、突然キャスターのアルトリアが「マシユの英霊もそろそろネタ晴らしししないとねー」と言い放った事なんだが……。

「他のアルトリアたちも……」

「知ってなきやおかしい。いやまあ、セイバーリイは別枠だけど」

「モードレットも？」

「散々ロンドンで「盾野郎」とか言ってたじゃん」

「それ以外だと、シロ——赤いアーチャーもですか。宝具の盾を見て「考えたな花の魔術師」と言っていましたね。さすがは解析に優れています」

「冬木で大聖杯守ってた黒い私も色々いってたよねー」

「そういえば、第五特異点で、李書文はマシユのことを見抜いていましたね」

ヒントなんてそこらじゅうにあった。

「——ま、そもそも、「彼」が召喚されてマシユに宿されるよう召喚システムとカルデア内部に色々と仕組んだのはわたしなんだけど!」

「マジで!?!」

「違います、嘘です。キャスター、不要なホラは吹かないで下さい」

「あ、何だ……冗談か……」

「まあ、第三号にダ・ヴィンチが召喚されるように仕組みはしましたが」

「嘘だろ!?!」

「こっちは本当だよ。たとえ休眠していようが生前の部下と連絡ぐらいとれるつついの。根源接続者なめんなよ? たいていのことはちよちよいのちよいだ」

不敵に笑みを浮かべるキャスターのアルトリアに、思わず背筋が冷えた。

例え普段、のんびりで脳天気であつても、かつてブリテンを治め、墜ちる月を砕いた騎士王なのだ。その実力は計り知れない。

「やれやれ。まあ、とりあえず……騎士王に一本取られた、ということにしておこう」

「うん……なんというか、色々と、敗北感が湧き出てくるというか」

「何、気にすることはないよロマニ、ダ・ヴィンチ。一応はカルデアの為だから、感謝はともかく恨まれる覚えはないんだなコレが。どうだ驚いたか!」

「我が分身ながらその物言いには腹が立ちますね……どちらにせよ、今回の特異点は色々と問題外ですから、警戒が必要です。十分注意してください、二人とも」

「? あ、あの、アルトリアさんは次の特異点がどのような物なのか、ご存知なのですか?」

マシユがそう問いかけた瞬間、渋面で沈黙するアルトリアたち。

「ご存知、といいますか……」

「よく分かんない、というか……」

「足を踏み入れないことには、といいますか……」

「どつちにしろ面倒事しか存在しない、というか……」

「あー……えつと……とにかく、出発前に頭使うより、特異点行つて頑張ろう! な!」

ううん、と唸るアルトリアを遮るように声を出す。

マシユたちもぼかんとして俺をみている。

「——ふふ、そうですね。何はともあれ、まず特異点へ。状況を知らないことには、何も

始まりませんから。行きましょう、先輩」

「準備はできたかい？ それじゃ、藤丸君はコフィンに入つてレイシフト準備を」

ドクターに促され、脚をコフィンに向ける。

二人のアルトリアがああも複雑な顔を見せたのだから、気を引き締めていかないといけない。

マシユの為に、俺は戦い抜いて見せる——！

第六特異点／Zero&アバンでした。

作中の召喚システムの仕込みは根源接続者スゲー、ということにしておいてください。

予告通り、スーパーシキトリア大戦です。

現時点で同じ顔したヤツが四人。(獅子王・殺人鬼・セイバー・キャスター)

ついでに外から観測しているヤツとそいつか繋げてる回線で実況中。

でも安心してくれ。まだまだ増えるから。

……あ、モーさんもか。

とりあえず、獅子王・ベデイとシキトリア・モーさんでは世界線が異なります。

多分ブリテンの結末も異なるはず。

その他騎士は特に考えていません。どっちにしる変わんない。

く現在の第六特異点く

獅子王「人理焼却はどうにもならんからええ奴だけ保護するで」

騎士s「りようかい＼(´o´)／」

殺人鬼「人理焼却前に出来るだけ人殺しとこ」

モーさん他「やめい」

「すやあ (☒ω☒)」

「遊びに来たで」

「すやあ (—ω—)」

観測魔「おもしろいからしばらく見とこ」

回線「ざわ…… ざわ……」

特異点に降り立って真つ先に視界に飛び込んできたのはとんでもない砂嵐だった。

猛烈なまでの砂の世界に苦しみながらも、どうにか指示を出す。

オルレアン以降、特異点にレイシフトした直後にはセイバーとキャスターのアルトリアに偵察と斥候を任せるのが習慣となっていた。

高い白兵能力を持つセイバーに、多彩な術を行使するキャスターは、特異点修復の重要戦力として常に活動してきた。

砂の向こうに二人が消えるのを見送った後、俺たちも俺たちで行動を開始した。

その後、ハサンとの戦闘、ニトクリスとルキウスとの邂逅を経て、ニトクリスの案内のもと、オジマンディアスの大神殿へと向かった。

何やらてんわやんわあったとはいえ、それなりの情報提供と資源を譲ってもらい、気を改めて聖都を目指して進むことにした。

『——わかった。 んじゃそこで合流しようか。 でも気を付けてね、 割とキナ臭いから』
『少なくとも史実における十字軍は一切確認できません。 完全に異なるモノが、 この特
異点に存在しています。 気をつけて』

二人のアルトリアからそんな忠告を受け、 気を引き締めて聖都へと向かう俺たちカル
デア一行。

道中、 十字軍の敗退に驚愕するドクターとの漫才もしつつ、 ダヴィンチちゃん特製マ
シンに乗って特異点の荒涼とした大地を走っていく。

だが。

その道中、 サーヴァントが対峙する光景に遭遇した。

アーチャーのサーヴァントと思われる男。

ハサンの一人だろうアサシンのサーヴァント。

助けに行こうとするも、 見たことのない緊迫感をにじませるダ・ヴィンチちゃんに制
止された。

曰く、「ギフト」であると。

その言葉を飲み込み、意味をかみ砕こうとする中、アサシンのサーヴァントがに取引を申し出た。

自分の命は差し出すから、後ろの民草のことは見逃してほしい……と。

だが――

「その必要はありません、というより……その男はその程度の取引では止められませんよ、アサシン。貴殿はまっすぐ村まで逃げなさい」

不意に、銀の輝きがアーチャーを斬り裂かんと空を走った。

遅れて深く美しい青の衣が優しく翻る。

……セイバーのアルトリアが、アサシンとアーチャーの間に割って入ったのだ。

「貴、方……は――」

「アサシン。ここは私が受け持ちます。どうか貴方は民を連れて逃れなさい。私の仲間が先導します。さあ、急いで！ こちらも時間はありません！」

「しかし、というか、貴様は……!」

「はいはいそこまでー。ホラ行くよ煙酔のハサン。こっちこっちー! みんなも早く!」

どこからともなく現れたキャスターのアルトリアが眩い紅蓮の焰を右手に灯し、高く掲げてアサシンと民を誘導する。

戸惑いを見せながらも民は静かに従い、数十メートルほど進んだと思われるところで彼らの姿は一切確認できなくなった。

恐らく、隠蔽の魔術だろう。

それを見届けたセイバーのアルトリアは、改めてアーチャーのサーヴァントと向かい合う。

「解せない。一度は私の元から立ち去ったというのに、何故反転してまで「アレ」に従っている? 変質の果てに畜生へと落ちたとはいえ、「アレ」も私に他ならない。私の知る貴卿は菌向かう勇氣を持ち合わせていたはずだ。だからこそ貴卿は私に諫言を残し、一度は円卓を立ち去った。「アレ」に貴卿が忠誠を誓う価値などない」

「騎士、王——」

「……もう一度問う。何故、眼を潰してまで、「アレ」に従っている?」

「……マシユ、さつき、胸が痛いって言っていたけど……」

「あのアーチャーも円卓の騎士、ということか。マシユに融合した英霊が反応しているんだろう」

「セイバーさんが言う「アレ」……これまでの状況から察するに、「獅子王」かと思われませんが……いったいどういうことでしょう?」

「んー……」「私に他ならない」って……また新しいアルトリアってこと?」

これで八人目である。

しかし、どうもセイバーのアルトリアは獅子王と思われる存在を余程嫌悪しているようだ。

これまでも、同じアルトリアの名を持つ英霊たちは自己嫌悪気味に度々喧嘩騒動を起こしていた。

セイバー称する「アレ」——獅子王と推測される英霊に対しては、一層拒絶の意を示している。

「——余計な時間を使ったな。この状況で必要なのは問答ではなく決闘か。……覚悟は出来ていような?」だが、退くのなら止めはしない。どうする?」

「私は、悲しい……何故、何故今になって現れたのです、王……!」

アーチャーの問いに答えず剣を振るうアルトリア。
不意に、脳内に声が響いた。

——マスター。今のうちに聖都へ行ってください。

——え、でも……いいの？

——彼とは知らぬ仲ではありません。キャスターもすでに避難誘導を済ませた
ようです。

——おう、ばつちりだよ。聖都でのフォローはわたしがやるからね。

——分かった。任せる。

「マシユ、ダ・ヴィンチちゃん。聖都へ行こう」

「そうだね。騎士王が時間を稼いでいるうちに進もうか」

「こそこそと、その場から立ち去った。」

難民の集団の護衛を行いながら、聖都を目指す。

道中、女性から話を聞くとところによると、十字軍は獅子王に滅ぼされたらしい。

獅子王もアルトリアだというのなら、一体なんのために？

また、月に一度、聖抜の儀という難民を受け入れる儀式があるらしい。

他にも、山岳地帯には山の民の村があり、そこに向かった民もいるらしい。

歩を進めるうちに、日も暮れ、夜闇に一带が覆われる。

そんな中でも、辿り着いた聖都の堅牢な白亜の城壁は堂々とその威容を示していた。

ひとときわ目立つのは聖都城壁の正門。

そこだけを空けるように難民のテントが大量に並べられている。

追いはぎ業者とのいざこざも流しつつ、聖抜とやらの開始をまつ。

アルトリアも揃って意味深な対応を示しており、一切気の抜けない状況だ。

不意に、視界が一気に明るくなった。

見上げると、いつの間にか昼になっている。

難民たちが狼狽えざわめく中、武装を着込んだ騎士たちの中から一際目立つ青年が進み出た。

その瞬間、難民たちがどっと歓声を上げる。

円卓の騎士——ガウエイン。

それを目にした瞬間、ダ・ヴィンチちゃんが顔色を変えた。

今すぐ離れろと言われても、どういうことなのか全く見当がつかない。

『ん？ マスターそこから離脱するの？』

「いや、その、まだ何が何だか……」

「キヤスター。君、獅子王の目論みに気づいていたね？」

『まあね。離脱するならしてもいいよ。ガウエインならわたしがブツ飛ばすから』

『とりあえず、通信に割り込むのはやめてくれないかなあ……』

ドクターのぼやきを聞き流しながらも、騎士の演説は続いていく。何処からどう見ても好青年そのもの、悪行を成すとは到底思えない。

異民族も異教徒も受け入れると堂々と宣言する。

その顔は、太陽のように難民たちに希望を予感させている。

しかし、その空気は不意に途絶える。

正門の上に立つ一人の影を何とか遠目で確認した。

その陰は静かにと難民たちにもむけて語りかける。

「あの声……」

「確かに、アルトリアさんと声質と酷似していますが、なんというか……」

「ああ。無感情というか……人間味がないというか……」

『惜しいね、マスター』

「どういうことですか？」

アルトリアはマシユからの問いに答えず、意味深に笑うばかり。

人影が言葉を締めくくった瞬間、白い光が一带を照らし始めた。

難民たちの群れをよく見ると、片手にも満たない僅かな人が、黄金の光を発していた。

不意に、背後から身を凍らせるほどの断末魔が響く。

その叫びを聞いた逃げ惑う難民がさらに表情を凍らせた。

「そ、そんな………よりによつて、こんな時に……！」

『い、一体何が!? 突然背後から新しいサーヴァント反応だぞ!? それも……騎士王と

獅子王に酷似している!! 新しいアルトリアさんだ!』

「な————どういふことだ!？」

思わずドクターに叫び問いかけた瞬間、笑い声が響いた。

「アハ、アハハハハハハハ！ キヤハハハハハハハハハハ！ 最高！ 本当に素敵！

やっぱり聖罰に合わせて殺すのが一番よね！ 溜飲が下がる、というのかしら？ 違う

？ まあなんでもいいわよね。サイツコーにハッピーなのは変わりないんだもの！」

その声に、骨が凍る。

聞き覚えがあるのに、聞き覚えがない。

背後を振り返ることが出来ない。

理性が完全に麻痺している。本能がうるさく危険を訴える。

「あら？ あらら？ ふ——うふふふ、ふふふふふふふふ！ あれかしら、朝の占いコーナーは見ていなかったけれど、わたしの運勢は最高だったのかしら。でも何人かつまらない騎士に取られちゃったわね。仕方ないからあきらめましょう」

殺意の視線。

憎悪も憤怒も嫌悪もなく、ただ「殺す」という意思しか背中には刺さらない。

「残りをわたしが頂けばいいだけだもの。それじゃ、そこを動かないでちょうだいね、カルデアのマスター？」

『ええい、この特異点には騎士王が何人いるんだ!? 藤丸君、聞こえてるかい?!』

「あ、やっぱりそこ聞いちやう？ まあお得意のアレがないんだから仕方ないわよねえ、魔術——いえネタバレはNGね。とりあえず、この特異点にはわたしと、あのいけ好かない王様の二人。そしてさらにカルデアから二人の追加注文が来たところかしら」

——追加注文wwww

——キャスト、真面目にしなさい。

脳内に二人のアルトリアの雑談が響く。

「へ——僕、いつの間に……?」

「さっきの光、一体……」

「あれ? えつと……私、殺されたはずよね?」

周囲の難民たちも戸惑い、見回している。

先程間違いないと殺されたはずの人も、五体満足で立っていた。

『うつそだろ……カルデアの機器すら気づかないほどの幻術に、あの大人数を対象にした転移魔術だつて!? そんなことが可能な魔術師が、一体どこにいるっていうんだい?!』

「いるじゃないか、この人理修復の旅における、最古参の一人がさ」

ドクターの慟哭ともとれる自問の叫びに、ダ・ヴィンチちゃんが冷や汗を流しながら応答する。

最後尾にいたはずだが、いつのまにか、集団の最前列に立っていた。

「先輩、あれ——」

マシユも確かに見ていた。

太陽の騎士と、凶悪な殺人鬼に対峙する、一人の少女。

白いドレスを纏った可憐な姫のような見目。

しかし、その実、強力な魔術師でもある根源接続者。

「……っ、アルトリアー！」

思わずその背中に叫んでいた。

焦燥に駆られる俺を安心させるように手をひらひらと振るアルトリア。

「自分や身内の不始末はしつかり処理しないといけないからねー。とりあえず、久しぶりガウエイン。相変わらずそうで何より。けど諦めるのは早いと思うよ?」

「……それを他ならぬ貴方が言いますか。いえ、そも何故今になって現れたのです。もはや何もかも手遅れになったというのに、何故今になって立ち上がるのです」

「あ、そういうくだりはいいから。さつきトリスタンにも似たようなこと言われたし。まあ、厳密に言えばわたしじゃないけどね? そのあたりは置いておこう」

「あら、どうりで聖都に騎士が足りないと思つたら。ええとその……どちら様だったかしら。とりあえずその騎士さんを相手取っているのはセイバークラスの貴方わたしだつてこ

とね」

「そうだよー。アイツも馬鹿だよねー。人の心が分からんとかほざいておきながらよくもまあ獅子王に従えるもんだ。獅子王^{アイツ}ってKYの権化みたいなものだよ?」

「そんなこと言ったの? わたしが言えたことじゃないけど、頭おかしいんじゃないかしら?」

「本当に人のコト言えねーな! ……いやまあ、わたしもなんですけどね?」

高度な自虐、と受け取るべき……なのか?

一見して話が盛り上がっているようだが、その実息苦しいほどの緊張感に満ちている。

難民たちも固い表情でアルトリアたちのやり取りを見守っている。

「でも、これは本当に急いだほうがよさそうだわ。とうとうカルデアのマスターが来てしまったもの。わたしの薔薇色ロマンス&パラダイスも終わりが近いということね。それじゃ……とつとつとそここのご馳走の山を平らげるとしましょう。でも、味わうことも食事には必要よね!」

「させるかよアンポンタン。何のためにわたしがわざわざ、そう……わ・ぎ・わ・ぎ!

「ここまで来たと思ってるの? 仕事だよ! あと暇つぶし!」

「え、殺したいからでしょう?」

「半分正しいのがムカつく」

「あら意外。どうせわたしなんだから、てつきり殺意に目覚めたのかと」

「それはお前だけだ。確かに同一存在だけど、もうすでにお前たちはわたし達から乖離し独立した存在になっているんだよ」

「……問答は無用でしょう」

アルトリアと殺人鬼の雑談を無理やり止めるように剣を構えるガウエイン。

それに呼応するように、双剣を握りしめる殺人鬼、そして掌を二人に向けるアルトリア。

「貴方たちはこの聖都を穢す害悪。即刻処理させていただきます」

「よく分かっているじゃん。アーサー王はどう頑張っても怪物でしかないってことだね」

「考えてみれば、怪物の王様も、忠誠を誓う騎士も、滑稽でしかないわよね」

その言葉を皮切りに、三つ巴の戦いが幕を開けた。

スーパードシキトリア大戦とはすなわち、特異点規模の自分殺しのことである。

シキトリアさんは基本的に自分が嫌い。

自分の嫌いなどがモロに出ている独立体は本当に不快。

というわけで新たな独立体

・獅子王

本質と称される。神霊化している。管理・保存が目的。

・殺人鬼

本性と称される。とりあえず人を殺すことが目的。殺意のアルターエゴとも。

く現在の第六特異点く

セイバー「何でアイツに従ってんの？ 人の心分らないって知ってるでしょ？」

トリスタン「勘弁してくれ（；ω；）」

キャスター「死ね」

殺人鬼「死ね」

ガウエイン「(何だか肩身が狭いなあ)」

ラン「なにこれえ」

アグ「なにこれえ」

獅子王「……」

ベデイ「あばばばばばばばばばばばばばばばば………」

???「すやあ(☒ω☒)」

モーさん「父上え………(、ω；；)」

??「どうしてこうなった(、o、)／」

「ニヤニヤ」

???「すやあ(—ω—)」

観測魔「おもろいことになったwww」

回線「(、ω、)／ウオオオオオアアアアア……ッ！」

明確に敵味方が二分されていない状況下での戦闘ほどやりづらいものはないと思う。

第五特異点でも、エジソンたち合衆国側と手を組む以前は少ないけれど頼れるサーヴァントたちと共に戦っていたけれど。

それでも、何をすればいいのか、この先どんな手をとってどのような道を進むべきか、ひどく迷った記憶が今も色濃く残っている。

だが、それに比べて、眼前で三つ巴の死闘を繰り広げるアルトリアは本当に迷いが無い。

ガウエインと殺人鬼も同様とはいえ、それでも長く共に旅をし、共にあらゆる戦いに身を投じ、仲を深めたからだろうか。

正直なところ、アルトリアが一切の迷いを見せなかったことには、非常に驚いた。

なにせ、彼女からは円卓の騎士たちの話を何度も聞いていたのだ。

深い信頼を寄せていた……否、今なお寄せていることを知っている。

アルトリアが常人の理解を超えた存在であることは知っていたけれど。

……いや。

俺は、ただ知っていただけなのかもしれない。

アルトリアの背後に展開された無数の魔法陣から次々と伸びる光の柱。

粛正騎士たちを焼きつぶしていく。

堅牢な銀の鎧はたちどころに砕け溶け、内側から鮮血が漏れている。

それ以外の一般兵士と思われる人々は、大した攻撃も加えることなく殺人鬼の刃に屠られていく。

魔術に焼かれ、双剣に斬られた騎士の死骸が白亜の聖都に見合わぬ装飾を施している。

そんな中でも、騎士ガウエインは毅然と立ち、太陽の聖剣を振るっていた。

殺人鬼と難なく斬り合い、降り注ぐ魔術の光を視線もむけずに回避する。

念話で伝えられる彼が所持している特殊能力——曰く、祝福ギフトと。

「不夜」と名付けられたそのチカラ。

彼の立つ地を永遠に昼間にし、聖者の祝福を永遠に持続させるもの。

……うん、無理ゲー？

なにせセイバーのアルトリアがまず勝てないと断言するくらいだ。

いやどちらにせよいずれは戦わなきゃいけないし倒さなければならぬのは確かなのだけだ。

ううーん……マジか……三倍パワーと真つ向からやり合うとか……どうしょ。

——夜にすれば問題ないって。

いや貴方はそうかもしれないけどね。俺たちはそうもいかないの。ていうかそんなこと出来るの？ まじで？

「じゃあやるね。といっても、三十秒だけなんだけど」

小さくアルトリアが呟いた瞬間、視界が一気に暗くなつた。

へ、と呆けた声を上げて空を見上げる。

そこにあるのは青空であるはずなのに墨汁で塗りたくつたように真つ暗である。

よく見ると、星々が輝いているのが見える。

「……ガチで夜になってるッ?!?!?!」

「さて、どこまで削れるかな?!

そう言い残したアルトリアはその場から掻き消えた。

何処に行ったかと辺りを見回したが、突如として打撃音が耳に入り、音のする方へと目を向けた。

だが、視界にアルトリアの姿を入れた瞬間、思わず目を疑ってしまった。

なにせ、ガウエインが思いっきりアルトリアに殴られていたのだから!

「魔術は対魔力で阻害できる? 悪いね、これ実は呪術なんだよ」

「ぐっ……お、のれ……!」

「あらあらまあまあ、さすがはわたし。性格悪いわあ」

魔術、いや呪術の炎がガウエインの肉体を灼く。

その間もアルトリアは容赦なく殴打をつづけている。

ガウエインの貌の中心に一発とても強い拳を叩き込んだのを合図に、空は黒から青に戻った。

「それじゃ、選手交代の時間だ。マスター！」

「えっ?!」

「わたしは殺人鬼^{アイツ}に専念する。だからガウエインはよろしく。倒す必要はないからね」

「ちよ、でも、え？」

「ああ……別に倒したいなら倒してきても構わないんだよ？」

そんな不吉な言葉を笑みと共に残してその場から転移するアルトリア。

あらためて太陽の騎士を見やる。

端正な顔は傷と血液に塗れ、鎧も一部が欠け、汚れに黒ずんでいる。

それでもなお、彼は静かにこちらを見つめ、聖剣の切先を向けた。

「……先輩」

「ああ。行こう、マシユ」

S i d e : アルトリア・ペンドラゴン

掌に魔力を込めて、敵に向けて放つ。

それを双剣で斬り伏せ、わたしに斬りかかる殺人鬼。

上体を傾けて回避。殺人鬼の腹部に掌底を叩き込む。

奴は吹っ飛んだけれど、くるりと宙で一回転し、着地して跳躍で刺突を試みる。

離れたりくつついたりの中の繰り返しの中で、わたし達は互いにその命を潰雷核そうと幾度と

なく殺意を攻撃に乗せて叩きつけている。

だがまあ、やっぱり自分であるというか。

中々決着もつかず、殺そうとして殺されそうになるの反復運動になっている。

「向こうが気になる？」

「そりゃあね。けど、今はお前が優先だ」

「ふふ」

会話も時折挟まれるけど、それでもどこか単調な殺し合い。

このわたしでさえ退屈さを感じているのだ。目の前の殺人鬼は苛立ちで頭が爆発しそうになっていることだろう。

—— マスター。ガウエインに集中して。

—— いや……そつちが色々ヤバすぎて集中できない！

—— え？ 何で？

「うふふ。あの騎士さんも何だかこつちを気にしているわね。何故かしら？」

「お前みたいなのやつが目と鼻の先にいたら誰だつて気にすると思うけど」

よくよく考えてみれば、根源接続者同士の戦闘をマスターは見たことがなかったか。両儀のヤツと一緒に某監獄塔まで殴りこんだことはあったけど。

カルデアに両儀が召喚されてから、真つ向から殺し合うことはなかったと思う。

結局、監獄塔はぶつ壊れちやつたからなあ。折角いい感じの遊び場を見つけたのに。後で直しとくか。

—— だから召喚当時、巖窟王は疲れた顔をしていたのですね……。

—— え？ そうなの？ 居合わせなかったから初耳。

「アルトリア!!! 念話で変な雑談するのやめて!!!」

「はい」

「あらあら、怒られちゃったわね？」

割と離れているし、向こうも戦闘真っ只中なのに、丁寧な声を上げるマスターは本当に律儀だ。

何はともあれ、マスターたちから見ればわたし達の戦闘は文字通り天災に見えているのだろう。

「まあなんでもいいさ。それに、もう頃合いだ」

「何を——ツ、……!?!」

冷気が肌を刺す。

吐息が白く染まる。

朽ちた荒野は、瞬く間に氷と雪に覆われていた。

『い、一体何が……?! 少しでも膨大な魔力の高まりを感知したんだけど!?!』

「心配はいらないよドクター。応援が来た、それだけだよ」

「どういうこと?! 説明して! ほう・れん・そう! 大事!」

「時には自分で考え自分で行動することも重要だよマスター」

「氷……まさか——」

何かに気付いたように舌打ちし、顔を歪ませる殺人鬼。

視線を向けると、ガウエインも同じような顔だ。

「すみません、遅くなりました」

「大丈夫、まだ致命的な痛手はない。あ、トリスタンは?」

「取り逃がしました。すでに聖都内に戻っているでしょう」

「そっか。それと、その馬鹿が問題の殺人鬼。あつちは祝福^{ギフト}ガウエイン」

駆け付けたセイバーと事務的に情報を共有する。

ガウエインの前に相対するのはマスターにマシユ、ベデイヴィエール。

「——って、ベデイヴィエール!? いつパーティに入った!? 割と奥の方にいたよね?!」 声掛けてくれるの待ってたのに!」

「戦闘中では掛けられませんよ。何せ、殺人鬼^{わたくし}と貴方^{たち}ですから」

「そうだけどさあ」

ちよつとへこむ、と思わず肩を落とした。

そしてマスターたちに加わったサーヴァントはベデイヴィエールだけではない。

本来であれば、彼女から放たれる魔力は赤雷のみだけれど、今回ばかりはその限りではない。

踏みしめる脚からパキパキと氷が生まれている。

「——ははっ、随分なツラじゃあねえか。なあ？ ガウエイン」

「モード、レット……！」

睨むガウエインに嘲笑を一つ向けて、モードレットは担いでいたクラレントを地面に突き立てた。

そこから膨大な魔力と冷気が発せられ、瞬く間に難民たちを遮る分厚い氷の壁を生み出した。

加えて、地面も見る見るうちに凍りつき、ガウエインと殺人鬼は足元を凍結され、動きが取れなくなっていた。

見る見るうちに視界が白く染まり、猛吹雪が聖都正門前で吹きすさぶ。

「今ここで殺してやりたいけど——」

「さすがに不可能でしょう。撤退しますよキャスター」

「りょーかい」

一気に上空へ舞い上がり、置き土産とばかりに特大の魔力光線を聖都の騎士たちめがけて放つ。

直撃と同時に爆発し、ピカピカと光が目を覆う。

それを確認してすぐにセイバーは難民たちへと振り返り、マスターたちを見据えながら叫んだ。

「撤退！」

「殿は任せろー！」

S i d e : 藤丸立香

集団の後方で浮いているキャスターのアルトリアの何と頼もしいことか。

無論、セイバーのアルトリアも、先ほど協力してくれたモードレットも強力なサー

ヴァントであることは間違いない。

これまで特異点を巡る中で、後方支援の重要さとありがたみを感じていただけであり、彼女の力にとても安心感を覚える。

当然ながら、油断はできない状況なのだけけれど。

数万をくだらない大集団を導きながら、今後の展望を話し合う。

「これだけの人数を共にするというのも、少し厳しいな」

『分割しますか？ 一応、避難先は三か所のあてがあります』

『三か所？ えっーと……モードレットと、ハサンと……ああ、あそこか。いいんじゃないかな』

『だから通信に割り込まないでと……それでは、集団を三分割し、それぞれ護衛をつけよう』

「まあ、俺らんとこも、何人も受け入れることが出来るわけじゃないしな」

素早く行動指針を立て、それに基づいた行動計画を立案する。

「それじゃあ、モードレット、キャストリア、俺たち、で別れようか」

『ベデイヴィエール。貴方はマスターたちについてください。私はキャスターと共に』

動します』

「……しかし、それではモードレット卿に従う難民たちを守る戦力が……」

「問題ねえよチキン野郎。別に俺は単独行動してるわけじゃねえんだ。仲間がいるからここにこうしてられる」

『そうだね。その辺りは確認済み。まだ戦力はいるから安心していいよ、ベディヴィエール』

「人数の調整もするんだろ？ 暗殺者の村だって、もともといる住人を追い出すわけにもいかねえんだから」

『大多数は我々が引き受けます。マスターたちが護衛する難民は、なるべく最小限にしましょうか』

キヤストリアが魔術を用いて難民たちに説明。

各々の事情に合わせた分割をセイバーアルトリア中心に行っていく。

途中、ベディヴィエールと難民との間で山の民に行う説明等の交渉も行われた。

しかし。

『ん？ ——あれ、聖都の騎士？ ……あ、ランスロットだ』

『エッ?! ……うわわ、本当だ! 皆、気を付けて! サーヴァント一騎と肅正騎士がた
くさん! こつちに向かっている!』

「! チツ——こんな時に、空気読めよろくでなしが!」

舌打ちと共にモードレットが剣を振るい、身も凍るほどの猛吹雪が騎士に向かって吹
きすさぶ。

さしずめ真冬の嵐、冬將軍といったところだろうか。

雪と氷に固められた真白の防壁が後方にどーんと出来上がった。

「おい、早めに別行動すんぞ! 俺んところは少し距離があるが、山の村はもう目と鼻の先
だ! 壁も吹雪も気休めにしかならん!」

「あ、ああ! ——みんな、聞いていたか? 俺たちのことはいいから、早く!」

「すまないな、少年! ……走れ————!!!」

怒号とも聞こえる叫びと共に走り出す難民のみんな。

モードレットも氷の壁と雪の嵐で別グループの難民を守りながら引つ張っていく。

すでにアルトリア二人は最多数の難民共々いなくなっていた。いや、いるのかもしれないが、隠蔽の魔術だろう。

逃がさんと肅正騎士たちが馬に乗って迫ってくる。

行動が早い。サーヴァント——アルトリアによればランスロット——が崩した壁から次々に鎧をまとった騎士が現れる。

こちらを囲もうとしているのか、左右に分かれて向かってくる。

「つ、先輩！ 追いつかれます！ わたしは、迎撃を——」

「いいえ、レディ。ここは私が……」

「いや、あの数はベディヴィエール卿じゃ無理でしょ。あー、残念。円卓の騎士がひとりだけなら任せただけだな」

「ダ・ヴィンチちゃん!? ちよつと、なんでバギーになんか乗ってるの?!」

そこからは单身自爆特攻しようとするダ・ヴィンチちゃんとの押し問答だ。

本当の出番だとか、最後の出番だとか言っているけれど、冗談じゃない。

ダ・ヴィンチちゃんは俺たちになくてはならない存在だ。こんなところで失う訳には
いかない!

『大丈夫だよマスター。生存の保障はできるから』

「キャストリア……」

『まあ実際、誰かがランスロット達を押し留めなきやいけないわけだし？ それに最終的には……』

「ん？ 何か言ったかい、アルトリアちゃん？」

『べつつにー！ ほら行ってきなよダ・ヴィンチ！ アルトリア、ド派手な打ち上げ花火見たいなー！ 下からと横から、どっちかな！』

「うーん、このクズっぷり。殺人鬼もかくや。まあいいや。それじゃあ、仕事をしようじゃないか。ダ・ヴィンチ、行きまーす！」

そう言って、そのままダ・ヴィンチちゃんは行ってしまった。

原作通りなところは飛ばすなりはしよるなりしていきます。

「凍結」

モードレットの祝福。^{ギフト}（厳密には異なる）

氷の生成・雪の発生などを行使する。

今回に限り、モードレットは「魔力放出（氷）」を取得している。

シキトリアさんたちが向かった先はランスロットの難民キャンプ。

まだ話についていないけどまあ大丈夫、と楽観的に考えている模様。

〽両儀のヤツと一緒に某監獄塔へ殴りこんだ

〽四日目〽

両儀「こんにちは」転移

ジャンヌ「!？」

巖窟王「」

〽六日目〽

シキトリア「はろー！」爆発

ジャンヌ「ひえっ」

天草「フアーwwwwwwww」

巖窟王」

単独顕現の無駄遣い。

ちなみにシキトリアさんは式↓式ちゃん、「両儀式」↓両儀、と呼び方を変えています。

「この後の第六特異点」

キャスター「やあ」

セイバー「やあ」

ラン「アイエエ!? ワガオウ!? ワガオウフタリナンデ?!」

モーさん「ただいまー」

?? 「おかえり」

??? 「相変わらずそうだな」

?? 「だな」

??? 「(☒ω☒) スヤア」

??? 「しばらく静観」

??? 「すやあ(ーωー)」

ガウエイン(凍結)「さぶい…」

殺人鬼(凍結)「ピキピキ(ω、#)」

観測魔「もりあがってきた」
回線「うわぁ……」

S i d e : アルトリア・ペンドラゴン

さて変わりましてこちら深夜のランスロットの難民キャンプ。

わたしたちが護衛していた集団とこちらに元々いた面々で知り合いも何人かいた模様。感動の再会があちらこちらで起きていた。

その後、戻ってきたようやくランスロット（瀕死のダ・ヴィンチもいた）と交渉し、彼らを受け入れることにした。

余裕なんてないだろうに、それでも預かってくれるわけだから、こちらも相応の働きをしないとイケない。

難民や騎士の生活環境を整え、この地を護り隠す結界を張り、ハサンたちの村やモードレットの城との連絡役を請け負った。

要は雑用係である。

ぶっちゃけランスロットと彼に従う騎士、そしてわたし×2という過剰戦力でやるこ

となんてないんだなこれが。

本来ならダ・ヴィンチにも手伝ってもらいたいところだけど、あの怪我ではそうも言っていられない。

「ふふふーさすがはランスロット、縮めてさすラン。獅子王の命に馬鹿正直に従わないでこういうことしちゃうんだもんねえ」

「そうですね。現実を受け止めながらも柔軟に対応し、打開策を作り出す。自分が思う、最善を諦めない」

「円卓における最高の騎士にふさわしい。だからこそ、わたしはお前を重んじたんだし、ギネヴィアを託したんだから」

「……恐縮です」

「あれ、わたし変なこと言った？ 顔しつばいよ？」

「またしても人の心が分からなかったか。」

「いえ、なんでも。——それで、王よ。今後はどうなさるおつもりですか」

「機を見て聖都に攻め入る。モードレットも一緒だし、エジプト側も引き込むよ。けどそれはもうちよつと先の話だと思おうな」

「オジマンディアス王と交渉する必要もありますからね。他のサーヴァントと連携をとるにも、準備が必要です」

「少なくともレディが復帰するまでは待つということでしょうか」

「そうだね。それまでに、特異点放浪してる三蔵ちゃんも引き込んで、アグラヴェインに捕まってる人も救出しないと」

アトラス院の件はひとまず黙っておこう。

今後の見立てを頭の中に描いて行動を決めようとしていると、渋い顔のランスロットがこつちを見ていた。

「……………どうしたの?」

「その……………非常に伺いにくいのですが、王は他の騎士を断罪なさるおつもりですか?」

「へ? なんぞ?」

「いえ、その、あまりにも迷いが見られないというか……………」

「迷うも何も……………カルデアに敵対する行動をとっている以上、連中はマスターの敵。つまりサーヴァントであるわたしの敵だ」

「敵である以上、攻撃の手は緩めませんし、人理を汚す目的と、それに加担する行為は決して許されるものではありません」

「だから戦う。——ふむ、ランスロットのいう「断罪」は少し違うかな。あくまで敵は敵、それ以上でも以下でもない」

「なるほど。お考えはよく分かりました。では不詳ランスロット、王の意に従い、我が剣

でもって敵を討ち滅ぼしましょう」

渋い顔は消え、生前見慣れた冷静な面持ちのランスロット。

何やら変なことをいったかと不安になったが、杞憂だったようだ。

……いやまあ、彼が隠しているだけ、という可能性もあるけれど。

いかな、ヘコみそうだ。とりあえずこの件は置いておこう。

「さて、ダ・ヴィンチの一命も取り留めなし、マスターんどこ行ってくるか。セイバー、伝言ある？」

「いいえ。ああでも、日頃の鍛錬を忘れぬよう、伝えておいてください」

「王は、カルデアのマスターに剣を教えていらっしやるのですか？」

「私だけではありませんよ。彼に、モノを教えるサーヴァントは何人かいます。そちらからの宿題も、忘れないように」

「りょーかい。んじゃ、行ってきまーす！」

「……とまあ、ダ・ヴィンチは無事だから安心してね。それと、剣もそうだけど、魔術の練習もお忘れなく」

「分かった。ありがとうアルトリア」

マスターに僅かながら落ち着きが戻っている。

夜が明けないうちに到着したため、朝になるまで待っていたのだが、随分と驚かれた。ていうか百^{HSN80}貌からは攻撃された。

解せぬ。

冬木のこと覚えてんのかな。

覚えているといえば、呪腕先生とアーラシユ氏にも意味深な視線が向けられているよな。

後者は多分人違いだとおもうんだけどね。

「さて、そっちは何か問題等あるかな？」

「うーん……やっぱり、みんな顔が重苦しい、というか……あんなことがあったから、仕

方ないと言えそうなんだけど……」

「まあね。こればかりは、時間をかけるしかない。火急の知らせとかは？」

「ちよつと、食糧が足りないかな？」

それは死活問題だろう。

わたし個人の考えだが、人間の三大欲求のうち、食欲ほど困るものはないと思う。

睡眠欲は眠くなったら寝るし、性欲も自家発電でまあどうにかなる。

しかし食欲は、食べ物がないらどうにもならない。

カルデアからの支援も、村で育てているだろう作物も、そう多くないはずだ。

これは早いうちに俵さんに来てもらわねば。

つまり三蔵ちゃんを探さないで。

「食糧関係はアテがある。というのも、アグラヴェインが拘束しているサーヴァントに、

食べ物出せる宝具を持つ男がいてね」

「そんな宝具あんの!？」

「あるんだな、これが。彼を救出すればきつとどうにかなる。——そういえば百貌、ハサ

ンの一人に捕まつてる子いたよね？」

「き、貴様なぜそれを……」

「そりゃ調べたもん。どうせだし、今からこつそり連れてくる?」

「昼間はさすがに目立つんじゃないか？ やるなら、夜の内がいいと思うな」

「空間転移ができれば、どうとでもなったんだけどね」

上手くないかないものだ、と嘆息した。

「連絡事項はこんなものかな？ 今からモードレットのところに行くけど……折角だし、マスターも行く？ マシユも一緒にさ」

「いいのか？」

「向こうの事情もある程度把握しておいた方がいいぜ？」

「そう、だな。わかった。あんまり時間は掛けられないけど……」

「大丈夫、手早く済ませるからね」

S i d e : 藤丸立香

村がある山々の麓と砂漠の境界周辺は、妙に雪が降り積もっている。

雪だけではない。大地の一部は氷に覆われ、さらに一部は氷に変化している。

「寒いでしょ？ ほら、上着」

「ありがと、つて、どこから取り出したんだ？」

「ただの虚数魔術だよ？」

「そんなさらつと説明するものではないですよね？」

雪原地帯に入ったときは、まだ青空が顔をのぞかせていた。

だが、少し進むと雪が降り始めた。

「ニトクリスみたいにな、天候もある程度操れるものなのかな？」

「オンオフぐらいは可能だと思っよ」

村に来たばかりのころ、アーラシユから聞き及んでいたモードレットの領地。

曰く、「どっからどう見ても目の上のたんこぶなのに全然攻め入ることが出来ないし

何度も嫌がらせされて腹が立ってる」とのこと。

聖都の騎士からみればモードレットは間違はなく叛逆者。

オジマンディアス王から見れば勝手に自分の領土を凍りつかせる侵略者だ。

故に、双方から幾度となく攻撃されてきたようだが、その悉くを退けたらしい。

おまけに何度かちよつかいもかけていたとか。

「確か、サーヴァントも複数名滞在している、という話でしたが」

「円卓の騎士はモードレット含め合計三人。彼らに協力しているサーヴァントは二人。アーチャー・エミヤとランサー・クーフリーン」

「なんと」

予想外の組み合わせだ。

しかも中々充実している。

「ああでも、円卓の一人……確か、パーシヴァルだったはず。彼は戦死したって話だったかな。あつちのまともな戦力は四人だね」

「では、モードレット卿と、あと一人とはいったい？」

ベデイヴィエールは出立する俺たちに同行を願いだした。

彼も彼なりに思うところがあるのだろう。

「——サー・ケイ。ケイ兄さんだよ」

「……心は痛まないのでしょうか。苦楽を分かち合った友と対峙するなど——」
「余計な気遣いは要らないと思うけどな。その辺の分別はちゃんとついでるでしょ」
「つ！……申し訳ありません、王」

基本「それも有り」な姿勢のアルトリアには珍しい、咎めるような口調。

ちらりと向けられた目線からも、ベディヴィエールの発言に対する不満が表れている。

目に見えて悔いをにじませる彼に、俺は思わず助け舟を出した。

「いや、友と戦う覚悟を決めたって、何も思わないはずはないと思うけどな。だって、一緒に戦い抜いた仲間なんだから」

「——そういうもの？」

「ああ。その覚悟だって、悲しくて、悔しくて、泣きたい思いを抱きながら、どうにか下した決断だと思う」

「ふうん……？」

上手くフォローできたかは分からないけど、不満げな表情は消えていた。

このあたりは考え方の違いだろう。

特に、アルトリアは、かつての配下に深い親しみの情を抱きながら、敵なら敵とあっさり割り切って行動している。

「それでも獅子王に従うのは理解できないなあ。特にトリスタン。いや、前から何考え
てんだかよく分かんなかったけど」

「あの、これは個人的な推測なのですが、きつと、「最後まで従うことが出来なかった」こ
とを悔やんでいるのではないでしょうか」

「……？ 何で？」

「それは、その……多分、円卓の方々は、アーサー王の剣として、忠義を果たすことこそ
が、生前抱いた望みだったと思われます。けれど、それが果たされることはありません
でしたから……その悔いこそが、獅子王に従う理由なんじゃないかって……」

マシユは自分の推測を述べているが、いまいち自信が持てないのか、いささか弱い口
調だ。

「——つまり、わたしのせい？」

「違います。それは断じて違います」

しかし、アルトリアの問いには打って変わって毅然とした声で否定した。
……もしかしたら、マシユが宿したという騎士の叫びなのかもしれない。

「考えても仕方ない、か。生前に關して言えば相互理解を完全放棄してたわけだし。いい加減、溜まりに溜まったツケを払わないとね」

「とんだ駄目王じゃん……?」

「わたしもそう思う。今にしてみれば、何で王をやろうと思ったのやら」

「とんだ駄目王じゃん!!!」

頼むからしつぱい顔した二人のためにも少しは格好いいところみせて！

降っていた雪はいつの間にか吹雪へと変わっていた。積もった雪に足をとられ、思うように進めない。

おまけに視界は真っ白で向こうに何があるのかもわからない。

これはエジプト・聖都が手こずるのも納得がいく。

「もう少しだよ。ここままでくれば迎えに来るはずだから」

虚数魔術で渡された手袋とマフラーも付着した雪で白く染まっている。

マシユの鼻先も朱い。ベデイヴィエールも険しい顔だ。

「さてこの辺でいいかな？ それっ！」

アルトリアが上空に打ち上げた光弾が、花火の様に爆散する。

それを合図に、積もった雪を舞い上げるほどの強風が嘘のように納まった。

吹雪に隠されていた影が、カーテンを開く様に現れた。

「――ご足労、感謝するキャスター。それと、カルデアのマスターもな」

カルデアの厨房で見慣れた外套の弓兵。

普段、優しく向けられる眼は俺を値踏みするように鋭くみつめている。

思わず背筋が伸びるが、かばうように前にでたアルトリアに視線が向けられた。

「こちらこそアーチャー。一応、彼がマスターの立香。あと彼女はマシユ。そして——」
「サー・ベディヴィエール……獅子王の招きに応じなかった騎士の一人、か」
「そ。とりあえず、こつちがどんなものか見せたいから、案内よろしく。」

道中、連絡事項があつたら聞くよ。あと、誰かに伝言あつたらそれも聞くけど」

「伝言はない。では、こちらの状況だが、ランサーが殺人鬼と交戦してな……」

「うつそ、マジ？ 先輩大丈夫かな……」

雪は相変わらずしんしんと降り注いでいるが、先ほどの俺たちを拒むかのような冷徹さは感じられない。

むしろ、この優しい雪は、歓迎しているかのようにも思える。

並ぶ二人の背中を追いかけて、さっきまでよりは幾分歩きやすい雪原を進んでいく。隣を歩くベディヴィエールの顔は、険しいままなのが気になった。

「ベディ？ どうかした？」

「あ——いえ、その……少し、信じられなくて」

「何が？」

「あのモードレット卿が、こうして王に叛き、自らが治める地を築いている、というのは、

「何とも複雑な気分です」

伝承に曰く、モードレットは自らが王の子だと明かし、王位を譲り渡すよう求めたが、それは却下された。

それは、ブリテンが終わりを迎えかけているからだ、アーサー王は静かに説いた。実際にこの直後、「ソラから降りしモノ」たちによって、ブリテンは一度徹底的に蹂躪されてしまうのだ。

神秘の世界では「朱い月のブリュンスタッド」と呼ばれているらしい、人智を超えた怪物たち。

それらの攻撃から民を守るために、アーサー王は民と騎士を残して、終幕戦争に身を投じるのだと。

「終幕戦争の後、モードレット卿が王となることは一度としてありませんでしたから……だから、どうも、奇妙というか」

「そうですね……わたしも、何故か不思議な心地です」

感慨深く頷くマシユとベディヴィエール。

どうにも話に入れない。

「あ、マスター！ 見えたよ、ほら！ あそこ！」

幾分の寂しさを斬るように前方のアルトリアが振り返って声を上げる。

駆け足で彼女のもとに辿り着くと、すぐにその威容を視認できた。

その真白き城壁は聖都のそれと同一の物。けれど蒼き氷に包まれ美しく飾られている。

エミヤが皮肉げな笑みを浮かべてこちらを見た。

「何はともあれ、ようこそ。この凍結雪城——フローズン・キャメロットへ」

書けばすぐ終わるのになかなか進まない。

根本的に私に小説執筆は向いていないのだろうか。

とか考えてますがとにかく、このスーパーシキトリア大戦は完結させます。まえがきの小ネタもお披露目する機会があればいつかまた。

*凍結雪城（フローズン・キャメロット）

モードレット、ケイ、エミヤ、クー・フリーンが拠点にしている。氷と雪に覆われているのはどうも事情があるようで……？

く現在の第六特異点く

ダ・ヴィンチちゃん「(☒ω☒)スヤア」

ラン「大丈夫かな王……」そわそわ」

セイバー「……ランスロット卿？」

サリアさん「久しぶり……？」

呪腕先生「う、うむ……」

殺人鬼「先輩チツスチツス！ さあその心臓貰い受けるわ！」

槍ニキ「いやそれ俺の台詞！ 舐めた口利くな後輩！」

キヤスター「シロウのご飯食べたい」

赤弓「……少しは我慢したまえ」

モーさん「父上まだかなワクワク」

ケイ兄さん「はよ来いやイライラ」

「(☒)ω(☒) スヤア」

「砂漠いくか」

「(ーωー) ムニヤア」

観測魔「なるほど、こういう分岐を辿ったわけね」

回線「こういう可能性もあるんですね……」

肌を包む冷気。

吐く息は白いが、不思議と悪い気はしない。

城門をくぐり抜けると、城壁同様に氷と雪で飾られた美しい街並みが視界に広がった。

ちらほらと厚着をした民草も見られる。

そんな中、ひとときわ目立つ、白銀の鎧を纏った騎士らしき男が待ち構えていた。

「ようやく来たか。つたく、待たせやがつて」

「こんな立地に拠点構えてるヤツには言われたくないなあ」

「地べたに雑魚寝する馬鹿がよく言う」

白銀の騎士は開口一番にぶっきらぼうに言い放つ。

それに立ち向かうようにアルトリアが言い返すが再び騎士が肩をすくめて悪態をついた。

……彼が噂の「ケイ兄さん」ことサー・ケイか。

「おう、お前らがカルデアの使者か。——つたく、まだガキじゃねえか。おまけに小娘の方は「アイツ」を宿しているときた」

「そりや魔術師が設立した組織だからね。後ろめたいことの一つや二つ、やってるに決まってるじゃん。むしろやってないほうが変」

「なんだ、あの分け解魔法使用らん連中とつるんでるうちにお前まで魔術脳になっちまったのか？ こりや本格的におしまいだな」

「まあわたしがブリテンの王なんざになつてる時点で末期も末期なんだけど。もしかして姉貴にさっさと譲った方がよかつた感じ？」

「やめろ笑えない」

「やだなあ冗談だよ。まあ姉貴が王になつたところで朱い月には勝てないからどつちにしる変わんないね、是非もないネ！」

きゆるん、と音が付きそうなわざとらしい猫なで声のアルトリア。

ケイ卿は気色悪いものでも見たかのように青ざめた顔で俺に視線を向けた。

「……おい、カルデアの。コイツ何か変なもん食ったのか？」

「いつもこんな感じですよ」

「残念だったな兄貴。真面目担当のセイバーなわたしは絶賛別行動中だ」

「現在カルデアには計七騎のアルトリアさんが召喚されています」

「うそだろ」

「キャスターのアルトリアは割と大人しい部類だよね」

「うっそだろ……」

愕然と絶望が入り混じった顔でため息を吐くケイ卿。

「生前はふざけることがほとんどなかったから……」

「それにしたって度を越してると思うんだ」

「サー・ケイ。あまり深く考えないことだ。聖杯戦争だからな、レースだったりはじめ

のお〇かいだったたりすることもある」

「どういふことだよアーチャー……」

アーチャーのフォローになっていないフォローに思わず膝をつくサー・ケイ。

やはりエミヤはエミヤだったようで、とても冷静な面持ちで意味の解らないことを

言っている。

「まあわたしのことはいいんだよ。今日はマスターたちにこの街を見せたくてね。あとこの氷がどうやってできてるか、とか」

「そうか。——遅くなつたが、よく来たな。改めて、俺がケイだ。我が王が迷惑をかけている」

「マシユ・キリエライトと申します。こちらはマスター・立香。そして——」

「お久しく、サー・ケイ。不詳ベデイヴィエール、この一大事に遅参した次第です」

「おう、話は聞いている。それで？ カルデアのマスター。お前はこの永久凍土のエセ王国まで、何の用で出張つてきた？」

「——このフローズン・キャメロットがどう成り立っているのか、獅子王と貴方達の間は何があつたのか、教えてくれないか」

あとモードレットが操る凍結能力も、と付け加えた。

俺はケイ卿を真つ直ぐに見つめる。俺の視線から何を感じたか、フンと鼻を鳴らして踵を返した。

「こつちだ、ついてこい」

そう言つて、すぐさま歩き出すケイ卿。

俺たちも慌てて彼の背を追つた。

「——若いな」

「何。昔の自分を重ねちゃった？」

「まさか。確かに未熟ではあるがね」

「相変わらずの幸福アレルギー、嫌いじゃないよ」

「……悪趣味にもほどがあるぞ」

フローズン・キャメロットは規模こそ聖都より小さいけれど、構造は似通っているらしい。

攻め入るときの参考にしたらどうだ、とケイ卿は皮肉げに口の端を歪めた。

「最上部が玉座の間、それは向こうも変わんないよ。……まあ、向こうに比べると、こっちの方が少し小さいから、高度も低めかな？」

「なるほど……この先に、サーヴァントの気配がありますが」

「モードレットだ。——ったく、使っ走りさせて、自分は玉座の間で待ち惚けか。本気で王にでもなつたつもりかよ」

「まあまあ、わりかし立派にやれてるからいいじゃん。生前のわたし、あの子は王に向いてないとか思ってたけどねー」

赤っ恥だ、とアルトリアは言うものの、声色も表情も嬉しそうだ。

青白い廊下を歩く。

外以上に冷気が満ちている。

すごく寒い。

歯はガチガチとなっていて、指先が朱くかじかんでいる。

薄着のアルトリアは見ているだけで寒気がする。

「あの、何故こんなにも寒いのですか？」

「凍結を引き起こしているのがこの先にあるんだよ。モードレットの凍結能力も元々はそれが由来……いや、与えられた、というべきか」

「上手く考えたよね……ていうか兄貴、わざわざあの子に付き合ってたんだね？」

「アイツがああもはつきり別人なんて断定したんだ、何かあると思うのが当然だろ」

「そっか」

アルトリアのモードレットに向けた親愛の情は限らない。

ある意味、サーヴァントとして現界からこそその態度なのかもしれない。

「ついで、玉座の間だ」

サー・ケイが扉を開くと、そこに一人の騎士が立っていた。

……モードレットだ。

「おう、よく来たな」

「のんきなことだ、説明はお前がやれよ」

「わーつてるよ。——見てくれ、このお方がフローズン・キャメロットの中核だ」コア

モードレットが掌で示すモノ。

それは、玉座——否、棺だろうか。

簡素だが立派な椅子にも、単なる箱にも見える。

玉座に座っている／棺に入っている人物は、見覚えのある顔だった。

見覚えどころか、何度も見てきた顔だ。

「アルトリア……?」

瞳は固く閉ざされている。

だが、美しい金の髪も、愛らしい顔立ちも、紛れもなくブリテンの少女騎士王そのものだ。

死んでいるように眠っている。大きな氷の塊に、封じ込まれている。

「三人目、だよ。——この特異点に存在するアーサー王は、もともと三人なんだ」

「殺人鬼が自らを『本性』と称して、獅子王を『本質』と呼んだ時に、思い至ったんだ。お前も魔術師の端くれなら知ってるだろ? 人間を構成する三要素。精神、魂、そして

——」

肉体、と我知らず呟いた。

「本来、肉体に意識は芽生えないはずだけど、さすがの緊急事態だからかな。モードレットに能力だけ渡して休眠状態に入ったのか」

「はい。こちらの父上とは数分も会話しておりません。最低限の情報交換後、この玉座にお座りになられ、城が形成されました」

「それはまた大掛かりな……まあ、正真正銘の根源接続者だから、存外やれたのかもしれないね。聖杯の縛りもないだろうし」

「で、では、王もこのような城を生み出すことが出来るのですか……!? もしや、あの聖都も獅子王が生み出したのですか……?」

「生前の私は自分の能力に縛りをつけていたけど……まあ、やれないことはないよ。聖都の方は——獅子王^{アイツ}が作ったのは事実だけど、違うね。あれは別物だ」

「頭がおかしいくらいにぶっ飛んでたからこそ、輪をかけて頭がおかしい連中の弟子になつてた——って、お前は知らねえか」

『終幕戦争で朱い月や大蜘蛛と戦った面々のことだね。ルキウス帝が唯一の真つ当な人間……いや、彼も大分おかしいけど』

「は、はあ……ですが、マーリン殿も、王を導かれていたのでは?」

「アイツ最終的には塔に幽閉されてたし……ぶっちゃけ剣術ぐらいしか教わってないし。魔術云々はドクターが言う四人の師匠から教わったよ。宝石魔術、錬金術、ルーン魔術、その他諸々」

冠位の癖に魔術が苦手とか馬鹿なんじゃねえの、と口をとがらせるアルトリア。

どういふ訳か、ドクターは苦笑を漏らしていた。

「最初は暗殺者の村にいたんですけどね……こちらの父上を、放っておけなくて」「いや、ちゃんと守って正解だと思うよ。魂あと精神二なら、肉体を手中に収めようとするだろうし」

「殺人鬼と獅子王は、このアルトリアさんの存在を気づいていないのですか?」「だと思う。……まあ、中々気付けないものだよね。両儀アイツしかり、岸波あの子しかり」
ぼそりと呟くアルトリア。

僅かにしんみりとした雰囲気を纏ったものの、次の瞬間には掻き消え、俺に顔を向けた。

「以上、フローズン・キャメロットの状況でした。何か質問は?」

「特には無いけど……」

「まあ、まだ特異点に来たばかりだし。ああ、言い忘れていたけど、凍結雪城コウゲツユキと暗殺者の村は協力関係だよ。今後、何かあったらこっちのサーヴァントとも協力していくからお忘れなく」

それじゃ、帰ろうか、というアルトリアの一言で、締められた。

ふははははは、ははははは。

玉座の間。

この特異点において、そう呼ばれる空間は三件存在する。

聖都の塔最上階。エジプト領ピラミッド。フローズン・キヤメロット凍結雪城最上階。

唯一、高笑いが響く、ここはその一つ、ピラミッド。

オジマンディアスの宝具でもある固有結界の最奥だ。

本来、そこに居るサーヴァントといえは主の太陽王とそばに仕えるニトクリスのみ。
しかし今は二人の来客を迎えていた。

「ふ、我ら天地驚愕の同盟に敵などなし」

「うむ。黄金は最強である」

一人はギルガメッシュ。

メソポタミアはウルク、第一王朝第五代王。

そして――

「こちら！ 貴方、このピラミッドで眠りこけるなど、不敬ですよ！ 起きなさい！
ちよつと！」

「んん……むにやあ……」

――アルトリア・ペンドラゴン。

ブリテンの騎士王。

何故この二人がエジプト領に、ひいては特異点にいるのかといえは。

アルトリアが自らの常軌を逸した能力を駆使してやってきたのである。
ちなみに言いだしつぺはギルガメッシュ。

曰く、新婚旅行だと。

何を隠そうこの二人、とある世界線で婚姻を結ぶまでの仲になったのだ。

馴れ初めを全て話すと日が暮れてしまうが、早い話が聖杯戦争で受肉したのである。

そう、アルトリア回線のコテハン「A U Oの嫁@冬木の独立体」本人である。

201 人目の騎士王さん

場が混沌としてきた

誰か情報まとめてー

202 人目の騎士王さん

特異点の俺ら

・獅子王（魂）

・殺人鬼（精神）

・氷人形（肉体）

∴以上三名は聖剣返還の失敗により生じた独立体
特異点修正と共に消滅すると思われる。

・A U Oの嫁

∴こいつは何故か転移してきた（w i t h A U O）

・セイバー・青

・キャスター・白

∴カルデアのサーヴァント（増えるかも）

203 人目の騎士王さん

乙

204 人目の騎士王さん

合計六人か・・・

205 人目の騎士王さん
何でこんなにいるんだか

206 人目の騎士王さん
観測魔どうした？

207 人目の騎士王さん
腹筋崩壊してんじゃね？

208 人目の騎士王さん
こっちは胃が崩壊しそうなんですけど……

209 人目の騎士王さん
新婚（百年経過）

210 人目の騎士王さん
嫌な予感しかしない／（＾o＾）／

ようやく登場人物全員の名前を出せたぜ……！

殺人鬼（精神）と氷人形（肉体）は獅子王（魂）が神霊へと変生する過程で零れ落ちた存在。

もし精神あるいは魂が肉体の存在を感知したら全力で手中におさめようと思われる。

とりわけ精神はその不安定さ故に肉体はのどから手が出るほど欲しい。

魂は死活問題というわけではないものの、対エジプトの兵器や断罪の装置として活用したい。

A U Oと独立体

特筆事項はない。本当にいるだけ。傍観者だが接触はする。ちなみに彼らの視点では第四次直後の受肉から軽く百年経過。その間ずっと世界線をめぐる旅をしている。万年新婚旅行。

く現在の第六特異点く

キヤスター「よし帰ろう」

ぐだ男「さぶい」

マシユマロ「が、頑張りましょう」

ベデイ「事態は私の理解を超えている……」

モーさん「父上また来るかな？」

ケイ兄さん「甘えん坊かよ」

赤弓「また料理をふるまいに行くか」

氷人形「(☒ω☒) スヤア」

殺人鬼「殺意」

槍ニキ「(さすがは妹弟子にして後輩)」

